蠅男

海野十三

青空文庫

発端

問題の「蠅男はえおとこ」と呼ばれる不可思議なる人物は、案外その以前から、われわれとおなじ空気を吸っていたのだ。

只われわれは、よもやそういう奇怪きわまる生物が、身边ただ近くに棲息せいそくしていようなどは、夢にも知らなかつたばかりだった。

まことにわれわれは、へいぜい目にも耳にもささどく、裏街の抜け裏の一つ一つはいうにおよばず、溝板どぶいたの下に三日前から転がっている鼠ねずみの死骸しがいにいたるまで、なに一つとして知らないものは

ないつもりでいるけれど、しかし世の中というものは広く且つ深く、かずかずの愕おどろくべきものが、誰にも知られることなく密かに埋没まいぼつされているのである。

この「蠅男」の話にしても、ことによるとわれわれは、生涯この奇怪なる人物のことをしらずにすんだかも知れないのだ。なにしろこの「蠅男」がまだ世間の注意をひかないまえにおいては、これを知っていたのは「蠅男」自身と、そしてほかにもう一人の人間だけだった。しかもその人間は、事実彼の口からは「蠅男」の秘密をついに一言半句いちごんはんくも誰にも喋りしゃべはしなかつたのだから、あとは「蠅男」さえ自分で喋らなければ、いつまでも秘中の秘としてソツとして置くことができたはずだった。「蠅男」も決して

喋りはしなかった。なんといつても彼自身の秘密は、世間に知られて好ましいものではなかったから。

それほど堅い大秘事が、どうして世間に知られるようにはなかったのでしょうか？

それは、臭い^{にお}であった。

煤煙^{ばいえん}の臥床^{ふしど}に熟睡していたグレート大阪^{おおさか}が、ある寒い冬の

朝を迎えて間もないころ、突如として或る区画に住む市民たちの鼻を刺戟した淡い厭^{いや}な臭気こそ、この恐ろしい「蠅男」事件の発端であったのだ。

みょうにお
妙な臭い

大阪人は早起きだ。

それは師走しわすに入つて間もない日の或る寒い朝のこと、まだあたりはほの明るくなつたばかりの午前六時というに、商家の表戸はガラガラとくり開かれ、しもた家では天窓がゴソリと引き開けられた。旅館でも病院でも学校でも、鎧戸よろいどの入つた窓がボタンボタンと外へ開かれ、遠くの方からバスのエンジンの音が地響をうつつて聞えてくる。……

「なんやら。——怪けつたいな臭かざがしとる」

「怪つたいな臭？——やっぱりそうやった。今朝からうちの鼻が、どうかしてしもたんやろと思とつたんやしイ。——ほんまに怪つたいな臭やなア」

「ほんまに、怪つたいな臭や。何を焼いてんねやろ」

旅館の裏口を開いて外へ出たコツクとお手伝いさんとは、鼻をクンクンいわせて、同じような^{しぶつら}渋面を作りあつた。

ここは大阪の南部、住吉区^{すみよしく}の帝塚山^{てづかやま}とよばれる一区画の朝だった。

「この臭は、ちよつとアレに似とるやないか」

「えッ、アレいうたら何のことや」

「アレいうたら——そら、焼場の臭や」

「ああ、焼場の臭？」お手伝いさんは白いエプロンを急いで鼻にあてた。「そうやそうやそうや。うわアこら焼場の臭いやがナ」
そのうちに、臭いを気にする連中が、あとからあとへと起きてきて、てんでに廂ひさしを見上げたり、炊きつけたばかりの竈かまどの下を気にしたりした。だがこの淡い臭気が、一たい何処から発散しているものか、それを突き止めた者は誰もなかった。

ワイワイと、近所の騒ぎはますます激しくなっていた。しかも臭気はますます無遠慮ぶえんりよに、住民たちの鼻と口とを襲った。

東京のビジネス・センター有楽町に事務所をもつ有名な青年探偵の帆村莊六ほむらそうろくも、この騒ぎのなかに、旅館の蒲団ふとんの中に目ざめた。彼は或る重大事件の調査のため、はるばるこの大阪へ来てい

たのだった。そして昨夜から、このマスヤ旅館に宿泊していた。「——や、どうも。帝塚山はたいへん静かだという話だったが、こう騒々しいところをみると、あれはわざと逆の言葉を使つて、皮肉を飛ばしたつもりなのかしら」

彼は寝不足の充血した目をこすりながら、起きあがつた。そして丹たんぜん前まへを羽織はおると、縁側に出て、雨戸をガラガラと開いた。とたんに彼は、狃ちんのように顔をしかめて、

「おう、臭くさい。へんな臭においがする」
と吐きだすように云つた。

前の往来で、臭評定かぎをしていた近所のうるさ方一同は、突然ガラガラと開いた雨戸の音おどろに愕おどろいて、ハツとお喋りを中止したが、

帆村が自分たちと同じように鼻をクンクンいわせているのを見上げるや、一せいにニヤニヤ笑いだした。

「お客さん。怪けつたいな臭かがしとりますやろ」

「おう。これは何処どこでやっているのかネ。ひどいネ」

「さあ何処どこやろかしらんいうて、いま相談してまんねけれど、ハツキリ何処どこやら分わからしめへん。——お客さん、これ何なにの臭かや、分わかつてですか」

「さあ、こいつは——」

とはいったが、帆村はあとの言葉をそのまま嘸のみこんだ。そして彼は帯を締めなおすと、トントンと階段を下りて、玄関から外に出た。

「えらい早うまんな。お散歩どすか」

奥から飛んで出てきた仲働きのお手伝いさんが、慌あわてて宿屋の焼やきいん印のある下駄げたを踏石の上に揃えた。

「ああ、この辺はいつもこんな臭いがするところなのかネ」

「いいえイナ。こないな妙な臭かぎは、今朝が初めてだす」

「そうかい。——で、この辺から一番近い火葬場は何処で、何町ぐらいあるネ」

「さあ、焼場で一番ちかいところ云うたら——天草あまくさだすな。こ

こから西南に当つてまつしやるな、道のりは小一里ありますな」

「ウム小一里、あまくさですか」

「これ、天草の焼場の臭いでつしやるか」

「さあ、そいつはどうも何ともいえないネ」

帆村は「行つておいでやす」の声に送られて、ブラリと外に出た。別に彼は、この朝の臭気を嗅いで、それを事件と直覚したわけでもなく、またこんな旅先で彼の仕事とも関係のないことを細かくほじくる気もなかった。けれど、彼の全身にみなぎっている真実を求める心は、主人公の気づかぬ間に、いつしか彼を散歩と称して、臭しゅうきだよ気漂まっただなかう真只中まっただなかに押しやっていたのだった。

それは一種香かんばしいような、そして官能的なところもある悪臭だった。彼は歩いているうちに、臭気がたいへん濃く沈ちん澱でんしている地区と、そうでなく臭気の淡い地区とがあるのを発見した。

（これは案外、近いところから臭気が出ているに違いない！）

臭氣みなもとの源は案外近いところにある。もしそれが遠いところにあるものなれば、臭氣は十分ひろがっていて、どこで嗅いでも同じ程度の臭氣しかしない筈だった。だから彼は、この場合、臭氣の源を程近い所と推定したのだった。

では近いとすれば、このような臭氣を一体何処から出しているのだろうか？

帆村は再び踵きびすをかえして、臭氣が一番ひどく感ぜられた地区の方へ歩いていった。それは丁度或る町角になつていた。彼はそこに突立ったまま、しばらく四圍あたりを見まわしていたが、やがてポンと手をうった。

「——おお、あすこにいいものがあつた。あれだ、あれだ」

そういつた帆村の両眼は、人家の屋根の上をつきぬいてニョツ
キリ聳そびえたつている一つの消防派出所の 大おおやぐら櫓ぐらにピンづけにな
つていた。

あの半はんしやうやぐら鐘ね櫓ぐらは、そもいかなる秘密を語ろうとはする？

灰色の奇人館

「オーイ君、なにか臭くはないかア」

と、帆村は櫓の下から、上を向いて叫んだ。

上では、丹前に宿屋の帯をしめた若い男が、櫓下でなにか喚わめきたてているのに気がついた。といって彼は当番で見張り中の消防手なのだから、下りるわけにも行かない。そこでおいでおいでをして、梯子を上つてこいという意味の合図をした。

「よオし、ではいま上る——」

帆村莊六は、そこで尻端折しりはしよりをして、冷い鉄梯子てつぼしごにつかま
った。そして下駄をはいたまま、エツチラオツチラ上にのぼって
いった。上にのぼるにつれ、すこし風が出てきて、彼は剃かみそり刀で
撫でられるような冷さを頬に感じた。

「——なんですネン、下からえらい喚わめいていてでしたが」

と、制服の外套の襟えりで頤あごを深く埋うずめた四十男の消防手が訊きいた。

彼は帆村が下駄をはいて上つてきたのに、すこし呆あきれている風だった。

「おお、このへんな臭いだ。ここでもよく臭いますね。この臭いはいつから臭っていましたか」

「ああこの怪つたいな臭いですかいな。これ昨夜ゆうべからしてました。さよう、十時ごろでしたな。おう今、えらいプンプンしますな」

「そうですか。昨夜の十時ごろからですか」と帆村は肯うなずいて、今はもう八時だから丁度十時間経ったわけだなと思った。

「一体どの辺から匂ってくるのでしょうか」

「さあ?」

と、消防手は首をかしげて、帆村の顔を見守るばかりだった。彼はどうやら、帆村の職業をそれと察したらしかった。

「風は昨夜から、どんな風になりましたか」

「ああ風ですか。風は、そうですねア、今も昨夜も、ちっとも変わってえしまへん。北西の風だす」

消防手だけに、風向きをよく知っている。

「北西というと、こつちになりますね。どうです、消防手さん。こつちの方向に、なにかこう煙の上っているようなところは見えなideししょうか」

帆村の指す方角に、人のいい消防手はチラリと目をやったが、
「さよですなア、ちよつと見てみまひよう」

といつて、首にかけていた望遠鏡を慣れた手つきで取出すと、長く伸ばして、一方の眼におしあてた。

「いかがです。なにか見えるでしょう」

「さあ——ちよつと待つとくなはれ」

と、彼は望遠鏡をしきりに伸ばしたり縮めたりして^{ちぢ}いたが、そのうちに、

「——ああ、あれかもしれへん」

と、頓^{とんきよう}狂^{きやう}な声を出した。

「ええッ、ありましたか」

帆村は思わず、消防手の肩に手をかけた。

「三町ほど向うだす。岸^{きしひめ}姫町というところだすな。まあ、これ

に違いないやろ思いまっさ。ひとつ覗のぞいてごらん」

帆村は、消防手のたすけを借りて、望遠鏡越しにその岸姫町の方をじつと眺めてみた。

「——な、見えますやろ。どえらい不細ぶさいく工な倉庫か病院かというような灰色の建物が見えまっしやろ」

「ああ、これだな」

「見えましたやろ。そしたら、その屋根の上から突き出しとる幅えんとつの広い煙突をごらん。なんやしらん、セメンが一部剥はがれて、赤煉瓦あかれんがが出てるようだすな」

「ウン、見える見える」

「見えてでしたら、その煙突の上をごらん。煙が薄く出ていまっ

しやろ、茶色の煙が……」

「おお出ている出ている、茶色の煙がねえ」

帆村は、腕がしびれるほど、望遠鏡をもちあげて、破れ煙突から出る煙をジツと見守っていた。

あの煙突から、昨夜の十時から今朝までも、あのとおり煙が出つ放しなんだらうか？　そしてあの煙突の下に、果して臭氣の原因があるのだらうか？

「あの建物は、なんですかねえ」

「さあ詳しいことは知りまへんけど、この辺の人は、あれを『奇人館』というてます。あの家には、年齢としのハッキリせん男が一人住んでいそうやと云うことだす」

「ほう、それはあの家の主人ですか」

「そうだつしやろな。なんでも元は由緒あるドクトルかなんかやつたということだす」

「外に同居人はいないのですか、お手伝いさんとか」

「そんなものは一人も居らへんということだす。尤も出入の米屋さんとか酒屋さんとかがおますけれど、家の中のことは、とんと分らへんと云うとります」

「そのドクトルとかいう人物とは顔を合わさないのですか」

「それも合わずどころやあれへん。まず注文はすべて電話でしますのや。商人は品物をもつて行って、裏口の外から開く押入れおしいれのようなところに置いてくるだけや云うてました。するとそこに

代金が現金で置いてありますのや。それを黙って拾うてくるんやと、こないな話だすな。そやさかい向うの家の仁じんに顔を合わさしまへん」

「ずいぶん変った家ですね。——とにかくこれから一つ行つてみましょう」

そういつているところへ、電話のベルがけたたましく鳴りだした。消防手は素早く塔上の小室に飛びこんで、しきりに大声で答えていた。それは同じくこの臭氣に関するものようであった。それは消防手が再び帆村の前に現われたとき明白になった。

「——いま警察から電話が懸かかつてきましたん。この怪けつたいな臭かぎがお前とこから見えてえへんか云う質問だす。こら、なんか間違

いごとが起つたんですなア。やあえらいことになりましたなあ」

旅行中の貼り札

帆村はその足で、すぐさま奇人館の前に行つた。

なるほど、それは実に奇妙な建物だつた。よく病院の標本室に入ると、大きな砂糖壘びんのような硝子器ガラスの中に、アルコール漬けになつて、心臓や肺臓や、ときとすると子しきゆう宮などという臓器が、すっかり色彩というものを失つてしまつて、どれを見てもただ灰

色の塊かたまりでしかないというのが見られる。この奇人館はどこかそのアルコール漬けの臓器に似ていた。

灰色の部厚いコンクリートの塀、そのすぐ後に迫って、膨ふくれ上ったような壁へき体たいでグルリと囲んだ函のような建物。——それらは幾十年の寒さ暑さに遭あつて、壁体の上には稲妻のような罅ひびが斜めにながく走り、雨にさんざんにうたれては、一面に世界地図のような汚斑しみがべつたりとつき、見るからにゾツとするような陰いん惨さんな邸てい宅たくだった。

それでも往来に面したところには、赤く錆さびてはいるが鉄柵てつさくづくりの門があり、それをとおして石段の上に、重い鉄の扉ドアのはまった玄関が見えていた。

「おおあすこに何か貼り札がしてある！」

その玄関の扉のハンドルに、斜めになつて文字をかいた厚紙が懸つてゐるのを帆村は見た。なんと書いてあるのだろう。彼は光線のとおらないところにある掲示を、苦心して読み取つた。

——当分旅行ニツキ訪問ヲ謝絶ス。十一月三十日、鴨下——

「ウン、鴨下——というか。ここの主人公の名前だな。その主人公は旅行に出かけたという掲示だ。なアんだ。中は留守じゃないか」

帆村はちよつとガツカリした。

だが、よく考えてみると、留守は留守でも、それは十一月三十

日に出ていったのだから、一昨日おとといの出来ごとだった。それなのに、昨夜からずっとこの方、煙突から煙が出ているというのはい体どうしたことだろう？

「鴨下ドクトルが、ストーブの火を燃しつけていったのかしら。しかしそれなら、一昨日の夜も昨日の朝も昼間も、別に煙が出なかったのはどうしたわけだろう」

とにかく無人むじんであるべき家の煙突から、モクモクと煙が上るといふのはどう考えても合点がゆかないことだ。どうしても、中に誰か居て、ストーブに火を点けたのでなければ話が合わない。もし人が居るとしたら、誰が居るのだろう。鴨下ドクトルが出ていった後に、一体誰が残っているというのだろう？

奇人館の怪事を、何と解こうか。

帆村が門前に腕組をして考えこんでいるときだった。丁度ちやうどそこへ、街の異変を聞きこんだ所轄しよかつ警察署の警官たちが自動車にのって駆けつけてきた。

「さあ、早いところ、お前はベルを押せ。なにベルがない。探せ探せ。どこかにある筈はずや」

と指揮の巡査部長が 大童おおわらわの号令ぶりをみせた。

「——それから別に、お前とお前とで、この鉄の門を越えて、玄関の戸を叩いてみい」

声の下に、二名の警官が勇しく鉄の門に蝗いなごのように飛びついた。

「さあ、お前ら三名、裏口へ廻れ、一人は連絡やぜ」

部下を四方へ散らばせると、あごこひも 巡査部長は帽子の頤紐をゆるめて、頤に掛けた。そして鼻をクンクン鳴らして、

「うわーッ、こらどうもならん臭さや。なにをしよったんやろ、

奇人ドクトルは……」

そのとき帆村は横よこあひ合あひから声をかけた。

「おおこれは帆村はんだすな。まだ御泊おとまりでしたか。えらいところをごらんに入れますわ、ハツハツハツ」

検事の村松氏に案内されていったとき、知合いになった住吉署の大川巡査部長であつた。帆村は邪魔にならぬように、傍そばについていた。

裏口に廻つた部下の一人が帰ってきて、二階の西側のよろいまど 窓

に鍵のかかかっていないところがあつて、そこから中へ這入れると報告をした。大川は悦よろこんで、

「よし、そこから這はい入れ、三人外に残して、残り皆で這入るんや。俺も這入つたる」

巡査部長は、佩はい剣けんを左手で握つて、裏口へ飛びこんでいった。帆村もそのまま一行の後に続いていった。

樋を伝わつて、屋根にのぼり、グルリと壁づたいに廻つてゆくと、なるほど四尺ほど上に鎧戸の入つた窓がポツカリ明いていて、そこから一人の警官がヒョイと顔を出した。

「中は、ひっそり閑かんとしてまつせ」

「そうか。——油断はでけへんぞ。カーテンの蔭かどこかに隠れ

ていて、ばアというつもりかもしれない。さあ皆入った。さしあたり煙突に続いている台所とかストーブとかいう見当けんとうを確かめてみい」

勇敢なる巡査部長は、先頭に立って、腐りくさかかった鎧戸を押し、薄暗い内部にとび下りた。一行は、最初の警官を窓のところ
に張り番に残して、ソロソロと前進を開始した。

帆村も丹前の端はしを高々と端折はしよつて、腕まくりをし、一行の後からついていった。

たいへん曲りくねって階段や廊下がつづいていた。外から見ると、
ような簡単な構造ではない。大小いくつかの部屋があるが、悉くことごと
洋間になっていて、日本間らしいものは見当らなかつた。

家の中に入ると、不思議とあの変な臭気は薄れた。そしてそれに代つて、ひどく鼻をつくのが消毒剤のクレゾール石鹼液の芳香ほうこだった。

「ここ病院の古手ふるてと違うか」

「あほぬかせ。ここの大將が、なんでも洋行を永くしていた医者や云う話や」

「ああそうかそうか。それで鴨下ドクトルちゆうのやな。こんなところに診察室を作つておいて、誰を診みるのやろ」

「コラ、ちと静かにせんか」

巡査部長の一いっ喝かつで、若い警官たちはグツと唇を噤つぶんだ。

いくらあしおと躑あしおと音を忍ばせても、ギシギシ鳴る大階段を、下に下り

てゆくと、思いがけなく大きい広間に出た。スイッチをパチンと押して、電灯をつけてみる。

「ああ——」

これは主人の鴨下ドクトルの自慢の飾りでもあろうか、一世紀ほど前の中欧ドイツの名画によく見るような地味な、それでいてどこことなく官能的な部屋飾りだ。高い壁の上には誰とも知れぬがプロシア人らしい学者風の人物画が三枚ほど懸っている。横の方の壁には、これも独逸文字ドイツでギツシリと説明のつけてある人体解剖図と、骨髄及び筋肉図の大掲図だいきいずとが一对をなしてダラリと下っている。

色が褪あせたけれど、黒のふちをとった黄色い絨じゆうたん毯たんが、ドー

ンと床の上に拡がっていた。そして紫檀したんに似た材で作つてある大きな角卓テーブル子が、その中央に置いてある。その上には、もとは燃えるような緑色だったらしい卓子掛けが載つて居り、その上には何のつもりか、古い洋燈ランプがただ一つ置かれてあつた。

室内には、この外に、奇妙な飾りのある高い椅子が三つ、深々とした安楽椅子が四つ、それから長椅子が一つ、いずれも壁ぎわにキッチンと並んでいた。

もう一つ、書き落としてはならないものがあつた。それはこの部屋にはむしろ不似合なほどの大暖炉ストーブだつた。まわりは黒と藍あいとの斑紋はんもんもうつくしい大理石に囲われて居り、大きなマントルピースの上には、置時計その他の雑品が並んでいた。しかもその

火床かしようには、大きな石炭ほうが抛りこまれて居り、メラメラと赤い焰をあげて、今や盛んに燃えているところだつた。

「これやア。えろう燃やしたもんや。ムンムンするわい」

と、巡査部長はストーブの方に近づいた。

「ほほう、こらおかしい。傍へよると、妙な臭かぎがしよる——」

「えッ。——」

一同は、愕おどろいてストーブの傍に駆けよつた。

くず
崩れる
はっこつ
白骨

「これ見い。こんなところに、妙な色をした脂あぶらみたよなもんが溜つとるわ」

と大川部長は、火かきの先で、火床かしようの前の煉瓦敷れんがじきの上に溜つている赤黒いペンキのようなものを突いた。

「何でつしやるな」

「さあ——こいつが臭におうのやぜ」

と云っているとき、巡査部長のうしろから帆村が突然声をかけた。

「これア大変なものが見える。大川さん。火床の中に、人骨じんこつらしいものが散らばっていますぜ？」

「ええッ、人骨が——。どこに？」

「ホラ、今燃えている一等大きい石炭の向う側に——。見えるでしょう」

「おお、あれか。なるほど肋骨ろっこつみたいや。これはえらいこつちや。いま出して見まつさ」

さすがは場数ばかずを踏んだ巡査部長だけあつて、口では愕おどろいても、態度はしつかりしたものだ。腰をかがめると、火搔ひかき棒ぼうで、その肋骨らしいものを火のなかから手前へ搔きだした。

「フーン。これはどう見たつて、大人の肋骨や。どうも右の第二しんろつこつ真肋骨らしいナ」

「こんなものがあるようでは、もっとその辺に落ちてやしません

か」

「そうやな。こら、えらいこつちや。——お鎖骨さこつがあつた。まだあるぜ。——」

大川は灰の中から、人骨をいくつも掘りだした。その数は皆で、五つ六つとなつた。

「——もう有りまへんな。こうつと、胸の辺の骨ばかりやが、わりあいに数が少いなア」

と、彼は不審ふしんの面持で、なにごとかを考えている様子だつた。

それにしても人骨である限り、主人の留守になつた建物の中のストーブに、こんなものが入つてゐるとは、なんとという愕くべきことだろう。一体この骨の主は、何者だろう。

「あのひどい臭気から推して考えると、もつと骨が見つかるはずですね」と帆村が云った。彼は^{かが}踏んで、しばらくストーブの中をいろいろな角度から覗きこんでいたが、ややあつて、ひどく愕いたような声をだした。

「呀^あッ。ありましたありました。肋骨が一本、ストーブの^{えんどう}煙道のところからブラ下つていますよ。煙道の中が怪しい」

「十二煙道の中が……」と、顔色をサツと変えた大川巡査部長は、火掻き棒を右手にグツと握ると、燃えさかる石炭をすこし横に除け、それから下から上に向つて火掻き棒をズーツと挿しこみ、力まかせにそこらを掻きまわした。それはすこし乱暴すぎる行いではあつたが、たしかに^{てごた}手応えはあつた。

ガラガラガラという大きな音とともに、煙道の中からドツと下に落ちてきた大きなものがあつた。それは、同時に下に吹きだした黒い煤や白い灰に距へだてられて、しばらくは何物とも見分けがたかつたけれど、その灰かいじん燼じんがやや鎮しずまり、思わずストーブの前から飛びのいた警官たちがソロソロ元のように近づいたころには、もう疑いもなく、煙道の中から落ちてきた物件が何物であるかが

めいりよう
明瞭めいりようになつた。

半焼けの屍したい体たい！

それはずいぶん奇妙な恰好をしていた。半ば骨になつた二本の脚が、火床の上にピーンと天井を向いて突立っていた。

それは逆さになつて、この煙道の中に入っていたものらしく、

胸部や腹部は、もう完全に焼けて、骨と灰とになり、ずっと上方にあつた脚部が、半焼けの状態で、そのまま上から摺り落ちてきたのだつた。

男か女か、老人か若者か。——そんなことは、ちよつと見たくらいで判別がつくものではなかつた。

「コラ失敗しもうた。検事さんから、大きなお眼玉ものやがな。下から突きあげんと、あのまま抛ほつといたらよかつたのになア」

と、巡査部長は火搔き棒を握つたまま、大きな溜ため息をついた。「もうこうなつたら、仕方がありませんよ。それより、今燃えかかっている石炭の火を消して、あの脚をなるべく今のままで保存することにしては如何ですか」

帆村は慰め半分、いいところを注意した。

「そうだなア」と大川は膝を叩いて、後をふりかえり、
「オイ、お前ちよつと水を汲んできて、柄杓ひしやくでしずかにこの火を消してんか。大急ぎやぜ」

それから彼は、もう一人の警官に命じて、電話を見つけ、本署に急報するようにつけた。

帆村は、そのときソツと其その場を外はずした。部屋を出るとき、ふりかえつてみると、大川巡査部長は長椅子の上にドツカと腰うちかけ、帽子を脱いでいたが、毬いがぐり栗り頭あたまからはポツポツポツと、さかんに湯気が上つているのが見えた。

ふい
う
不意打ち

いかに帆村といえども、内心この恐ろしい惨劇さんげきについて、愕おどろきの目をみはらないではいられなかった。主人鴨下かもしたドクトルの留守中に、ストーブの中で焼かれた半焼屍はんしょうたい体？ 一体どうした筋道から、こうした怪事件が起ったかは分らないけれど、とにかくこの家のうちには、もっともつと秘密が伏在ふくざいしているのであろう。彼はこの際、できるだけの捜査材料を見つけたで置きたいと思った。

「ほう、これは廊下だ。——向うに化粧室らしいものが見える。

よし、あの中を調べてみよう」

彼は勇躍ゆうやくして、化粧室の扉を押した。

「この家のうちに、主人鴨下ドクトルのほかに、誰か居たかが分ると面白いんだが——」

彼の狙ねらいは、さすがに賢明だった。

化粧室を入ったところの正面に、大きな鏡が一枚掲かかげてあつた。彼はその鏡の前に立つて、台の上を注意ぶかく観察した。果はてには台の上に、指一本たてて、スーツと引いてみた。すると台の上に、黒い筋がついた。その指を鼻の先にソツともつて行って、彼はクンクンと鼻を犬のように鳴らした。

「フーン。これはフランス製の白粉おしろいの匂いだ。すると、この家の中には、若い女がいたことになる。しかも余り前のことではない」

彼はそこで、なおも奥の方の扉を開いて、中に入った。しばらくすると、彼の姿が再び現われた。その顔の上には微笑が浮んでいた。

「いよいよ若い女がいたことになる。きょうは十二月一日だ。すると十一月二十九日ぐらいと見ていいなア。主人公が留守にした日の前後だ。これは面白い」

廊下を出ると、そこに階段があつた。それを上ろうとすると、一人の警官が横合から現われ、彼の後について、その階段をのぼ

つてゆくのであった。

(先生、僕を監視するつもりかしら?)

階段を上ると、そこにまた廊下があった。二階はたいへん薄暗い。いつもは電灯がついていたに違いないのだが、スイッチが手近に見あたらない。

右のとつつきに、扉が半びらきになった部屋があった。それを押して入ると、スイッチがすぐ目に映った。ピーンと上にあげると、パツと明りがついて、室内の様子がハッキリした。ここはどうやら食堂兼喫煙室らしく、それと思わせるような什器じゆうきや家具が並んでいた。なんにせよ、どうも豪勢なものである。——
若い警官は、相変らず彼の後について、室内へ入ってきた。

(いよいよ監視するつもりと分った！)

彼はちよつと不愉快な気持ちに襲われた。だが次の瞬間、帆村探偵は不愉快もなにも忘れてしまうような物を発見した。それは安楽椅子あんらくいすの上に放りだされてあつた紙装かみそうの小函こぼこだつた。

「おおこれはどうだ。赤バラ印の弾薬函だんやくぼこだツ。これを使う銃は、

僕の探していたアメリカのギャングが好んで使う軽機関銃じやないか。これは物騒ぶつそうだぞオ——」と帆村は身ぶるいして、戸口の方をふりかえつた。警官は怪訝けげんな顔をして、傍そばによつてきた。このとき廊下を距へだてた向いの暗い室の扉が、音もなく細目に開いて、その中から一挺いっちようの太い銃じゆうこう口がヌツと顔を出した。

「呀あツ、あぶないツ！」と叫んだが、既に遅かつた。ダダダーン、

ヒューツと、発射された銃弾は帆村たちのいる室内に撃ちこまれた。

「うわーッ、ウーム」

苦しい呻き声とともに、監視の警官が、ドサリと床ゆかうえ上に人形のように転がった。

「ウウン、やられたッ」

と、こんどは帆村が絶ぜつきよう叫こゝろした。素早く安楽椅子のかげに身をかわした彼だったが、途端とたんに一弾飛びきたって左肩ひだりかたに錐きりを突きこんだ疼とうつう痛を感じた。彼は床の上に自分の身体が崩れてゆくのを意識した。そして階下から湧き起る警官隊の大声と階段を荒々しく駆けあがってくる靴音とを、夢心地に聞いた。

空虚くうきよのベッド

青年探偵の帆村莊六は恐ろしい夢からハッと覚めた。

気がついて四圍あたりを見まわすと、自分は白い清せいじょう浄じょうな夜具やぐのなかにうずまわって、ベッドの上に寝ていた。

(呀あッ、そうだ。僕は肩先を機関銃で撃たれて、この病院に担かぎこまれたんだったな)

彼は大阪住吉区岸姫町の鴨下ドクトルの館で、不意に何者かの

ために、こんな目にあわされ、そして意気地なくもこんなことになつて、附近の病院に担ぎこまれたのだった。

電灯が室内をうすぼんやり照らしていた。もう夜らしいが、何時だろうかと、腕時計を見ようとしたが、とたんに彼は、飛びあがるような疼痛を肩に感じた。

「呀ツ、痛ツ」

その叫びに応えるように人の気配がした。手紙でも書くのに夢中になつていたらしい若い看護婦が、愕いて彼の枕まくらもと頭に馳はせよつた。

「お目覚めざめですの。お痛みですか」

彼は軽うなずく肯うなずいて、看護婦に時刻を訊いた。

「——そうですね。いま夜の九時ですわ」

と、東京弁で彼女は応えた。

「どうでしょう、僕の傷の具合は——」

「たいして御心配も要らないと、先生が仰おっしゃ有っていましたわ。

でも暫く我慢して、安静にしていらっしやるようにとのことですよ」

「暫くというと——」

「一週間ほどでございましょう」

「え、一週間？ 一週間もこんなところに寝ていたんじゃ、脳味噌かびに黴かびが生えちまう」と憂鬱ゆううつそうに呟いたが、間もなくニヤリと笑みを浮べると、「看護婦さん、すまないが大急ぎで、電報を

「一つ打ってきて下さい」

痛そうに帆村は唸りながら、東京の事務所宛に、簡単な電報を
発するよう頼んだ。

看護婦が頼信紙らいしんしを手にして廊下を歩いていると、立派な紳士
を案内してくる受付の同僚に会った。

「あら。君岡さん、丁度いいわ。あなたのとこの患者さんへ、こ
の方が御面会よ」

上から下まで、黒づくめの洋服に、ワイシャツと硬いカラーと
だけが真白であるという四十がらみの顔色の青白ひびい髭のある紳士
が、ジロリと眼で挨拶した。

そこで看護婦の君岡は、電報の用事を受付の看護婦に頼み、自

分はその黒ずくめの紳士を伴って、再び室の方にひつかえした。

「さあ、こつちでございますわ」

といって、病室の扉を開いたが、そのとき二人はベッドの上が乱雑になって居り、寝ているはずの帆村莊六の姿が見えないのを発見して愕いた。

「オヤ、帆村さんはどうなすつたのでしょうか。ウンウン唸っていらつして、起きあがれそうもなかったのに……」

「ウン、これは変だな」

黒ずくめの紳士は、室内に飛びこんできた。

「もし看護婦さん、この窓は、さつきから開いていたのかね？」

「ええ、なんでございますつて。窓、ああこの窓ですか。さあ――」

―変でございますわネ。たしかに閉まっていた筈なんですわが」

ベッドの頭の方にある中庭に面した窓が、上に押しあげられていたのである。誰がこの窓を開けたのだろう。そして誰が患者の身体を攫さらっていったのだろう。

紳士は窓ぎわへ急いで近づくと、首を出して外を見た。地上までは一丈ほどもあり、真暗な植込みが、窓から洩れる淡い光にボヤリ照らし出されていた。しかし地上に帆村の姿を見出すことはできなかつた。

「どうも困ったネ」

「あたし、どうしましょう。婦長さんに叱られ、それから院長さんに叱られ、そして馘になりますわ」

看護婦は、蒼い顔をして崩れるように、椅子の上に身体を抛なげかけた。

そのときであつた。開いた窓枠に、横合から裸の細長い脚が一本ニユーツと現われた。

「アラツ、——」

と看護婦は椅子から飛びあがつた。

つづいてまた一本の脚が、すこしブルブルふる慄えながら現われた。それから黄八丈きはちじょうまがいの丹前たんぜんが——。

「どうせそんなことだろうと思つた。おい帆村君、相変らず、無茶をするねえ」

と、紳士は呆あきれながらも、まあ安心したという調子でいった。

そのうちに、窓の外から帆村の全身が現われて、ヨロヨロと室内へ滑りおちてきた。

「まあ、帆村さん、貴郎あなたってかたは……」

と、看護婦なみだが涙を払いつつ、泣き笑いの態で帆村の身体を抱き起した。

「いや大したことはない」と帆村は青い顔に苦笑を浮べていった。

「ナニ脳髓かびに黴かびが生えてはたまらんと思つたからね。ちよつと外へ出て、冷していたんだよ。しかしこの病院の外壁がいへきと来たら、

手懸てがかりになるところがなくて、下りるのに非常に不便にできている。——やあ、これは村松検事どの。貴方がもつと早く来て下されば、なにもこんな瀕死ひんしのサーカスをごらんに入れないですんだ

のですよ」

看護婦の君岡に抱かかえられ再びベッドの上に移されながら、傷つける帆村は息切れの入った減らず口を叩いていた。

焼屍しょうしたい体の素性すじょう

「機関銃に撃たれた警官はどうしました」

帆村はベッドの中に、病人らしく神妙に横たわって、側の椅子に腰をかけている村松検事に尋ねた。

「うん、——」検事は愛用のマドロスパイプに火を点けるのに急がしかった。「気の毒な最期だったよ。——」

「そうですか。そうでしょうネ、まともに受けちやたまらない」
生命びろいをした帆村は溜息ためいきをついた。

「それで犯人はどうしました」

検事はパイプを咥くわえたまま、浮かぬ顔をして、

「——勿論もちろん逃げちやったよ。なにしろこっちの連中は今まで機

関銃にお近付きがなかったものだからネ。あれを喰くらって、志田（死んだ警官）は即死し、勇敢をもつて鳴る帆村莊六はだらしく目を廻すしサ。それが向うの思う壺で、いい脅おどしになった。だから追い駈けた連中も残念ながらタジタジだ。——そんな風に犯

人をいい気持にしてやって、一同お見送りしたという次第だ」

検事は、いつもの帆村の毒唇どくしんを真似て、こう説明したものだから、帆村は苦笑いをするばかりだった。もちろんそれは、村松検事が病人の気を引立ててやろうという篤い友情あつから出発していることであつた。

「あの犯人は、一体何者です」

「皆目わかっていない。——君には見当がついているかね」

「さあ、——」と帆村は天井を見上げ、「とにかくわが国の殺人事件に機関銃をぶっぱなしたという例は、極めて稀まれですからネ。

これは全然新しい事件です。ともかくも兇器をとこから手に入れたということが分れば、犯人の素性すじょうももつとハッキリすると思

「いますぐがネ」

「うん、これはこつちでも考えている。両三日うちに兇器の出所は分るだろう」

看護婦の君岡が、紅茶をはこんできた。検事は、病院の中で紅茶がのめるなんて思わなかったと、きようえつ恐悦ていの態であつた。

「——それから検事さん」と帆村は紅茶を一口すす啜らせてもらつていった。「あの大暖ストーブ炉のなかから出てきた屍体のことは分りましたか」

「うん、大体わかつた——」

「それはいい。あの焼屍体の性別や年齢はどうでした」

「ああ性別は男子さ。身長が五尺七寸ある。——というから、つ

まり帆村莊六が屍体になったのだと思えばいい」

「検事さんも、このごろ大分修業して、テキセツな言葉を使いますね」

「いやこれでもまだ^{とて}迎も君には敵^{かな}わないと思つている。——年齢は不明だ」

「齒から区別がつかかなかつたんですか」

「自分の齒があれば分るんだが、総入齒なんだ。総入齒の人間だから老人と決めてもよさそうだが、この頃は三十ぐらいで総入齒の人間もあるからね。現にアメリカでは二十歳になるかならずの映画女優で、齒列びをよく見せるため総入齒にしているのが沢山ある」

「その入歯を作った歯医者調べてみれば、焼死者の身許が分るでしょうに」

「ところが生憎あいにくと、入歯は暖炉のなかで焼け壞れてバラバラになつてゐるのだ」

「頭蓋骨の縫合とか、肋軟骨ろくなんこつ化骨かこつの有無とか、焼け残りの皮膚の皺しわなどから、年齢が推定できませんか」

「左様、頭蓋骨も肋骨も焼けすぎている上に、硬いものに当つてバラバラに砕けているので、全体についてハッキリ見わけがつかないが、まあ三十歳から五十歳の間の人間であることだけは分る」

「まあ、それだけでも、何かの材料になりますね。——外に、何か屍体に特徴はないのですか」

「それはやつと一つ見つかった」

「ほう、それはどんなものですか」

「それは半焼けになった右足なんだ。その右足は骨の上に、僅かに肉の焼けこげがついているだけで、まるで骨つきの痩せた、鶏の股を^{あぶ}炮り焼きにしたようなものだが、それに二つの特徴がついている」

「ほう、——」

「一つは右足の^{おやゆび}拇指がすこし短いのだ。よく見ると、それは破^は傷風^{しょうふう}かなんかを患って、それで指を半分ほど切断した痕^{あと}だと思^うう」

「なるほど、それはどの位の古さの傷ですか」

「そうだね、裁判医の鑑定によると、まず二十年は経っているということだ」

「はあ、約二十年前の古傷ですか。なるほど」と帆村は病人であることを忘れたように、ひきしまった語調で呟いた。

「——で、もう一つの傷は？」

「もう一つの傷が、また妙なんだ。そいつは同じ右足の甲の上にある。非常に深い傷で、足の骨に切りこんでいる。もし足の甲の上にたいへんよく切れる鉞まさかりを落としたしたら、あんな傷が出来やしないかと思う。傷跡は癒ゆちやく着しているが、たいへん手当がよかつたと見えて、実に見事に癒っている。一旦切れた骨が接合しているところを解剖で発見しなかつたら、こうも大変な傷だとは

思わなかつたらう」

「その第二の傷は、いつ頃できたんでしよう」

「それはずっと近頃できたものらしいんだがハッキリしない。ハッキリしないわけは、手術があまりにうまく行っているからだ。そんなに見事な手術の腕を持っているのは、一体何処の誰だろうというので、問題になっておる」

検事村松と傷つける青年探偵帆村壮六とが、事件の話に華を咲かせているその最中に、慌^{あわ}ただしく受付の看護婦がとびこんできた。

「モシ、地方裁判所の村松さんと仰^{おっしゃ}有るのは貴方さまですか」

「ああ、そうですよ。何ですか」

「いま住吉警察署からお電話でございます」

検事はそのまま席を立つて、室外へ出ていった。

それから五分ほど経って、村松検事は帰ってきた。彼は帆村の顔を見ると、いきなり今の電話の話をした。

「いまネ、鴨下ドクトルの邸に、若い男女が訪ねてきたそうだ。

ドクトルの身内のものだといっているが怪しい節ふしがあるので、保護を加えてあるといっている。ちよつと行って見てくるからネ。

いずれ又来るよ」

そういう置いて、扉の向うに消えてゆく検事の後姿を、帆村は羨うらやましそうに見送っていた。

蠅男

時間は、それより一時間ほど前の九時ごろのことだった。

同じ住吉区すみよしくの天下茶屋三丁目てんかぢやに、ちかごろ近所の人の眼を奪っている分離派風の明るい洋館があった。

太い御影石みかげいしの門柱には、「玉屋」とただ二字だけ彫ったブロ
ンズの標札が埋めこんであつたが、これぞいまラジオ受信機の製
造で巨万の富を作つたといわれる玉屋総一郎の住宅だった。

丁度ちやうどその九時ごろ、一台の大型の自動車が門内に滑りこんで

いった。乗っていたのは、年のころ五十に近い相撲取のように巨大な体躯の持ち主——それこそこの邸の主人、玉屋総一郎その人だった。

車が玄関に横づけになると、彼はインバネスの襟えりをだらしなく開けたまま、えつと懸け声をして下りたつた。

「あ、お父つあん」

家の中からは、若い女の声が出た。しかしこの声は、どうも少しふる慄えているらしい。

「糸子か。すこし気を落ちつけたら、ええやないか」

「落ちつけいうたかて、これが落ちついていられますかいな。とにかく早よどないかしてやないと、うち気が変になってしまいま

すがな」

「なにを云うとるんや。嬰兒やごこみたよに、そないにギヤアつきなや」

総一郎はドンドン奥に入っていった。そして二階の自分の書齋の扉を鍵でガチャリと開けて、中へ入っていった。そこは十五坪ほどある洋風の広間であり、この主人の好みらしいすこぶ頗る金の懸った、それでいて一向垢あかぬけのしない家具調度で飾りたて、床には剥製はくせいの虎の皮が三枚も敷いてあり、長椅子にも、熊だの豹だのの皮が、まるで毛皮屋に行ったように並べてあつた。

玉屋総一郎は、大きな机の前にある別製の廻転椅子の上にドツカと腰を下ろした。そして彼は子供のようくせに、その廻転椅子をギイギイいわせて、左右に身体をゆすぶつた。それは彼の癖くせだつた

のである。

「さあ、その——その手紙、ここへ持つといで」

彼は呶鳴るようにいうと、娘の糸子は細い袂たもとの中から一通の黄色い封筒を取りだして、父親の前にさしだした。

「なんや、こんなもんか。——」

総一郎は、封の切つてある封筒から、折り畳んだ新聞紙をひっぱり出し、それを拵げた。それは新聞紙を半分に切つたものだった。

「なんや、こんなもの。屑新聞やないか」

彼は新聞をザツと見て、娘の方につきだした。

「新聞は分つてるけど、只の新聞と違ふといいましたやろ。よう

御覧。赤鉛筆で丸を入れてある文字を拾うてお読みやす」

「なに、この赤鉛筆で丸をつけたある字を拾い読みするのんか」

総一郎は娘にいわれたとおり、上の方から順序を追つて、下の方へだんだんと読んでいった。初めは馬鹿にしたような顔をしていたが、読んでいくにつれてだんだん六ヶ敷むずかしい顔になつて、顔がカーツと赤くなつたと思うと、そのうちに反対にサツと顔面から血が引いて蒼くなつていった。

「そら、どうや。お父つあんかて、やっぱり愕いてでつしやろ」

「うむ、こら脅迫状や。二十四時間以ない二、なんじの生命いのちヲ取ル。ユイ言状を用意シテ置け。

はえおとこ
蠅男。

——へえ、蠅男？」

「蠅男いうたら、お父つあん、一体誰のことをいうとりまんの」

「そ、そんなこと、俺が知つとるもんか。全然知らんわ」

「お父つあん。その新聞の中に、蠅の死骸が一匹入つとるの見や
はつた？」

「うえツ、蠅の死骸——そ、そんなもの見やへんがナ」

「そんなら封筒の中を見てちようだい。はじめはなア、その『蠅
男』とサインの下に、その蠅の死骸が貼りつけてあつたんやしイ」

総一郎は封筒を逆ささかにふつてみた。すると娘の云つたとおり、

机の上にポトンと蠅の死骸が一匹、落ちてきた。それはぺちゃん
こになった乾枯ひからびた家蠅の死骸だった。そして不思議なことに、
翅むしも六本の足もりとられ、そればかりか下腹部が鋭利な刃物で
グサリと斜めに切り取られている変な蠅の死骸だった。よくよく

見れば、蠅の死骸と分るような、変った蠅の木乃伊ミイラめいたものであつた。

この奇怪な蠅の死骸は、果して何を語るものであろうか。

籠ろうじょう城準備

——二十四時間以ないに、なんじの生命ヲ取ル。ユイ言状を用意シテ置け。——

それだけが、活字の上に赤鉛筆で丸が入れてある。

——蠅男——

この二字だけは、不器用なゴム印の文字であつて、インキは赤とも黒とも見えぬ妙な色で捺^おしてあつた。

更に、奇怪な翅や脚を^{むし}りとり、下腹部を半分に切つてある蠅の木乃伊^{ミイラ}。——

全く妙な通信文であるが、とにかく脅迫状に違いない。

「お父つあん。きつと心当りがおますのやろ。隠さんと、うちに聞かせて——」

「阿呆いうな。蠅男——なんて一向知らへんし、第一、お父さんはナ、人様から恨みを受けるようなことはちよつともしたことないわ。ことに殺されるような、そんな仰山な恨みを、誰からも買

うてえへんわ」

「本当やな。——本当ならええけれど」

「本当は本当やが、とにかくこれは脅迫状やから、警察へ届けと
こう」

「ああ、それがよろしまんな。うち電話をかけまひよか」

「電話より、誰かに警察へ持たせてやろう。会社へ電話かけて、
庶務の田辺に山ノ井に小松を、すぐ家へこい云うてんか」

娘の糸子が電話をかけに行っている間に、てい邸内の男たちが呼

び集められた。玉屋総一郎は、ともかくも蠅男の襲撃を避けるた

め、自分の居間に引籠ひきこもる決心を定めた。それだからまず外部か

ら蠅男の侵入してくるのを防ぐために、四つの硝子窓を内側から

嚴重に羽根蒲団とトタン板とでサンドウイッチのように重ねたもので蓋をし、釘づけにした。それでもまだ心配になると見え、窓のところへ、大きな書棚や戸棚をピタリと据えた。

「どうです、旦那はん。これでよろしまつしやるか」

「うん、まあその辺やな」

「あとは、明いとるところ云うたら、天井にある空気孔あなですが、あれはどないしまひようか」

「あああの空気孔か」と、総一郎は白い天井の隅に、一升榼ますぐらの四角な穴が明いている空気抜きを見上げた。そこには天井の方から、重い鑄物いものの格子蓋こうしふたが嵌はめてあつた。「さあ、まさかあれから大の男が入ってこられへんと思うが、——」

「さようですナ、あの格子の隙から入ってくるものやったら、まあ鼠か蚊か——それから蠅ぐらいなものだつしやるナ」

「なに、蠅が入ってくる。ブルブルブル。蠅は鬼門きもんや。なんでもええ、あの空気孔に下から蓋ふたをはめてくれ」

「下から蓋をはめますんで……」

「出来んちゆうのか」

「いえ、まだ出来んいうとりまへん。いま考えます。ええ、こうつと、——」

下僕しもべたちが脳味噌を絞った挙句あげく、その四角な空気孔を、下から厚い紙で三重に目張りをしてしまった。

「さあ、これでもう大丈夫です。こうして置いたら蠅や蚊どころ

か、空気やって通ることが出来しまへん」

総一郎は、それでも不安そうに天井を見上げた。

そのうちに、会社からは田辺課長をはじめ山ノ井、小松などという選りすぐりの用心棒が駆けつけた。総一郎はすこし生色をとりかえした。

警察への使者には、田辺課長が立つた。

彼は新聞紙利用の脅迫状を、蠅の木乃伊^{ミイラ}とともに提出し、主人の懇願^{こんがん}の筋^{すじ}をくりかえして伝えて、保護^{ほご}方を頼んだ。

署長の正木真之進^{まさきしんのしん}は、そのとき丁度、鴨下ドクトル邸へ出か

けていたので、留守居の警部補が電話で署長の指揮を仰いだ結果、悪戯^{いたずら}にしても、とにかく物騒だというので、二名の警官が派遣

されることになった。

すると田辺はペコンと頭を下げ、

「モシ、費用の方は、玉屋の方でなんぼでも出して差支えおまへんのですが、警官の方をもう三人ほど増しておもらい出来ませんやろか」

というと、警部補はカツと目を剥き、

「阿呆かいな。お上を何かみと思うてるねん」

と、一発どやしつけた。

脅迫状は、一名の刑事が持つて、これを鴨下ドクトルの留守宅たむろに屯たむろしている署長の許へとどけることになった。

東京からの客

そのころ鴨下ドクトルの留守宅では、屯たむろしていた警官隊が、不意に降つて湧いたように玄関から訪れた若き男女を上にあげて、保護とは名ばかりの、辛辣しんらつなる不審訊問ふしんじんもんを開始していた。

「お前は鴨下ドクトルの娘やいうが、名はなんというのか」

「カオルと申します」

洋装の女は、年齢としのころ、二十二、三であろうか。断髪をして、ドレスの上には、贅沢てんな貂の毛皮のコートを着ていた。すこぶる

齒切れのいい東京弁だった。

「それから連れの男。お前は何者や」

「僕は上原山治うえはらやまじといひます」

「上原山治か。そしてこの女との関係はどういう具合になつとるねん」

「フィアンセです」

「ええツ、フィなんとやらいつたな。それア何のこつちや」

「フィアンセ——これはフランス語ですが、つまり婚約者です」

「婚約者やいうのんか。なんや、つまり情いろおとこ夫のことやな」

「まあ、失礼な。——」と、女は蒼くなつて叫んだ。

「まあ、そう怒らんかて、ええやないか。のう娘さん」

「警官だといつても、あまりに失礼だわ。それよか早く父に会わせて下さい。一体何事です。父のうちを、こんなに警官で固めて、なにかあつたんですか。それなら早く云つて下さい」

署長は金ぶち眼鏡ごしに、ニヤニヤしながらカオルの様子を眺めていた。部下の一人が近づいてソツと署長に耳うちをしていった。村松検事が間もなく到着するという電話があつたことを返事したのであつた。

「——娘さん。鴨下ドクトルから、二、三日うちに当地へ来いという手紙が来たという話やが、それは何日の日附ひづけやったか、覚えてるか」

「覚えていますとも。それは十一月二十九日の日附です」

「へえ、二十九日か」署長は首をかしげ「そらおかしい。ドクトルは三十日に、当分旅行をするという札を玄関にかけて、この邸を留守にしたんや。旅行の前日の手紙で、二、三日うちに大阪へ来いといって置いて、その翌日に旅行に出るちゆうのは、怪けつたいなことやないか。そんな手紙貰うたなどと、お前はさつきから嘘をついているのやろう」

「まあひどい方。わたしが嘘を云つたなどと——」

「そんなら、なんで手紙を持って来なんだんや。この邸へ入りこもうと思うて、警官に見つかり、ドクトルの娘でございますなどと嘘すばしについて本官等をたぶらかさうと思うたのやろが、どうや、
凶星すばしやろ、恐れいったか。——」

女は身を慄ふるわせて、署長に打つてかかろうとした。青年上原は慌あわててそれを止め、

「——警官たちも、取調べるのが役目なんだろうが、もつと素直に物を云つたらどうです」

「なにをツ——」

そういつているところに、村松検事の到着が表から知らされた。

正木署長は席を立って、検事を玄関に迎えに出た。一伍いちぶ一什じゅうを報告したあとで、

「——どうも怪しい女ですなア。あの変り者の鴨下ドクトルに娘があるというのも、ちと妙な話ですし、それに娘のところへ二、三日うちに出てこい云うて、二十九日附で手紙を出しておきなが

ら、翌三十日から旅行するちゆうて出かけ、そして今日になつてもドクトルは帰つてきよらしまへん。ドクトルが娘に手紙出したちゆうのは、ありや嘘ですな」

と、自信あり気な口調で、検事に説明をした。検事はそうかそうかと肯うなずいた。

二階に設けた仮調室に現われた検事は、カオルと名のる女をさしまねき、

「貴女は鴨下ドクトルの娘さんだそうだが、たびたびこの家へ来るのかネ」

と尋ねた。

カオルは、新しく現われた調べ手に、やや顔を硬ばらせながら、

「いいえ、物心ついて、今夜が初めてなんですのよ」

「ふうむ。それは又どういいうわけです」

「父はあたくしの幼いときに、東京へ預けたのです。はじめは音信も不通でしたが、この二、三年来、手紙を呉れるようになり、そしてこんどはいよいよ会いたいから大阪へ来るようにと申してまいりました。父はどうしたのでしょうか。あたくし気がかりでありませんわ」

「いや尤もつともです。実はネ——」と検事はカオルの顔を注意深く見つめ「実は——愕おどろいてはいけません——お父さんは三十日に旅行をされ、未だいまに帰つて来ないのです。そしておまけに、この家のうちに何者とも知れぬ焼屍しょうしたい体があるのです」

「まあ、父が留守中に、そんなことが出来ていたんですか。ああそれで解りましたわ。警官の方が集つていらつしやるのが……」

「貴女はお父さんがこの家に帰つてくると思えますか」

「ええ勿論、そう思いますわ。——なぜそんなことをお聞きになるの」

「いや、私はそうは思わない。お父さんはもう帰つて来ないでしょうネ」

「あら、どうしてそんな——」

「だって解るでしょう。お父さんには、貴女との固い約束を破つて旅に出るような特殊事情があつたのです。そして留守の屋内の暖炉ストーブの中に一個の焼屍しょうしたい体が残つていた」

村松検事はそう云つて、女の顔を凝視ぎょうしした。

二つの殺人せんこくしよ宣告書

「あッ」とカオルは愕きの声をあげた。「するともしや、父が殺人をして逃亡したとでも仰おっしゃ有るのですか」

「まだそうは云いきつていません。——一体お父さんは、この家でどんな仕事をしていたか御存じですか」

「わたくしもよくは存じません。ただ手紙のなかには、（自分の

「研究もやつと一段落つきそうだ」という簡単な文句がありました」

「研究というと、どういう風な研究ですか」

「さあ、それは存じませんわ」

「この家を調べてみると、医書だの、手術の道具などが多いのですよ」

「ああそれで皆さんは父のことをドクトルと仰有るのですね」

女はすこし誇らしげに、わずかに笑った。

そのとき正木署長が、検事の傍へすりよった。

「ええ、……緊急の事件で、ちよつとお耳に入れて置きたいことがありますんですが、いま先方から電話がありましたんで……」

「なんだい、それは——」

廊下へ出ると署長は低声で、富豪玉屋総一郎氏が今夜「蠅男」に生命を狙われていることを報告し、只今それについて玉屋から、どうも警察の護衛が親切でないから、司法大臣に上申するといってきた顛末^{てんまつ}を伝えた。

村松検事は署長に、その脅迫状を持っているなら見せるように云った。

署長は、お安い御用といいながら、ポケットを探ったが、どうしたものか先刻預つて確かにポケットに入れたはずの封筒が、何処へ落としたか見当らないのであった。

「どうしたんやろなア、確かにポケットに入れとつたのじゃが――ひよつとすると階下^{した}の大広間へ忘れてきたのかしらん。検事さ

ん、ちよつとみてきます」

署長があたふたと階下へ下りていく後を、村松検事は追いかけるようにして、大広間の方へついていった。焼屍体のあつた大広間は、監視の警官が一人ついたまま、気味のわるいほどガラんとしていた。

警官の挙手の礼をうけて、室内に入った署長は、そのとき室内に、異様の風体の人間が、火の消えた暖炉ストーブの傍にすりよつて、後向きでなにかしているのを発見して、呀あツと愕いた。全く異様な風体の人間だった。和服を着て素足の男なんだが、上には警官のオーバーを羽織り、頸のところには手拭を捲きつけているのだ。頭髪は蓬よもぎのようにはうばうだ。

「コラツ誰やツ」署長は背後から飛びつきざま、その男の肩をギョツと掴んだ。

「うわツ、アイテテテ……」

異様な風体の男は、顔をしかめて、三尺も上に飛びあがったように思われた。

「何者や、貴様は——」

と、獣のように大きな悲鳴をあげた怪人に、却かえつて愕かされた署長は、興奮して居いた丈高ただかに吠鳴わった。

「いや正木署長、その男なら分っているよ」いつの間に入ってきたか、村松検事がおかしそうに署長を制した。「それは私の知合ほむらいで帆村ほむらという探偵だ」

「ああ帆村さん。この怪けつたいな人物が——」

「うむ怪しむのも無理はない。彼は病院から脱走するのが得意な男でネ」

帆村は肩が痛むので左腕を釣っていた。大きな痛みがやつと鎮まるのを待つて、こら泳えかねたように口を利いた。

「——まあ怒るのは後にして頂いて、これをごらんなさい、重大な発見だ」

そういつてさし伸べた彼の右手には、同じ色と形とを持った二枚の黄色い封筒があつた。

「あッ、これは玉屋氏に出した蠅男の脅迫状や。あんた、どこでそれを——」

「まあ待つてください。こつちが玉屋氏宛のもので、その絨じゆう毯たんの上で拾った。もう一通こつちの黄色い封筒は、この暖炉の上の、マントルピースの上にあつた。その天馬の飾りがついてい
る大きな置時計の下に隠してあつたのです」

「ほう、それはお手柄だ」

「もつと愕くことがある。封筒の中には、ほらこのとおり同じように新聞紙の脅迫状が入っている」といつて中から新聞紙を出してひろげ、「同じように赤鉛筆の丸のついた文字を辿たどつて読んでみると、——きさまが血まつりだ。乃公おれは思ったことをするのだ。蠅男——どうです。玉屋家の脅迫状と全く同じ者が出したのです」

「フーム、蠅男？ 何だい、その蠅男てえのは」

「さあ誰のことだか分りませんが——ホラこのとおり、蠅の死骸が貼りつけてあるのですよ」

署長が帆村の手の掌のなかを覗きこむと、なるほど蠅の死骸だった。やはり翅や脚をもがれ、そして下腹部は斜めにちよん切られていた。全く同じ、恐怖の印だ。

ああ蠅男！ 今夜玉屋総一郎に死の宣告を与えた蠅男は、それより数日前に、ドクトル鴨下の屋敷に忍びこんでいたのだ。あの半焼屍体は、蠅男の仕業ではなからうか。いやそれに違いない。では蠅男は、玉屋総一郎を間違ひなく襲撃するつもりに違ひない。悪いたずら戯の脅迫ではなかったのだ。

「蠅男」とは何者であろう？

疑問の屍体

その奇怪なる蠅男の署名入りサインの脅迫状が、こうして二通も揃ってみると、これはもはや冗談ごとではなかつた。

鴨下ドクトル邸の広間に集つた捜査陣の面々も、さすがに息づまるような緊張を感じないではいられなかつた。

中でも、責任のある住吉警察署の正木署長は佩はい剣けんを握る手もガタガタと慄ふるえ、まるで熱病患者のように興奮に青ざめていた。

「もし、検事さん。本官はこれからすぐに玉屋総一郎の邸に行つてみますわ。そやないと、あの玉屋の大將は、ほんまに蠅男に殺されてしまいますがな。手おくれになったら、これは後から言訳がたちまへんさかいな」

署長は、ドクトル邸の燃える白骨事件で、黒星一点を頂戴したのに、この上みすみすまたたどんを頂戴したのでは、折角これまで順調にいった出世を躓つまずかせることになるし、住吉警察署はなにをしとるのやと非難されるだろう辛さが、もう目に見えていた。彼は全力を挙げて、この正体の知れぬ殺人魔と闘う決心をしたのであった。しかし事実、彼はいくぶん焦りすぎているようであった。

「ああ、そうかね」村松検事はそういつてジロリと眼玉を動かした。「じゃ、そうし給え。——」

「じゃあ、そうします。——オイ、二、三人、一緒に行くのやぜ」村松検事は、正木署長たちがドヤドヤと出てゆく後姿を見送りながら、帆村探偵の方に声をかけた。

「オイ君。君は、ああいうチャンバラを見物にゆく趣味はないのかネ」と、正木署長の一行についてゆかないのかを暗に尋ねた。

帆村は、寝衣ねまきの上に警官のオーバーという例の異様な風体で、さつきから二枚の脅迫文をしきりと見較べていた。

「チャンバラはぜひ見たいと思うのですが、僕は頭脳あたまが悪いので、そういうときにまず映画シナリオ台本をよく読んでおくことにしているん

でしてネ」

「ほう、君の手に持っているのは、映画台本なのかネ」検事はパイプを口に咥くわえたまま、帆村の方に近よつた。

「ええ、こいつは、暗号で書いてある映画台本ですよ」と帆村は二枚の脅迫文を指し、「どうです。第二の脅迫状には、宛名が玉屋総一郎へと書いてあつて、第一の脅迫状には宛名無しというのは、これはどういう訳だと思ひますか」

検事はパイプから太い煙をプカプカとふかし、

「——それは極きわめて明めい瞭りようだから、書く必要がなかつたんだらう」

「極めて明瞭とは？」

「それを説明するのは、ここではちよつと困るが——」と、室の隅に立たされてゐる鴨下ドクトルの令嬢カオルと情人上原山治の方をチラリと見てから、帆村の耳許にソツと口を寄せ、「——い
いかネ。この邸にはドクトルが一人で暮しているのに、宛名は書
かんでも、誰に宛てたか分るじやないか」

「ほう、すると貴下は——」あなたと云つて帆村は村松検事の顔を見上げながら、「——この脅迫状がドクトルに与えられたもので、そしてアノ——ドクトルが殺されたとお考えなんですネ」

「なんだ、君はそれくらいのことを知らなかつたのか。あの燃える白骨はドクトルの身体だつたぐらい、すぐに分つてゐるよ」

「では、あれはどうします。三十日から旅行するぞというドクト

ルの掲示は？」

当分旅行ニツキ訪問ヲ謝絶ス。十一月三十日、鴨下——という掲示が奇人館の表戸にかけてありながら、家の中でドクトルの屍体がプスプス燃えているというのは、どうも変なことではないか。ドクトルが若し旅行を早くうち切つて家に帰つたところ、邸内に忍びこんでいた蠅男のために殺されたのであつたとしたら、家に入る前に、まず旅行中の掲示を外すのが当り前だ。ところがあのとおり掲示はチャンとしていたのであるから、それから考えるとドクトルが殺されたのだと考えるのは変ではないか。

このとき村松検事はパイプを^{くわ}啜えたまま、ニヤリニヤリと人の悪そうな笑いをうかべ、

「ウフ、名探偵帆村莊六さえ、そう思っていてくれると知ったら、蠅男は後から灘なだの生き一本かなんかを贈ってくるだろうよ」

「灘の生一本？ 僕は甘党なんですけどね」

「ホイそうだったネ。それじゃ話にもならない。——いいかね、旅行中の看板を出したのは、訪問客を邸内に入れない計略なのだ。邸内に入られて御覧。そこにドクトルの屍体があつて、火炙ひあぶりになろうとしていらあネ。それでは犯人のために都合が悪かろうじやないか。アメリカでは、よくこんな手を用いる犯罪者がある」

そんなことを知らなかったのか、とにかく帆村は苦笑をした。

「じゃ、ドクトルはもうこの世に姿を現わさないと仰有るのです

ね」

「それは現わすことがあるかも知れない。君、幽霊というやつはネ、今でも——」

帆村は愕いて、もうよく分りましたと云わんばかりに人を喰った検事の方へ両手を拵げて降参降参をした。

「じゃ検事さん。ドクトルを殺したのは誰です」

「きまつているじゃないか。蠅男が『殺すぞ』と説明書を置いていった」

「じゃあ、あの機関銃を射った奴は何者です」

「うん、どうも彼奴のあいつ素性すじょうがよく解せないんで、憂鬱ゆううつなんだ。

彼奴が蠅男であつてくれれば、ことは簡単にきまるんだが」

「さすがの検事さんも、悲鳴をあげましたね。あの機関銃の射手

と蠅男とは別ものですよ。蠅男が機関銃を持っていれば、パラパラと相手の胸もとを蜂の巣のようにして抛ほうつて逃げます。なにも痴情はての果ではあるまいし、屍体を素裸にして、ストーブの中に逆さ釣りにして燃やすなんて手数のかかることをするものですか」

「オヤ、君は、あの犯人を痴情の果だというのかい。するとドクトルの情婦かなんかが殺つたと云うんだネ。そうになると、話は俄が然ぜんおもしろいが、まさか君も、流行のお定さだしゅう宗しゅうでもあるまいネ」

帆村はそれを聞くと、胸をちよつと張つていささか得意な顔つきで、

「だが検事さん。あのドクトル邸は、ドクトル一人しかいなかったと仰有つていますが、事件前後に、若い女があ邸内にいたこ

とを御存じですか」

「ナニ若い女が居た——若い女が居たというのかネ。それは君、本当か。——」

村松検事は、冗談でない顔付になって、帆村の顔を穴の明くほど見つめた。

探偵眼

そこで帆村は、屍体発見当日、手洗所の鏡の前に、フランス製

の白粉おしろいが滾こぼれていたことなどを検事のために話して聞かせた。

「そうかい、そういう若い女が、この陰鬱いんうつな邸内にいたとは愕おどろいたネ」

と、村松検事は、首をうなだれてやや考えていたが、やがて首をムツクリ起すと、可笑おかしそうにクスクス笑いだした。

「なにがそんなに可笑おかしいのです」

「だって君、脅迫状の主は、蠅男だよ。いいかね。蠅男であつて、あくまで蠅女ではないんだよ。若い女がいてもいい。これがドクトル殺しの犯人だとは思えないさ」

「でも検事さん。さつき仰おっしゃ有あつたように、この蠅男なる人物は、偽いつわりの旅行中の看板をかけるような伶俐りこうな人間なんですよ。女だ

から蠅男でないとは云い切らぬ方がよくはありませんか。それよりも、早くそのフランス製の白粉の女を探しだして、それが蠅男ではないという証明をする方が近道ですよ」

「ウム、なるほど、なるほど」

検事は、孫の話聴く祖父のように、無邪気に首を大きく振って肯いた。

そのとき、奥の方から一人の警官が、急ぎ足で入ってきた。

「検事どのに申し上げます。只今、正木署長からお電話でございます。玉屋邸から懸けて参つとります」

検事は、その声に席を立てていった。帆村は、引返そうとする警官をつかまえて、^{たばこ} 莨を一本所望した。警官はバツトの箱ごと帆

村の手に渡して、アタフタと検事の後を追っていった。

帆村は、バットを一本ぬきだして口に咥えた。そして燐寸^{マッチ}を求めてあたりを見まわしたが、このとき室の隅に、立たせられている鴨下カオルと上原山治の姿に気がついた。

「おお上原さん、燐寸をお持ちじゃありませんか」

と、帆村はその方へ近づいていった。

張り番の警官の方が愕いて、ポケットから燐寸を押しだして、帆村の方へさしだしたけれど、帆村はそれに気がつかないらしく、「いや、どうもすみません」

と、上原青年の貸して呉れた燐寸を手にとった。そしてバットに火を点けて、うまそうに煙を吸った。

「——東京は、わりあい暖いようですね」

「——はア暖こうございましたが」

と、上原青年は眼をパチパチさせた。

「今朝早く、鴨下さんを迎えにゆかれたんですね」

「はア——そうです」

「雨のところを、大変でしたネ」

「ええッ——そうでございます」

「あの、板橋区の長崎町も、随分開けましたネ」

「あッ、御存じですか、鴨下さんの住んでいらっしやる辺を——」

「いや、こうしてお目に懸るまで、存じませんでした」

若い男女は、愕きの目を見張って、互いに顔を見合わせた。

「きょうの列車は、燕号つばめですネ。だいぶん空すいていましたネ。お嬢さんは、よく睡れましたか」

これを聞いていたカオルは、真青になった。

「ああ、もうよして下さい。気持が悪くなりますわ。探偵なんて、なんて厭いやな商売でしょう。まるであたしたち、監視されていたようですよ」

帆村は、笑いかけた顔を、急に生真面目な顔に訂正しながら、「やあ、お気にさわったらお許し下さい。もうお天気の話はよします」

といって、指先に挟はさんだ莨たばこをマジマジと見るのであった。

そこへ電話口へ出ていた村松検事が帰ってきた。あとに警察の

保^ほ姆^ぼがついている。

「おう、帆村君、正木署長の電話によると、いま玉屋総一郎の邸に、怪しき男が現われて邸内をウロウロしているそうだよ。いよいよチャンバラが始まるかもしれないということだ。これから一緒に行ってみようじゃないか」

「ほう、また怪しき男ですか。どうも怪しき男が多すぎますね」
カオルの連れの上原山治が、キラリと眼を動かした。

「多いぶんには構わない。足りないよりはいいだろう。——それからお嬢さんに上原君でしたかな。二階に落着いた部屋があるから、そこでゆっくり休んで下さい。この婦人が世話をしますから、どうぞ」

検事が頤あごをしやくると、保母は人慣れた様子で二人に挨拶し、二階へ案内する旨むねを申述べた。——二人は観念したものと見え、また互いの眼を見合わせたまま、保母の後について、部屋を出ていった。

「さあ、行こう。——が、君の服装は困ったネ」と検事が顔をしかめた。

「いや、服ならあるんです。ソロソロ閑ひまになりましたから、一つ着かえますかな」

そういつて帆村は、そこに張り番をしていた警官に会釈すると、警官は椅子の上に置いてあつた風呂敷包みをとつて差出した。風呂敷を解くと、宿屋に残してあつた洋服がそっくり入つていた。

「呆れたものだ。早く着換えとけばいいのに——」

「そうはゆきませんよ。事件の方が大切ですからネ。洋服なんか、必ず着換える時機が来るものですよ」

そういいながら、帆村は借りていた警官のオーバーを脱ぎ、病院の白い病衣を脱ぎすてた。

警官は帆村のために、襯衣やズボンをとってやりながら、検事には遠慮がちに、帆村に話しかけた。

「——もし帆村はん。ちよつと勉強になりますさかい、教えていただけませんか」

「ええ、何のことです」

「そら、さっきの二人に帆村はんが云やりましたやろ、東京は

暖いとか、雨が降っていたやろとか、燕で来たやろ、娘はんの家は板橋区の何処やろとかナ。二人とも、顔が青なつてしもうて、えろう吃驚びっくりしとりましたナ、痛快でやしたナ。あの透視術を教えとくんはなはれ、勉強になりますさかい」

藍甕あいがめてんぶく 転覆事件

帆村はそれを聞くと面映おもはゆげにニツと笑い、

「あああれですか。あれは透視術でもなんでもないのですよ。聞

くだけ、貴下が腹を立てるようなものだけけれど——」

「ナニ帆村莊六の透視術？」と早耳の検事はその言葉を聞き咎めて、「——おい君、善良な警官を悪くしちや困るよ」

「いや話を聞いておくだけなら、悪かなりませんよ」と帆村は弁解して、「——もちろん種があるんです。これは有名なシャーロック・ホームズ探偵がときに用いたと同じような手なんです。——さつき青年上原君に燐寸を借りたでしょう。あの燐寸は、燕号の食堂で出している燐寸です。まだ一ぱい軸木がつまっています。夜には大阪着ですから、ここへ二人が現われた時間が十時頃で、燕号で来たことは皆ピッタリ符合します。なんでもないことですよ」

「ははア燐寸と鉄道時間表の常識とが種だっか」と警官は大真面目に感心して、「すると東京が暖いとか、雨が降っていたというのはい——」

「あれは、上原君なんかの靴を見たんです。かなり泥にまみれていました。ご承知のように、わが大阪は上天気です。しからば、あの靴の泥は東京で附着したのに違いないでしょう。それも雨です。もし雪だったら、ああは念入りに附着しませんよ。今年は十一月からずっと寒い。東京は何度も雪が降った。それなのに昨日は雨が降ったというのですから、これは暖かったに違いないですよ」

「はあ、そういうところから分りよったんやな、なるほど種は種

やが、鋭い観察だすな。それはそれでええとして、青年の方が令嬢を朝早く迎えに行つたいうんは？」

「それは、上原君の靴だけではなく、カオルさんの靴にも同等程度の泥がついていたからです。つまり二人は同じ程度の泥ぬかるみを歩いたことになります。それから燕号は、東京駅を午前九時に発車するのですから、朝早く迎えに行つたんでしよう」

「そうなりまつか。ちよつと腑に落ちまへんな。もし二人が駅で待合わしたんやってもよろしいやないか。そして、令嬢も上原も郊外に住んで居つたら、靴の泥も、同じように附着しよりますがな」

帆村は、ここだという風に大きく肯き、

「ところがですネ、もつと大事な観察があるのです。二人の靴についている泥が、どっちも同質なんです」

「同質の泥というと——あんた貴下さんは、地質にも明るいのやな」

「ナニそれほどでもないが、二人の靴の泥を後でよく見てごらんなさい、どっちも泥が乾いているのに赤土らしくならないで、非常に青味がかつていましょう。染めたように真青です。だから、どっちも同質の土です。二人は同じ場所を歩いたと考えていいでしょう」

「へえーッ、さよか。そんなに青い泥がついとりましたか、気がつきまへなんだ。それはええとして、最後に、家が板橋区のごどこやらとズバリと云うてだしたのは、これはまたどういふ訳だんネ。

令嬢を前から知つとつてだすのか」

「いえ、さつきこの家で始めて会つたばかりです。だがチャンと分るのです。あのような青いインキで染めたような泥は、板橋区ほかの長崎町の外にないんです。もっと愕かすつもりなら、通つた通りの丁目まで云いあてられるんですよ」

「へえ、驚きましたな。しかしまた、あんな青い泥がその長崎町だけにあつて、外の土地には無いというのは、ちと特殊すぎますな。長崎町にあつたら、その隣り町にもありまっしゃろ。そもそも地質ちゆうもんは——」

「ああ、あなたの地質の造詣ぞうけいの深いには敬意を表しますが——

——

「あれ、まだ地質学について何も喋っていまへんがナ」

「いや喋らんでも僕にはよく分っています。それにこの問題は地質学の力を借りんでもいいのです。つまりちよつと待つて下さい、あれは地質上、あんなに青いのではないのですからネ」

「ほほん、地質で青いのかとおもいましたのに、地質以外の性質で青いちゆうのは信じられまへんな」

「いや信じられますよ。あなたはきよう東京から来た東京タイムスの朝刊をお読みになりましたか。読まない、そうでしょう。新聞を見るとあの長崎町二丁目七番地先に今掘りかえしてたいへん道悪のところがあります。その地先で昨夜、極東染料会社の移転でもつて、アニリン染料の真青な液が一ぱい おわたる 大樽に入つて

いるのを積んだトラックがハンドルを道悪に取られ、呀っという間に太い電柱にぶつかって電柱は折れ、トラックは転覆し、附近はたちまち停電の真暗やみになった。そしてあたり一杯に、その染料が流れだして、泥濘が真青になったと出ています。何も知らないで、現場へ飛びだした弥次馬たちが、後刻自宅へ引取つてみると、誰の身体も下半分が真青に染つていて、洗つても洗つても取れないというので、会社に向け珍な損害賠償を請求しようという二重の騒ぎになったとか、面白可笑しく記事が出ているんです。カオル嬢と上原君の泥靴の青い色からして、二人が今朝この泥濘を歩いたに違いないという推理を立てたのです」

「な、な、なるほど、なるほど、さやか。特殊も特殊、まるで軽

るわざ
業のような推理だすな」

「全くそのとおりです。運よく、特殊事情をうまく捉えただけのことです。しかしこれは笑いごとじゃないのです。あなたがたは官権というもので捜査なさるからたいへん楽ですが、われわれ私立探偵となると、表からも乗り込めず、万事小さくなつて、貧弱な材料に頼つて探偵をしなきゃならない辛さがあるんです。そこでああなたがたよりは、小さいことも気にしなきゃならんです。目につくものなら、何なりと逃^のがさんというのが、私立探偵の生命線なんでして——」

「もう止せ、帆村君。手品の種明かしの後でながなが演説までされちゃ、折^{せっかく}角保護している玉屋総一郎氏が蠅男の餌食になつて

しまうよ。そうなれば、今度は、こっちの生命線の問題だて」

そういつて村松検事は、時計を見ながら、帆村の肩を指で突いた。

しかし、警官は、何に感心したものか、いつまでも、「なるほどなアなるほどなア」と独り言をいひとごといながら、二人の出てゆくのに気がつかない風だった。

生きている主人

夜はいたく更けていた。

仰ぐと、寒天には一杯の星がキラキラ輝いていた。晴れ互わたった
暗黒の夜――

ほとんど行人の姿もない大通りを、村松検事と帆村莊六の乗った警察自動車は、弾丸のように疾駆していった。

天下茶屋三丁目てんかぢやは、スピードの上では、まるで隣家も同様であった。

玉屋邸の前で、二人は車を下りた。

扉を開けてくれたのを見ると、それは、帆村もかねて顔見知りの大川巡査部長だった。彼は直立不動の姿勢をして、

「――私がつぱら屋外警戒の指揮に当たります」

と、検事に報告した。

「それは御苦労。すっかり邸宅を取巻いているのかネ」

「へえ、それはもう完全やと申上げたいくらいです。塀外、門

内、邸宅の周囲と、都合三重に取巻いていますさかい、これこそ
ほんま
本当の蟻の匍いでる隙間もない——というやつでござります」

「たいへんな警戒ぶりだネ」

「へえ、こつちも意地だす。こんど蠅男にやられてしもたら、それこそ警察の威信地に墜つだす。完全包囲をやらんことには、良かれ悪しかれ、どつちやにしても寢覚ねぞめがわるおます」

この巨大な体躯の持ち主は、頤あごひも紐ひもをかけた面にマスクもつけず、彼の大きな団子鼻は寒気のために苺いちごのように赤かった。なに

にしても、たいへんな頑張り方だった。

村松と帆村は、監視隊の間を縫って警戒線を一巡した。なるほど、映画に出てくる国定忠治の捕物を思わせるような大規模のものであった。警官の吐く息が夜目にも白く見えた。

一巡後、二人は、嚴重な門を開いて貫つて、玄關に入った。

さすがに屋内は、鎮まりかえっていた。でも座敷に入ると、襖ふすまの蔭や階段の下に、警官が木像のように立っていた。そして検事の近づくのを見ると、一々鄭重な敬礼をした。

「ああ検事さん検事さん。——」

警戒総指揮官の正木署長が、向うからやつて来た。彼も頤紐をかけ、足には靴下を脱いで、その代りに古足袋たびを履いていた。そ

れは捕物の際、畳の上で滑らないためらしかった。

「おお正木君か。——君、蠅男というのは何十人ぐらいで、隊をなしてくるのかネ」

「隊をなして？ ——ハツハツハツ。検事さんのお口には敵いません。ともかくも屋内のどこからどこまで、私のところで完全に指揮がとれるようになっております」

「ウム、完全完全の看板流行ばやりだわい」

「え、何でございます」

「いや、革の袋からも水が漏るといってネ、油断はできないよ。

——主人公の居るところは何処かネ」

「ああ、それはこちらです。どうぞ、こちらへ——」

正木署長は、検事を廊下づたいに玉屋総一郎の書斎の前に連れていった。その扉の前には、鬼あざむを欺ごうりきくような強力ごうりきの警官が三人も立っていた。

検事は扉ドアの方によつて、ハンドルを握つて廻してみた。

「ああ、あきまへん」と警官の一人がいった。「御主人が中に入つて、自分で鍵をかけていてだんネ」

「中から鍵を——すると警官も中へは入れないのかネ」

「警官まで、蠅男の一味やないか思うとるようですなア」

「ちよつと会つてみたいが——」

「そんなら、扉を叩いてみまつき」

警官が、なんだか合図らしい叩き様で、扉をドンドン、ド

ンドンと叩いた。そして主人の名を大声で呼んでいると、やがて扉の向うで微かながら、これに応える総一郎の喚わめき声ごえがあつた。

「——さつき断つとききましたやろ。もう叩いたりせんといっておくれやす。そのたんびに心臓がワクワクして、蠅男にやられるよりも前に心臓麻痺になりますかな」

主人公は、心細いことを云つて、脅えきつていた。正木署長は検事に発声をうながしたが、村松はかぶりを振つてもうその用のないことを示した。で、署長が代つて、

「——私は署長の正木ですがなア、なにも変つたことはあらしまへんか」

すると中からは、総一郎の元気な声で、

「ああ署長さんでつか。えろう失礼しましたな。今のところ、何も変りはあらしまへん。しかし署長さん。殺人予告の二十四時間目というと午後十二時やさかい、もうあと三十分ほどだすなア」

「そう——ちよつと待ちなはれ。ウム、今は十一時三十五分やら——ええ御主人、もうあと二十五分の辛抱だす」

「あと二十五分でも、危いさかい、すぐには警戒を解いて貰うたらあきまへんぜ。私もこの室から、朝まで出てゆかんつもりや、よろしまつしやるな」

「承知しました。——すると朝まで、御主人はどうしてはります」

「十二時すぎたら、此処に用意してあるベッドにもぐりこんで朝方まで睡りますわ」

「さよか。そんならお大事に、なにかあつたら、すぐあの信号の紐を引張るのだつせ」

「わかつてます。——そんならもう扉を叩かんようにお頼み申しまつせ。蠅男が来たのか思うて、吃驚びっくりしますがな」といつて総一郎は言葉を切つたが、また慌てて声をついで、「——それからあのウ、池谷いけたによのすけ与之助は帰つて来ましたやろか。そこにいまへんか」

「ああ池谷はんだつか。さあ——」と署長は後をふりかえつて、警官の返事を求めたあとで、「どこやら行つてしもうたそうや。うちに居らしまへんぜ」

「ああそうでつか。おおきに。——そんならこれで喋るのんはお

仕舞いにしまっせ」

帆村は、さつきからしきりと兩人の扉ごしの会話に耳を傾けていたが、このとき首を左右に振って、

「——喋るのはお仕舞いにしまっせ、か。これが永遠の喋り仕舞いとなるという意味かしら。ホイこれは良くない卦^けだて」といって、大きな唇をグツとへの字に曲げた。

天井裏の怪音？

「あれはなんだネ、池谷与之助てえのは」

と、検事が署長にたずねた。

「その池谷与之助ですがな。さつき怪しい奴が居るいうてお知らせしましたのんは。夜になって、この邸にやってきよりましたが、主人の室へズカズカ入ったり、令嬢糸子さんを隅へ引張って耳のところさかさやで囁いたり、そうかと思うと、会社の傭人を集めてココソと話をしてるちゆう挙動不審の男だすがな」

「フーム、何者だネ、彼は」

「主治医や云うてます。なんでも宝塚に医院を開いとる新療法の医者やいうことだす。さつき邸を出てゆつきよつたが、どうも好かんかお面や」

と、署長は、はくめんむげん白面無髯に、金縁眼鏡をかけているというだけの、至つて特徴のない好男子の池谷与之助の顔に心の中で唾をはいていた。

「なんだ、怪しいというのは、たったそれだけのことかネ」

「いいえいな、まだまだ怪しいことがおますわ。さつきもナ、――」

と云いかけた途端であつた。

突然、二階へ通ずる奥の階段をドンドンドンと荒々しく踏みながらして駈け下りてくる者があつた。それに続いてガラガラガラツとなにか物の壊れる音！

男女いずれとも分らぬたまき魂消るような悲鳴が、その後鋭く起つ

た。

素破すわ、なにごとか、事件が起つたらしい。

「や、やられたツ。助けてえ——死んでしまうがなア——」

と、これは紛れまぎもない男の声。

警官たちはハツと顔色をかえた。そして反射的に、その叫び声のする方へ駈けだした。

「こらこら、神妙にせんか。——」

騒動の階段の下から、襟がみを引捕えられて、猫のように吊しあげられたのは一人の男と女。

「どうしたどうした」

「どちらが蠅男や」

「蠅女も居るがナ」

「あまりパツとせん蠅男やな」

そんな囁きが、周囲から洩れた。

正木署長は前へ進み出で、

「コラ、お前は見たような顔やな」

と男の方にいった。

「へえ、私は怪しい者ではござりまへん。会社の庶務にいます山ノ井という者で、今日社長の命令で手伝いに参りましたわけで……」

「それでどうしたというのや。殺されるとか死んでしまうと喚きよつたは——」

「いや、それがモシ、私が階段の下に居りますと上でドシドシと
えらい登音だす。ひよつと上を見る途端に、なにやら白いものが
スーッと飛んできて、この眉間にあたったかと思うとバツサリ！」
「なにがバツサリや。上から飛んで来たというのは、そらそこに
滅茶滅茶に壊れとる金魚鉢やないか。なにを慌てているねん。二
階から転げ落ちてきたのやないか」

「ああ金魚鉢？ ああさよか。——背中ではピリピリするところが
おますが、これは金魚が入ってピチピチ跳ねとるのやな」

署長以下、なんのことだと、気の弱い社員のズブ濡れ姿に朗ら
かな笑声を送った。

「——女の方は誰や。コラ、こつち向いて——」

と、署長は、鳩が豆を喰ったように眼をパチクリしている四十九がらみの女に声をかけた。

「へへ、わ、わたくしはお松云いまして令嬢いとはんのお世話をして居りますものでございます」

「ウム、お松か。——なんでお前は金魚鉢を二階から落としたんや。人騒がせな奴じゃ」

「金魚鉢をわざと落としたわけやおまへん。走って居る拍子に、つい身体が障りましてん」

「なんでそんなに夢中で走つとつたんや」

「それはアノ——蠅男が、ゴソゴソ匍はつてゆく音を聞きましたものやから、吃びっくり驚して走りだしましたので——」

「十二蠅男？ 蠅男の匍うていつきよる音を聞きたいのんか。

ええオイ、それは本当か——」

署長は冗談だと思いつつも、ちよつと不安な顔をした。なにしろ蠅男防禦陣を敷いている真最中のことであつたから。

「本当でほんまつせ。たしかに蠅男に違いあらへん。ゴソゴソゴソと、重いものを引きずるような音を出して、二階の廊下の下を匍うとりました」

「二階の廊下の下を——」

と署長が天井を見上げると、周囲の警官たちも、こわごわ同じように天井を見上げながら、頸を亀の子のように縮めた。

「鼠とちがうか。蛇が天井に巢をしとるのやないか。オイお松、

ハッキリ返事をせい」

署長はすこし狼狽ろうばいの色を現わした。

「ちがいますかな、ちがいますかな。鼠ねずみがあんな大きな音をたてますかいな。——蛇？ 蛇が、こんな新築しんだちに入ってくるものでつしやるか。ああ気持がわるい」

署長は、しばらく無言で、ただ獣のように低く唸っていた。が、急に腕時計を出してみて、

「ウム、いま十一時五十五分だ。——」

と叫んで、周囲をグルツと見廻したが、その人垣の外に、村松検事が皮肉たつぷりの笑みを浮べて立っているのを見つけると、

「ああ、検事さん。いまのお松の話お聞きでしたか。蠅男がこの

嚴重な警戒線を突破して天井裏を匍はうというのは、本当ほんまのことやと思われまへんが、時刻も時刻だすよつて、一応主人公の安否を聞いてみたら思いますけれど、どないなもんでっしやろ」

検事はパイプを口から離して、静かに云つた。

「聞いてみない方より、聞いてみた方がいいだろうネ。しかしこんなくだらん騒さわぎに、こんなに皆が一つ処ところに固こまつてしまうのじやあ、完全な警戒網もうでございとは、ちよつと云えないと思うが、どうだ」

「おお」と署長は始めて気がついたらしく、「これ皆、一体どうしたんや。よく注意しておいたのに、こう集つて来たらあかへんがな。——ああ、あの部屋に間違いはあらへんやろな」

署長は慌ててそこを飛びだし、主人公の籠城している居間の方へ駆けだした。

「ウム、よかった。——」

署長は居間の前に、警官が一人立っているのを見て、ホツと安心した。

「オイ異状はないか。ずっとお前は、ここに頑張っていたんやろな」

「はア、さつきガチャンのときに、ちよつと動きましたが、すぐ引返して来て、此処に立ち続けて居ります」

と東京弁のその警官が応えた。

「なんや、やっぱり動いたのか」

「はア、ほんの一寸ちよつとです。一分か二分です」

「一分でも二分でも、そらあかんがな」

といったが、他の二人はどこへ行つたか居なかつた。

「さあ、ちよつと中へ合図をしてみい」

警官は心得て、ドンドンドン、ドンドンと合図どおりに扉をう
つた。そしてそれをくりかえした。

「——御主人！ 玉屋さーん」

署長は扉に口をあてんばかりにして呶鳴つた。しかし内部から
は、なんの応答も聞えなかつた。

「こら怪つたいなことや。もつとドンドン叩いてみてくれ」

ドンドンドンと、扉はやけにうち叩かれた。主人の名を呼ぶ署

長の声はだんだん瘡かんだか高くなり、それと共に顔色が青くなつていった。

「——丁度午後十二時や。こらどうしたんやろか」
そのとき広い廊下の向うの隅にある棕櫚しゅうろの鉢植の蔭からヌツと姿を現わした者があつた。

不思議なる惨劇さんげき

死と生とを決める刻限は、既に過ぎた。

死の宣告状をうけとったこの邸の主人玉屋総一郎は、自ら引籠った書斎のなかで、一体なにをしているのであろうか。その安否を気づかう警官隊が、入口の扉を破れるように叩いて総一郎を呼んでいるのに、彼は死んだのか生きているのか、中からは何の応^{らえ}答もない。扉の前に集る人々のどの顔にも、今やアリアリと不安の色が浮んだ。

そのとき、この扉の向い、丁度棕櫚^{しゅろ}の鉢植の置かれている陰から、ヌーツと現われたる人物……それは外でもない、主人総一郎の愛娘糸子の楚々たる姿だった。ところがこの糸子の顔色はどうしたものか真青であった。

「どうしたんです、お嬢さん」

と、これを逸いちはや早く見つけた帆村探偵が声をかけた。この声に、彼女の体は急にフラフラとなると、その場に仆れかけた。帆村は素早くそれを抱きとめた。

扉のまえでは、村松検事と正木署長の指揮によつて、今や大勢の警官が扉をうち壊すためにドーンドーンと躰を扉にうちあてている。さしもの嚴重な錠前も、その力には打ちかつことも出来ないと思えて、一回ごとに扉はガタガタとなつていく。そして遂に最後の一撃で、扉は大きな音をたてて、室内に転がった。

警官隊はどつと室内に躍りこんだ。つづいて村松検事と正木署長が入つていった。

「おお、これは——」

「うむ、これはえらいこつちや」

一同は躍りこんだときの激しい勢いもどこへやら、云いあわせたように、その場に立ち竦すくんだ。なるほどそれも無理なきことであつた。なんとということだ。今の今まで一生懸命に呼びかけていた主人総一郎が、書斎の天井からブラ下つて死んでいるのであつた。

すこし詳しく云えば、和服姿の総一郎が、天井に取付けられた大きな電灯の金具のところから一本の綱つなによつて、頸部けいぶを締められてブラ下つているのであつた。

他殺か、自殺か？

すると、正木署長が叫んだ。

「おお血や、血や」

「ナニ血だつて？ 縊死いしに出血は変だネ」

と村松検事は屍体を見上げた。そのとき彼は愕きの声をあげた。
「うむ、頭だ頭だ。後頭部に穴が明いていて、そこから出血しているようだ」

「なんですつて」

人々は検事の指す方ゆびさを見た。なるほど後頭部に傷口が見える。
「オイ誰か踏台を持ってこい」検事が叫んだ。

帆村探偵に抱かれていた糸子は、間もなく気がついた。そのとき彼女は低い声でこんなことを云った。

「——貴郎あなた、なんで書齋へ入ってやったン、ええ？」

「ええッ、書齋へ——何時、誰が——」

意外な問に帆村がそれを聞きかえすと、糸子は呀つと声をあげて帆村の顔を見た。そして非常に愕きの色を現わして、帆村の身体をつきのけた。

「——私^{うち}、何も云えしまへん」

そういったなり糸子は沈黙してしまった。いくら帆村が尋ねても、彼女は応えようとしなかつた。そこへ奥女中のお松が駈つけてきて、帆村にかわつて糸子を^{いたわ}劬つた。

警官たちに遅れていた帆村は、そこで始めて惨劇の演ぜられた室内に入ることができた。

「ほう、これはどうもひどい。——」

彼とてもこの場の慄然りつぜんたる光景に、思わず声をあげた。そのとき検事と署長とは、踏台の上に抱き合うようにして乗っていた。そしてしきりに総一郎の屍体を覗きこんでいた。

「——正木君。これを見給え、頭部の出血の個所は、なにか鋭い錐きりのようなものを突込んで出来たんだよ。しかも一旦突込んだ兇器を、後で抜いた形跡が見える。ちよつと珍しい殺人法だね」

「そうだな、検事さん。兇器を抜いてゆくというのは実に落ついたやり方だな、それにしても余程力の強い人間やないと、こゝうは抜けまへんな」

「うん、とにかくこれは尋常な殺人法ではない」

検事と署長は、踏台の上で顔を見合わせた。

「ねえ、検事さん。一体この被害者は、頸を締められたのが先だつしやるか、それとも鋭器を突込んだ方が先だつしやるか」

「それは正木君、もちろん鋭器による刺殺の方が先だよ。何故つて、まず出血の量が多いことを見ても、これは頸部を締めない先の傷だということが分るし、それから——」

「——って、検事は屍体の頸の後に乱れている血痕を指し、

「——綱の下にある血痕がこんな遠くまでついているし、しかも血痕の上に綱の当った跡がついているところを見ても、綱は後から頸部に懸けたことになる。だからこれは——」

「検事はそこで云いかけた言葉を切つて、ギロリと目を光らせた。何だす、検事さん。何かおましたか」

「うむ、正木君。さつきからどうも変なことがあるんだ。血痕の上に触った綱に二種あるんだ。つまり綱の跡にしても、これとこれとは違っている。だから二種類の綱を使ったことになるんだが、現在屍体の頸に懸っているのは一本きりだ」

そういつて検事は不思議そうに室内を見廻した。

血によつて印刷された綱の跡——このようない見つまらないものを見廻のがさなかつたのは、さすがに名検事の誉高ほまれき村松氏であつた。それこそ恐るべき「蠅男」の正体を語る一つの重大な鍵であつたとは、後になつて思いだされたことだつた。

糸子の質問

室内を見廻している村松検事は、そこに帆村の姿を認めたので声をかけた。帆村はしきりに天井を見上げているところであった。

「なんです、検事さん」

「うむ帆村君、ちよつとここへ上つて見てくれたまえ。ここに君が面白いがるものがあるんだ」

といって、村松検事は宙に下つている総一郎の頸のあたりを指した。

帆村は身も軽々と、踏台の上にとびのつた。

「ああこれですか。なるほど血の上についている綱の痕のようなものが二種類見えますネ」

と帆村は検事の説明に同意した。

「ねえ、分るだろう。こっちに見える模様の細かい方が、今屍体を吊りあげている綱の痕だ。もう一方の模様の荒いハッキリと綱目の見える方の綱が室内のどこにも見当らないんだ」

帆村は検事の指す血痕をじっと見つめていたが、頓狂な声を出して、

「——これは綱の痕じゃありませんよ」

「綱の痕じゃないって？　じゃ何の痕だい」

「さあハッキリは分らないが、これは綱ではなくて、何か金具の

痕ですよ。ハンドルのペンチだの、金具の手で握るところには、よくこうした網目の溝が切りこんであるじゃありませんか」

「なるほど——網目の溝が切りこんである金具か。うむ、君のいうとおりだ。じゃもう一本の綱を探さなくてもいいことになったが、その代りに金具を探さにやらんこととなった。金具って、どんなものだろうネ。どうしてこんなに綱と一緒に、こんな場所に附いているのだろうネ」

村松検事はしきりと頭をひねった。しかし帆村はなににも応えなかった。帆村にもこの返事は直ぐには出来ないであろう。

この応答が、もしすぐ^{こたえ}にこの場でできたとしたら、「蠅男」の正体は案外楽に解けたであろう。

奇妙なる金具のギザギザ溝の痕！

そのとき室の入口に、なにか騒がしい諍いさかいが始まった。

踏台の上にならぬ検事はヨロヨロとした腰付で入口を見たが、ひと目で事情を悟った。

「オイ帆村君。被害者の令嬢がこの惨劇を感じて入りたがっているようだ。君ひとつ、いい具合に扱ってくれないか。むろんこゝへ近付いてもかまわないが、その辺よろしくネ」

帆村は検事の頼みによって、入口のところへ出ていった。警官が半狂乱の糸子を室内に入れまいとして骨を折っている。

帆村はそれをやんわりと受取って、彼女の自制を求めた。糸子はすこし気を取直したように見えたが、こんどは帆村の胸にすが

りつき、

「——たった一人の親の大事だすやないか。私は心配うちやよつて、さつきから入口の前をひとりで見張つてたくらいや。警官隊もとんとあきまへんわ。警戒の場所を離れたりして、だらしがおまへんわ。そんなことやさかい、私のたった一人の親が殺されてしもうたんやしい。もう何云うても、こうなつたら取りかえしがつかへんけれど——そないにして置いて、私がお父つあんのところへ行こうと思うたら、行かさん云やはるのは、なんがなんでもあんまりやおまへんか」

と、ヒイヒイいって泣き叫ぶのだった。

それを聞いていると、糸子が父の死を既すに察していることがよ

く分つた。帆村は糸子に心からなる同情の言葉をかけて、気が落ついたら、自分と一緒に室内へ入ってお父さまの最期さいごを見られてはどうかと薦すすめた。誠意ある帆村の言葉が通じたのか、糸子は次第に落つきを回復していった。

それでも父の書齋に一步踏み入れて、そこに天井からダラリと下っている父親の浅ましい最期の姿を見ると、糸子はまた新たな愕おどろきと歎なげきとに引きつけそうになった。もしも帆村が一段と声を励まして気を引立ててやらなかったら、繊弱かよわいこの一人娘は本当に気が変とつになつてしまつたかもしれない。

「おおお父とつつあん。な、なんでこのような姿になつてやつたん」
糸子は帆村の手をふりきつて、冷い父親の下半身にすっかり縫すが

りつき、そしてまた激しく嗚咽おえつをはじめたのであった。鬼神のよ
うに強い警官たちではあつたけれど、この美しい令嬢が先に母を
喪い今こうして優しかつた父を奪われて悲歎やる方なき可憐な姿
を見ては、同情の心うごき、目を外らさない者はなかつた。

「おおお父つあん。誰かに殺されてやったかしらへんけれど、き
つと私が敵かたきを取つたげるしい。迷わんと、成仏しとくれやす。南
無阿弥陀仏。——」

糸子はワナワナ慄う口唇くちびるをじつと噛みしめながら、胸の前に
合掌した。若い警官たちは、めいめいの心の中に、この慨なげき悲し
む麗人を慰めるため、一刻も早く犯人を捕えたいものだと思わぬ
者はなかつた。

帆村莊六とて、同じ思いであつた。彼は糸子の傍に近づき、もう余り現場に居ない方がいいと思う旨伝えて、父の靈に別れを告げるよう薦めた。

糸子はふり落ちる泪の中から顔をあげ、帆村に礼などをいった。彼女の心は本当に落つきを取り戻してきたものらしい。彼女は父の屍体を、初めて見るような面持で見上げた。そして帆村の腕を抑えて、思いがけないことを問いかけた。

「もし——。父はこういう風に下つていたところを発見されたんでっしやるか」

「もちろん、そうですよ。それがどうかしましたか」

帆村には、この糸子の言葉がさらに腑に落ちかねた。

「いや別に何でもあれしまへんけれど——よもや父は、自殺をするために自分で首をくくつたのやあれしまへんやろな」

「それは検事さんの調べたところによつてよく分つています。犯人は鋭い兇器をもつてお父さまの後頭部に致命傷を負わせて即死させ、それから後にこのように屍体を吊り下げたということになつているんですよ。僕もそれに同感しています」

「はあ、それでつか」と糸子は肯うなずき、「こんな高いところに吊るのやったら、ちよつと簡単には出来まへんやろな。犯人が、いま云やはつたようなことをするのに、時間がどの位かかりまっしやろ」

「ええ、なんですつて。この犯行にどの位時間が懸るといので

すか。うむ、それは頗るすこぶ優秀なる質問ですね。——」

帆村は腕を組んで、犯行の時間を推定するより前に、なぜ糸子
が、このような突然の質問を出したかについて訝いぶかった。

答に出た「蠅男」

「犯行に費した時間はというと、そうですね、まず少くとも二分
は懸るでしょうね。手際が悪いとなると、五分も十分も懸るでし
よう」

「ああそうでつか。二分より早うはやれまへんか」

と糸子は帆村に念を押しした。

「二分より早くやるには余程人数が揃っているとか、或いはまた道具が揃っていないと駄目ですね」

「ああそうでつか。——二分、ああ二分はかかりまっかなア」

糸子はなぜか二分という時間にこだわっていた。

帆村は糸子の問に応えているうちに、妙な事実気がついた。

それは犯人はどんな台を使って総一郎をこんな高いところに吊りあげたかという疑問だった。

なぜならこの部屋は天井がたいへん高く、普通の家の書齋に比べると三、四尺は高かったろう。そこから吊り下った屍体の爪先

は、床から三尺ぐらいのところにあるが、それを吊り下げる綱の一番高いところは床上から二間ばかり上にあつた。犯人の手はどうしてそんな高いところへ届いたのだろう。

いま検事や署長などが、屍体の傍に置いている台は、その部屋にあつた二尺あまりの丸い卓子の上に、勝手に使つていた二尺の踏台を重ねあわせたものだ。犯人が総一郎を殺したときには、この踏台はこの部屋になかつた。では彼はどうして十二尺あまりもあるところへ綱を通して結び目を作つたのだろう。

この踏台に代るようなものが室内にあるかと思廻したが、低い椅子の外に何にも見当らなかつた。しかも今台につかつている丸卓子のほかはなんにも動かさなかつたというのだから、ますます

不思議である。

では犯人の人数が多くて、かるわざ軽業でもやるように肩車をして、総一郎を吊りあげたろうかと考えるのに、これもちと可笑おかしい。それはこの室の扉から出入した者は多分無かつたろうと思われるし——多分というわけは、金魚鉢が二階から降つてきたときに、この扉の前を警備していた警官が、ついそちらへ見に行つて、一時扉の前を守る者がいなくなつたことがある。但しそれは警官の自白によつて、僅か一、二分の間だつたという。その間だけはハッキリ分らないが、その外の時間に於ては、この扉は被害者総一郎が内側から錠を下ろしたままで、誰も出入しなかつたといえる。では外にこの部屋への入口はあるかというのに、人間の通れそう

なところは只の一個所もない。それは被害者総一郎が「蠅男」の忍びこんでくるのを懼おそれて、入口以外の扉も窓もすっかり釘づけにして入れなくしてしまったからだ。

ただ一つ帆村は変なものを発見していた。それは天井の方から紙を貼りつけて穴をふさいであつた。しかるに事件後には、その穴がポツカリと四角形に明いていたのであつた。紙はなにか鋭利な刃物でもって、穴の形なりに三方を切り裂かれ、一方の縁でもってダラリと天井から下っていた。これは一体何を意味するのであろうか。

その穴は一升ます櫛ぐらいの四角い穴だったから、そこから普通の人間は出入することは出来ない。小さい猿なら入れぬこともなか

つたが、よしや猿が入ってきたとしても、猿がよく被害者総一郎の頭に鋭い兇器をつきこんだり、それから二間も上にある綱を結んで体重二十貫に近い彼を吊り下げることができであろうか。これはいずれも全く出来ない相談である。猿が入ってきてても何にもならない。

どうやら、これは入口のない部屋の殺人ということになる。しかも犯人は総一郎を高さ二尺あまりの卓子にのぼって吊り下げ、床上二間のところに綱の結び目を作ったとすれば、腕が頭の上に二尺ちかく伸びたと考えたにしても、その犯人の背丈は、二間すなわち十二尺から四尺を引いてまず八尺の身長をもっていると思わなければならない。変な話であるが、勘定からはどうしてもそう

なるのである。しかもこの八尺の怪物が入口から這入^{はい}つてきたのではないとすると、まるで煙のようにこの部屋に忍びこんだということになる。

このとき、どうしても気になるのは、貼りつけてあつた紙を切りとつて、一升榭ぐらいの四角な穴を明けていったらしい犯人の思惑だつた。この穴からどうしたというのだろう。もし八尺の怪人間がいたとしたら、このような小さい穴からは、彼の腕一本が通るにしても、彼の脚は腿のところつかでつか悶もえてしまつて、とても股のところまでは通るまい。

「——これは考えれば考えるほど、容易ならぬ事件だぞ」

と、帆村探偵は心の中で非常に大きいおどろ駭おどろきおどろを持った。——密室

に煙のように出入することの出来る背丈八尺の怪物！

「蠅男」を勘定から出すと、イヤどうも何と行ってよいか分らぬ恐ろしい妖怪変化となる。果してこんな恐ろしい「蠅男」なるものが、文化華はなと咲く一千九百三十七年に住んでいるのであろうか。帆村は、彼が糸子の傍ちよりつに佇立ちよりつしていることさえ忘れて、彼のみが知る恐ろしさに唯ただ、呆然ぼうぜんとしていた。

宝塚の一銭活動写真

それから二日のちのことだった。帆村莊六はただひとりで、宝塚の新温泉附近を歩いていた。

空は珍らしくカラリと晴れあがり、そして暖くてまるで春のようであった。冬の最中とはいえ真青に常緑樹の繁った山々、それから磧かわらの白い砂、ぬくぬくとした日ざし——帆村はすっかりいい気持になって、ブラブラと橋の上を歩いていった。これが兇悪「蠅男」の跳ちやうりよう梁らやうする大阪市と程遠からぬ地続きなのであろうかと、分りきったことがたいへん不思議に思われて仕方がなかった。

新温泉の桃色に塗られた高い葺いらかが、明るく陽に照らされている。彼は子供の時分よく、書生に連れられて、この新温泉に来たもの

であつた。彼はそこの遊戯場にあつたさまざまな珍らしいカラクリや室内遊戯に、たまらない魅力を感じたものであつた。彼の父はこの温泉の経営している電鉄会社の顧問だつたので、彼は一度来て味をしめると、そののちは母にねだつて書生を伴に、毎日のように遊びに来たものである。しかし書生はカラクリや室内遊戯をあまり好まず、坊ちゃん、そんなに遊戯に夢中になつていると身体が疲れますよ、そうすると僕が叱られますから向うへ行つて休憩しましょうと、厭いやがる莊六の手をとつて座席の上に坐らせたものだ。

その座席は少女歌劇の舞台を前にした座席だつたので、自然少女歌劇を見物しながら休息しなければならなかつた。書生はここ

へ来ると俄然おとな温和しくなつて、莊六のことをあまり喧やかましく云わなかつた。その代り彼は、突然うちわ団扇のような手で拍手をしたり、舞台の少女と一緒に唱歌を歌つたり、それからまた溜息をついたりしたものである。莊六は子供心に、書生が一向休憩していないのに憤ふんがい慨して、ヨオお小用しっこが出たいだの、ヨオ蜜柑みかんを買つておくれよ、ヨオ背中がかゆいよ才などといつて書生を怒らせたものである。——いま橋の上から、十年ぶりで、新温泉の建築を見てみると、そのときの書生の心境をハッキリ見透みとおせるようで頬笑ましくなるのであつた。彼は久し振りに新温泉のなかに入つてみる楽しさを想像しながら、橋の欄干らんかんから身を起して、またブラブラ歩いていった。

とうとう彼は、入場券を買って入った。もちろん昔パスを持って通った頃の年老いた番人はいなくて、顔も見知らぬ若い車掌のような感じのする番人が切符をうけとった。

中へ入った帆村は、だいぶん様子の違った廊下や部屋割にまごつきながらも、やっと覚えのある大広間ホールに出ることができた。朝まだ早かったせいか、入場者は多くない。

帆村は遊戯室の方に上る階段の入口を探しあてた。彼はすこし胸をワクワクさせながらその狭い階段を登っていった。

おお有った有った。思いの外なんだか狭くなったような感じであるが、見廻したところ、彼の記憶に残っている世界遊覧実体鏡、一銭活動、魔法の鏡、三世界不思議鏡、電気屋敷など、すべてそ

のままであつた。

「うむ、アルプスの小屋に住んでいる貧乏サンタクロス爺さんの一家は機嫌がいいかしら」

と、帆村は数多い懐しい実体鏡のなかを、あれやこれやと探して歩いた。貧乏サンタクロスの一家というのは、アルプス小屋に住んでいる山籠りの一家のことで、小さな小屋の中にサンタクロスに似た髯を持った老人を囲んで、男女、八人の家族が思い思いに針仕事をしたり薪を割ったり、鏡の手入れをしたり、子供は木馬に乗って遊んでいるという一家団欒の写真であつて、サンタ爺さんひとり酒のコップを持ってニコニコ笑っているのであつた。

その実体鏡でみると、この狭い家の中の遠近がハッキリ見え、そして多勢の身体も実体的に凹凸おうとつがついていて、本当の人間がチヤンとそこに見えるのであった。いつまでも見ていると、本当にアルプスへ登って、この小屋の中を覗のぞきこんでいるような気がしてきて、淡い望郷病が起つてきたり、それから小屋の家族たちの眼がこつちをジロリと睨にらんでいるのが、急になんともいえなく恐ろしくなったりして、堪らなくなつて眼鏡から眼を離して周囲を見廻す。すると一瞬間のうちに、アルプスを離れて、身はわが日本の宝塚新温泉のなかなかに居ることを発見する——という淡あわい戦せ慄りんりつをたいへん愛した帆村莊六はふむらじむろくだった。彼は十何年ぶりじゅうなほねぶりで、そのアルプス小屋の一家が相変らずあひらかしそそうに暮くしているのを発見し

て嬉しかった。サンタ爺さんの手にあるコップには相変らず酒が尽きないようであつたし、彼の長男らしい眼のギョロリとした男は、一挺の猟銃をまだ磨きあげていなかった。

帆村は子供の頃の心に帰つて、それからそれへとカラクリを見て廻つた。

そのうちに彼は甚だ奇抜な一銭活動を発見した。これは「人造犬うけん」という表題であつたが、イタリヤらしい市街をしきりに猛犬が暴れまわり、市民がこれを追いかけるという写真であつた。その猛犬を追跡自動車が追うと、自動車が反かえつてガタンと街路にひっくりかえる。ピストルを打てば、弾丸が撃つた者の方へ跳ねかえってくる。袋小路へ大勢の市民が追いつめて、いよいよ捕え

るかしらと思つていると、ああら不思議、猛犬の四肢が梯子はしごのよ
うにスルスルと伸び、猛犬の背がビルディングの五階に届く。そ
して寝坊のお内儀らしい女が、窓を明ける拍子に猛犬は女を押し
たおしてそこから窓の中へ飛びこむ。最後にこの「人造犬」の発
明者が現われて犬の尻尾を棍棒でぶんなぐると、犬を動かしてい
た電気のスイッチが開き、猛犬は仰向けにゴロンと引繰りかえり、
身体のなかからゼンマイや電池や電線がポンポン飛び出す——と
いう大活劇であつた。

帆村はその活動写真がたいへん気に入つて、二度も三度も一銭
銅貨を抛なげて、同じものを繰返し見物した。この「人造犬」とい
うのは、彼が子供のときに見た記憶がなかつた。その後、新しく

輸入されて陳列されたものであろうが、実に面白い。

帆村は続いて、他の一銭活動写真の方に移っていった。

帆村が何台目かの一銭活動を覗きこんでいるときのことだった。すこし離れたところに於て、なにかガタンガタンという騒々しい音をだした者がある。折角の楽しい気分を削ぐ憎い奴だと思つて、帆村は活動函から顔をあげてその方を見た。

音を立てているのは、腕に青い遊戯室係りの巾きれを捲いた男だった。彼は活動函をしきりに解体しているのであった。その傍には、それを熱心に見守っている二人の男女があつた。

女の方は洋髪に結った年の頃二十三、四歳の丸顔の和装をした美人だった。その顔立は、たしかに何処かで最近見たような気が

するのであった。男の方は——と、帆村は眼をそつちへ移した瞬間、彼はもうすこしで声を出すところだった。それは余人ではなく、玉屋総一郎の殺人事件のあった夜、玉屋邸に於てしきりに活躍していた医師池谷与之助に外ならなかった。

池谷医師といえ、帆村が玉屋邸に赴く前に、正木署長から、邸内に現われた怪しき男として電話によつて逸早く報道された人物だった。

しかし彼の住居は、この土地宝塚であるということだったから、今この新温泉に居たとて別に不思議はない筈だった。

でも彼は、こんな室内遊戯室に、何の用があつて訪れたのだろうか。

尾行

帆村が数間先に立っていようとは、池谷医師も気がつかなかったらしい。

遊戯室係りの男は、いよいよ喧やかましい音を立てて、一銭活動の函を取外していった。そしてやがて函の中から取出したのは、この一銭活動フィルムであった。

池谷医師はそのフィルムを受取って大きく肯くと、それを手ハンケ

帛チに包んでポケットのなかに収めて、そして連れの女を促して、足早に遊戯室を出ていった。

（尾行したもののか、どうだろうか？）

と、そのとき帆村はためらた。

いつもの彼だったら、ちゆうちよ躊躇するとところなく二人の男女の後

を追ったことだろう。でもそのときは、恐ろしい惨劇事件に酷使した頭脳あたまを休めるために無理に余裕をこしらえて、この宝塚へ遊びにきていたのだった。そして折角楽しんでいたところへ、妙なことをやっている池谷医師を見たからといって、すぐさま探偵に還らなければならぬことはないだろう。それはあまり商売根性が多すぎるといふものだ。せめて今日ばかりは「蠅男」事件や探

偵業のことは忘れて暮らしたい——と一応は自分の心に云いきかせたけれど、どうも気に入らぬのは池谷医師の行動だった。一銭活動のフィルムを持って行って、どうする気であろう。そして一体彼はどのようなフィルムを外して持っていったのだろうか。

「うむ。そうだ。せめて池谷医師が外していったフィルムは何ん^どなものだったか、それを確かめるだけなら、なにも悪かないだろう」

帆村は自分の心にそんな風に言訳をして、立っていたところを離れた。

近づいてみると、係りの男は活動函を元のように締めて立ち上ったところだった。彼は函の前に廻って覗き眼鏡のすぐ傍に挿し

こんであつた白い細長い紙を外しに懸つた。それは函の中の一錢活動の題名を書いてある紙札であつた。

「おやツ。——」

帆村は、なんととはなしにギョツとした。係りの男の外した紙札には、明らかに「人造犬^{じんぞうけん}」の三文字が認められてあつたではないか。あれほど先刻帆村が面白く見物した「人造犬」の活動写真だつたのである。

係りの男は、帆村の愕きに頓着なく、そのあとへ「空中戦」と認めた紙札を挿しかえた。

帆村はもう辛抱することができなかつた。

「ねえ、おっさん。さつき入っていた『人造犬』の活動は、警察

から公開禁止の命令でも出たのかネ」

さすが 遠に帆村は、聞きたいことを上手に カムフラージュ 偽装して訊いた。

「イヤ、そやないねン。あの『人造犬』のフィルムを売ったんや」
 「へえ、売った。——この遊戯室の活動のフィルムは誰にでもすぐ売るのかネ」

「すぐは売られへん。本社へ行つて、あの人のように掛合つて来てくれんと、あかんがな」

「そうかい。——で、あの『人造犬』のフィルムは、もう外ほかに持ち合わせがないのかネ」

「うわーッ、今日はけつたいな日や。今日にかぎつて、この一銭活動のフィルムが、なんでそないに希望者が多いのやろう。——」

もう本社にも有らしまへんやろ。本社に有るのんなら、あの人も本社で買うて帰りよるがな」

係りの男はぶつきら棒な口調で、これを云った。

帆村は、あのフィルムが一本しかないと聞いて、急に池谷医師の後を追いかける気になった。訳はよく分らんが、とにかくどうも怪しい行動である。もしあれを見ているのが自分でなくて正木署長だったら、池谷医師はその場に取り押さえられたことだろう。帆村莊六は、もう骨休みも商売根性を批判することもなかった。彼は平常と変らぬ獲物を追う探偵になりきっていた。

新温泉の出口へ飛んでいった彼は、げそくばん下足番に、今これこれの二人連れが帰らなかつたかと聞いた。下足番は今ちよつと先に出

やはりましたと応えたので、帆村は急いで温泉宿の下駄を揃えさせると、表へ飛びだした。

帆村はなるべく目立たないように、新温泉の前をあつちへ行ったり、こつちへ行ったりした。そして狙う二人の男女が、新温泉の前をずっと奥の方へ歩いてゆくのを遂に発見した。彼は鼻をクスリと云わせて、旅館のどてらにふところ懐手といういでたちで、静かに追跡を始めたのだった。

二人の男女はクネクネした道をズンズン歩き続けた。帆村は巧みに二人の姿を見失わないで、後からブラリブラリとついていった。その間にも彼は、池谷医師の連れの美人が誰の顔に似ているかを思い出そうと努めた。ところが、殆んど分っているようでない

て、なかなか思い出せないのであつた。丸顔の女を、何処で見たのだろう。前に歩いていたら二人の男女の姿が、急に道の上から消えた。

「呀ッ、どこへ行つたろう」

帆村は先に見える辻までドンドン駈けだしてみたけれど、どの方角にも二人の姿はなかつた。最後のところまで行つてとうとう巧く撒かれてしまったか、残念なと思ひながら引返してくる帆村の目に、傍の大きな文化住宅の門標が映つた。瀟洒しょうしゃな建物には似合わぬ鉄門に、掲げてある小さい門標には「池谷控家」の四字が青銅の浮き彫りに刻みつけてあつた。

「うむ、ここへ這入つたんだな」帆村はホツと吐息をついた。こ

れは控家とあるからには、池谷医師の医院は別のところにあるの
だろう。これは住居らしいが、なかなか豪勢なものであった。若
い女も此処に入ったとすると、あれは池谷医師の妻君だったかな
と思つた。

こうして池谷医師の行方はつきとめたけれども、この儘で入る
と、鳥渡ちよつと具合がわるい。すこし計略を考えた上でないと、かえ
つて物事が拙ますくなると思つた帆村は、服でも着かえなおしてくる
つもりで、門前を去つて、もと来た道の方へ引きかえしていった。
半丁ほど行つたところで、彼は向うから一人の麗人が静かに歩
いてくるのに逢つた。

「おお、これは愕いた。糸子さんじゃありませんか」

その麗人は、惨劇の玉屋総一郎の遺児系子であつた。彼女は声をかけた主が帆村だと知ると、面おもやつ裏れした頬に微笑を浮べて近よつてきた。

「もう外へ出てもいいのですか。何処へお出でなんです」

「ええ、ちよつと池谷さんのところまで」

「ああ池谷さんのところへ——なるほど」といったが、彼は遽あわただしく聞き足した。「あのウ、池谷さんには細君があるんでしよ
うネ」

「ホホホホ、まだおひとりだつせ」

「十二、独り者ですか、これは変だ」帆村は笑いもしない。

「あなた貴女、池谷さんに来いと呼ばれたんですか」

「はあ、午前中に来いいうて、電話が懸ってきましてん。そしてナ、誰にもうちへ来る云わんと来い、そやないと後で取返しのかんことが出来ても知らへんと……」

「うむうむうむ」

帆村は何を思つたものか、無闇むやみに呻うなり声をあげると、糸子の袖を引張つて道の脇の林の中に連れこんだ。

怪しき眼

麗人糸子は、わるびれた様子もなく、「池谷控家」と門標のう
つてある文化住宅のなかへズンズンと入っていった。しかし僅か
ここ数日のうちに、痛々しいほど窶やつれの見える糸子だった。

糸子の父は、蠅男から送られた脅迫状のとおり正確に殺害さ
れた。それはあまりにも酷い惨劇であった。お祭りさわぎのよう
に多数の警官隊にとりまかれながら、奇怪にも邸内の密室のなか
に非業ひごうの最期をとげた糸子の父、玉屋総一郎。彼女にはもう父も
なく、母とはずっと昔に死に別れ、今は全く天涯の孤児とはなっ
てしまった。麗人の後姿に見える深窶ふかやつれに、だれか涙を催さな
い者があるうか。

それにしても、憎んでも飽き足りないのは彼の蠅男！ 蠅男こ

そ稀代の殺人魔である。

しかし正体の知れない蠅男であつた。帆村探偵の出した答によると、蠅男は密室のなかに煙のように出入する通力をもち、そして背丈はおよそ八尺もある非常に力の強い人物である。だがそんな化物みたいな人間が実際世の中に住んでいるとは誰が信じようか。しかも帆村は出鱈目をいつているのではない。彼は犯跡から精くわしく正しく調べあげて間違いのない答を出したのだ。ああ稀代の奇怪！ 蠅男とは、昔の絵草紙に出てくる大入道か？

蠅男の正体をどうしても突き止めねば、再び東京へかえらないと心に誓つた青年探偵帆村莊六は、身はいま歡樂境宝塚新温泉地にあることさえ全く忘れ、全身の神経を両眼にあつめて疎林の木

立の間から、池谷控家に近づきゆく糸子の後姿をジツと見まもっているのだった。さきほどの話合いで、糸子と帆村との間にはなにか、或る種の了解ができているらしいことは、糸子の健気けなげな足どりによつてもそれと知られる。

池谷医師から（きよようの午前中に、誰にも知らさず訪ねてこい、さもないと取りかえしのつかないことが起る）と電話された糸子だったが、その用事とは一体なにごとであらうか。

また池谷と連れだつて、この控家のなかに入った若い丸顔の女性については、糸子は心あたりがないといったが、果して彼女は何者であらうか。

その怪しき女と池谷とが、宝塚の温泉のなかから一銭活動の

「人造犬」というフィルムを買って持ちだしているんだが、それは何の目的あつてのことだろうか？

こんな風に考えてくると、帆村はこれから糸子を中心にして、向うに見える池谷控家のなかに起ろうとする事件が、これまでの数々の疑問にきつとハッキリした答を与えてくれるにちがいないことを思うと、旅館のどてらの下に全身が武者ぶるいをもよお催してゐるのだった。――

さて糸子は帆村に注意されたとおり、一度とて後をふりむいたりなどせず、ひたすら彼女単身で訪ねたふりを装った。

彼女は池谷控家の玄関に立った。

玄関の扉が半開きになっていた。そこで呼び鈴のぼたん釦を軽くおし

た上、なかに入つていった。それは勝手知つたる主治医の家であつたから。

糸子の姿が扉のうちに消えてしまうと、帆村はさらに全身に緊張が加わるのを覺えた。彼は眼ばたきもせず、木立の間から控家の様子を熱心に窺つた。一分、二分……。何の変りもない。

「まだ大丈夫らしい。挨拶かなんかやつているところだろう」

暫くすると、二階の窓にかかつている水色のカーテンがすこし揺らいだのを、びんしょう敏捷な帆村は咄嗟とつさに見のがさなかつた。

「……二階へ上つたんだ」

そのときカーテンの端が、ほんのすこし捲まくれた。そしてその蔭から、何者とも知れぬ二つの眼が現われて、ジツとこつちを眺

めているのだった。

「誰？ 糸子さんだろうか。ハテすこし変だぞ」

と思つたその瞬間だった。二つの怪しい眼は、突然カーテンの蔭に引込んだ。まあよかつた——と思う折しも、いきなりガチャーンと凄まじい音響がして、その窓の硝子が壊れてガチャガチャガチャンと硝子の破片が軒を滑りおちるのを聞いた。

帆村がハツと息をのむと、それと同時にカーテンの中央あたりがパツと跳ねかえつて、そこから真青な女の顔が出た。

「あッ、糸子さんだッ。——」

思わず帆村の叫んだ声。いよいよ糸子の危難である。それは更に明瞭めいりょうとなつた。なぜならカーテンの間から、黒い二本の腕

がニューツと出て一方の手は糸子の口をおさえ、他方の手は糸子の背後から抱きしめると、強制的に彼女の身体をカーテンのうちに引張りこんだから。

「な、何者！」

カーテンは大きく揺れながら、糸子と黒い腕の人物を内側にのんでしまった。

帆村は心を決めた。すぐさま邸内に踏みこもうとしたが、帆村は彼の服装がそういう襲撃に適しないのを考えてチエツと舌打ちした。屍体を焼く悪臭の奇人館に踏みこんだときも、彼は宿屋のどてら姿だった。いままた糸子の危難を救うために、謎の家に進しようとして気がついてみれば、これもまたホテルで借りたど

てら姿なんである。これでは身を守るものも、扉ドアの鍵を外す合鍵もなんにもない。頼むは二本の腕と、そして頭脳あたまの力があるばかりだった。思えば何と祟たたるどてらなんだろう。もうこれからは、寝る間だつてキチンと背広を着ていなきや駄目だ。

帆村は咄嗟とつさになにか得物えものはないかとあたりを見廻した。

そのとき彼の目にうつつたのは、叢くさむらの上に落ちていた一本の鉄の棒——というより何か大きな機械の金具が外れて落ちていたといった風な、端の方にゴテゴテ細工のしてある鉄の棒だった。それを無意識に拾いあげると右手にぐつと握りしめ、林の中からとびだした。そして正面に見える池谷控家へむかつて、驀まっしぐら地にか

けだした。

麗人れいじんの行方

目もくしやう捷とくに麗人糸子の危難を見ては、作戦もなにもあつたものではない。最短距離をとおつて、ドンと敵の胸もとに突撃する手しかない。

下駄ばきで、カラカラと石段を玄関に駆けあがるのもおそしとばかり、帆村は正面の扉をドーンと押して板の間に躍りあがつた。
(階段はどこだ！)

廊下づたいに内に入ると、目についた一つの階段。彼は糸子の名を連呼しながら、トトトツとそれを駈けのぼった。

だが糸子の声がしない。すこし心配である。

「糸子さアん！」

二階には間が三つ四つあった。帆村はまず表から見えていた十畳敷ほどの広間にとびこんだ。

「居ない！」

糸子の姿は見えない。水色のカーテンが静かに垂れ下っているばかりだ。

押入の中か？ 彼はその前へとんでいって襖をポンポンと開いてみた。中には夜具やぐや道具が入っているばかりで糸子の着物の端

ひとつ見えない。

さて困った。糸子はどこへ行ったのだろう。次の部屋だ。――

そのとき帆村の脳裏に、キラリと閃いたひらめ或る光景があった。そ

れは糸子が宙に吊りあげられているという、見るも無慚な姿だった。彼女の白い頸には、一本の綱が深く喰いこんでいるのである。

……

(ああ厭だツ)

帆村は両手で目の前にある幻をはらいのけるようにした。それは彼にとって不思議な経験だった。これまで彼は数多あまたの残酷な場面の中に突進した。しかし一度だって、恐ろしさのために躊躇をしたり厭な気持になったことはない。それは職業だと思ふからし

て起る冷静さが、そういう感情の発露はつろをぎゅツとおさえたのである。しかしいま糸子の場合においては、それがどういふものか抑えきれなかったのは不思議というほかない。糸子がそんな残虐な姿になるには、あまりに可憐だったからであらうか。それとも帆村が彼女の危難を知りながらも、この邸内に送りこんだ責任からだらうか。とにかく帆村にとつては、糸子の苦しんでいる姿を見ることがさえ辛く感ずるのだった。彼は急に気が弱くなったようである。それはなぜであらうか。

「糸子さアん、どこにいますかッ」

帆村は怒号しながら、次の部屋の襖をパツと開いた。ああそこにも糸子の姿は見えなかった。そこは八畳ほどの和室だった。押

入の襖ふすまが一枚だけ開いて、箆筒たんすの引出が一つ開いて男の着物がひっぱりだされている。

それだけのことだった。糸子の姿はやっぱり見あたらない。

日頃冷静を誇る帆村もすこし焦じれてきた。

彼はその部屋を出て、北側にある洋間の扉を開いて躍りこんだ。しかしそこにも卓子や肘掛椅子が静かに並んでいてだけで、別に糸子が隠れているような場所も見当らなかつた。

しかしこの部屋に入ると共に、帆村の鼻を強くうった臭気があった。

「変な臭いだ。何の臭いだろう」

スーツとする樟しょうのう脳のうくさい匂いと、それになんとか胸のわる

くなるような別の臭いのが交っていた。

彼は気がついて筒型の火鉢のそばへ駆けよった。

「あッ熱ッ」火鉢のふちは何うしたわけか焼けつくように熱かった。帆村はそれに手を懸けたため、思わない熱さに悲鳴をあげた。火鉢のなかには、赭茶けた灰の一塊があつた。これは何だろう。その灰の下を掘ってみたが、そこには火種一つなかった。悪臭が帆村の鼻をついた。

「ああそうか。あのフィルムをこの火鉢の中で焼いたんだ。『人造犬』のフィルムを買って来て、この火鉢のなかで焼いたというわけか」

帆村は悪臭にたえられなくなつて、窓に近づいてそこを開いた。

冷い風がスーツと入ってきた。なぜフィルムを焼いたりしたんだろうか。そのとき彼は何気なく外を見た。そこはこの控家の裏口だった。垣根の向うに、どこから持ってきたのか一台の自動車がジツと停っていた。運転台も見えるが、人の姿はなかった。

「糸子さんは一体どこへ行ったのだろうか。たしかこの二階に上っていたんだが」

帆村は滅入ろうとする自分の心になおも鞭うって、廊下に出た。どこか秘密室でもあって、そのなかに隠されているのではなからうかと思つて探したけれど、この二階に関する限りでは別に秘密室も見当らないようであつた。

そのときだった。家の外でゴトゴトジンジンと音が聞こえてき

た。それは自動車のエンジンが懸つたのに違いない。自動車！
帆村はハツと気がついた。そうだ、家の裏口に自動車が停つてい
るのを見たつけ。

「うん、失敗しまつたツ」

帆村の叫んだときはもう遅かった。北側の窓のところを駈けつ
けてみると、目の下に自動車は静かに動きだしたところだった。

裏口の木戸が開かれています。誰かその木戸から出て行って自動車
にのつたに違いない。そして帆村は見た。その幌ほろ型の自動車がたの
運転台に、黒い服を身にまとつた人物が腰をかけていたのを。

その人物こそ、さつき二階で、糸子をカーテンのなかに引ずり
こんだ怪人に相違なかつた。彼はいま自動車にソツとうちのり、

何方へか逃げようとしているのだ。黒い服の人物は何者？ 不幸にして帆村は、彼の後姿を肩のあたりにだけ認めただけで、怪人物の顔を見ることはできなかつた。

しかし彼こそ、恐るべき脅迫状の送り主「蠅男」なのではあるまいか。いや、それともこの家の主人である池谷医師でもあつたらうか。いずれにしても帆村は、その自動車に乗つた人物を逃がしてはならないと思つた。

糸子のことでも気がかりであつたけれど、怪人物の行方はさらに重大事であつた。それにまた、怪人物は自由を失つた糸子をその自動車に無理やりに積みこんで、共に逃げていくところだつたかも知れないのである。ここはどうしても怪人の跡を追うのが正道

であった。帆村は階段を転げ落ちるようにして、足袋はだしのまま裏口から、自動車の後を追いかけた。

山中の追跡

幸いにも、池谷控家の裏通りは道が狭かったから、自動車はスピードをあげることができないで、タイヤが溝みぞのなかに落ちるのを気にしながらノロノロと動いていた。帆村はそれと見るより、百メートルほど後方から猛烈にダッシュしていった。それが分つ

たものか、自動車はスピードをすこし早めた。自動車は生垣にゴトンゴトンとつきあたつて、今にも幌が裂けそうに見えた。それにも構わず、無理なスピードを懸けていった。

帆村は懸命にヘビーをかけた。もうすこしで自動車のうしろに飛びつける。——と思つた刹那、せつな自動車はガタンと車体をゆすつて頭を右にふつた。広い舗道へ出たのだ。

「うぬ、待てエ」

帆村は激しい息切れの下から、ふりしぼるような声で叫んだ。しかしそれは既に遅かつた。自動車はわずかのちがいで、舗道に乗つた。そして帆村を嘲笑するかのように悠々とスピードをあげて走つていく。

帆村は文字どおり切齒扼腕せつしやくわんした。もうこうなつては、残念ながら人間の足では競争が出来ない。

何か自動車を追跡できるような乗り物はないか。

そのとき不図ふと前方を見ると、路地のところから鼻を出しているのは紛れもなくオートバイだった。これはうまいものがある。帆村は躍りあがつてそこへ飛んでいった。

それはオートバイと思いの外ほか、自動三輪車であつた。それは大阪方面の或る味噌屋みそやの配達用三輪車であつて、車の上には小さな樽がまだ四つ五つものついていた。そして丁度そのとき店員が傍の邸の勝手口から届け票を手にしなから往来へでてきたので、帆村は早速その店員のところへ駆けよつた。

そこで口早に、車を貸してもらいたいという交渉が始まった。店員は目をパチクリしているばかりだった。なにしろ犯人追跡をやるんだから、ぜひ貸してくれといったが、店員は主人に叱られるからといって承知しなかった。そのうちにも時刻はドンドン経っていく。千載の一遇をここで逃がすことは、とても帆村の耐えられるところではなかった。

(問答は無益だ！)

帆村は咄嗟とっさに決心をした。隙すきだらけの店員の顎あごを狙って下からドーンとアツパーカットを喰わせた。店員は呀あツともいわず、地上に尻餅をつくなり長々とのびてしまった。

「済まん済まん。あとから僕を思う存分殴らせるから、悪く思わ

んで……」

と、心の中で云いすてて、帆村は車の上にまたがった。そしてエンジンを懸けて走りだそうとしたが、彼はこのときなにを思ったものか、また地上に下りて、伸びている店員先生を抱き起した。活を入れると、店員先生はすぐにウーンと呻りながら気がついた。それを見るより、帆村は店員先生を背後から抱えて、車の後部に積んだ味噌樽の上に載せた。

このとき店員先生はやっと、この場の事情を知った。

「こら、何をするんや、泥棒！」

拳骨を喰うわ、車は取られるわ、この上車の上に載せられようとする。彼は憤慨の色を浮べるより早く、帆村に喰ってかかるた

めに樽の上に立ち上ろうとした。

帆村は早くもこれに気づいた。

「まあ落つけ」

彼は一言そう云つてヒラリと車にまたが跨ると、素早くクラッチを踏んだ。自動三輪車は大きく揺れると、弾かれたように路地から走りだした。

「ああッ、あぶないあぶない」

店員先生は樽の上に立ちあがろうとしたが、たちまち車が走りだしたもので、車からふり落とされそうになった。それでまた屁ツぴり腰をして樽の上にかが蹲み、そして車からふり落とされないために顔を真赤にして一生懸命荷物台にしが獅噛みついた。

「こら、無茶するな、泥棒泥棒」

「そうだそうだ。もつと大きな声で吠鳴るんだ」

「ええッ」と店員先生は怪訝な顔をしたが、「おお皆来てくれ、泥……」

といいかけて首をかしげた。

「こら妙なこつちや。この泥棒野郎が車を盗みよつて、乗り逃げしてるのや。しかしその車の上にはチャンと俺が載っているのや。すると俺は車を盗まれたことになるやろか、それとも盗まれてえへんことになるやろか、一体どつちが本当^{ほんま}やろか、さあ訳がわからへんわ」

ゴトゴトする樽の上に店員先生が車を盗まれたのかどうかとい

うことを一生懸命考えている間に、帆村は眼を皿のようにして前方に怪人の乗った自動車をもとめて自動三輪車を運転していった。怪人の自動車は、道を左折して橋を渡ったものらしい。

温泉場の間を縫って狂奔していく三輪車に、湯治の客たちは胆をつぶして道の左右にとびのいた。

帆村は 驀まつしぐら地に橋の上をかけぬけた。それから山道に懸ったが、やっと前方に怪人の乗った自動車の姿をチラと認めた。

「うむ、向うの方へ逃げていくな」

道が悪くて、軽い車体はゴム毯まりのように弾はずんだ。そのたびごとに、樽の上に御座る店員先生は悲鳴をあげた。

「モシ、樽の上のあんちゃん。この道はどこへ続いているんだね」

暴風雨あらしのような空気の流れをついて、帆村が叫んだ。

「この道なら、有馬へ出ますわ。お店と反対の方角やがナ」

店員先生が、半泣きの声で答えた。

「うむ、有馬温泉へ出るのか。——あと何里ぐらいあるかネ」

「そうやなア。二里半ぐらいはありまっせ」

「二里半。よオし、なんとしても追いついてやるんだ」

帆村の姿と来たら、実にもう珍無類ちんむるいだった。これはあまりにも勇ましすぎた。若い婦人に見せると、気絶をしてしまうかも知れない。なにしろ、正面からの激しい風を喰くつて、どてらの胸ははだけて臍へそまで見えそうである。その代り背中くのところくで、どてらはアドバルーンのように丸く膨ふくらんでいた。ペタルの上を踏ま

えた二本の脚は、まるで駿馬しゅんめのそれのように逞たくましかったが、生あ憎いにくとズボンを履いていない。帆村は怪人の自動車を追いかけるひまひまに、どてらの禍かをくりかえしくりかえし後悔していた。

現われた蠅男

帆村探偵の必死の追跡ぶりが、店員先生の鈍い心にも感じたのであるうか、それとも先生の乗った味噌樽があまりにガタガタ揺れるので樽酔いがしたのであるうか、とにかく店員先生は三輪車

のうしろに獅^し噛^がみついたまま、もう泥棒などとは喚^{わめ}かなかつた。

「おう、樽の上のあんちゃんよオ」

帆村はまた声を張りあげて叫んだ。

「なんや、俺のことか」

「君、何か書くものを持っているだろう」

「持ってえへんがな」

「嘘をつくな、手帳かなんか持っているだろう。それを破いて、二十枚ぐらいの紙切をこしらえるんだ」

帆村はハアハアと息をきった。自動車との距離はまだ五百メートルぐらいある。

「その紙片をどないするねン」

「ううん。——その紙片にネ、字を書いてくれ。なるべくペンが
いい」

「誰が字を書くねん」

「あんちゃんが書いておくれよ」

「あほらしい。こんなガタガタ車の上で、書けるかちゅんや」

「なんでもいい。是非ぜひ書いてくれ。そして書いたやつはドンドン
道傍に捨ててくれ。誰か拾ってくれるだろう」

「書けとிட்டって無理や。片手離すと、車の上から落ちてしま
うがな」

「ちえツ、もう問答はしない。書けとிட்டたら書かんか。書かな
きゃ、この車ごと、崖の上から飛び下りるぞ。生命が惜しくない

か。僕はもう気が変になりそうなんだ。ああア、わわア」

これが店員先生にすこぶ頗る利いた。

「うわツ、気が変になったらあかへんが。書くがな書くがな。書きます書きます、字でも絵でも何でも書きます。ええもしどてらの先生、気をしつかり持つとくれやすや。気が変になったらあきまへんでえ」

帆村は向うを向いて苦笑いをした。

「君の名は何という」

「丸徳商店の長吉だす」

「では長どん。いいかね、こう書いてくれたまえ。——蠅男ラシ

キ人物ガ三五六六五号ノ自動車デ宝塚ヨリ有馬方面ヘ逃ゲル。警

察手配タノム、午後二時探偵帆村」

「なんや、ハエオトコで、どう書くんや」

「ハエは夏になると出る蚊や蠅の蠅だ。オトコは男女の男だ。片仮名で書いた方が書きやすい」

「うへーッ、蠅男！　するとこれはあの新聞に出ている殺人魔の蠅男のことですか」

「そうだ。その蠅男らしいのが、向うに行く自動車のなかに乗っているんだ」

「うへッ。そんなら今あんたと私とで、蠅男を追いかけよるのだから。うわーッ、えらいこつちや。蠅男に殺されてしまふがな。字やかて書けまへん。お断りや」

「また断るのかネ。じゃ、崖から車ごと飛び下りてもいいんだネ」
「うわーッ、それも一寸待った。こら弱つてしもたなア。どつちへ行つても生命がないわ。こんなんやつたら、あの子の匂いを嗅ぎたいばかりにフルーツポンチ一杯で利太郎から宝塚まわりを譲つてもらはんやなかつた。天王寺の占師が、お前は近いうち女の子で失敗するとうとうとつたがこら正しくほんまやナ」

「さあ長どん。ぐずぐず云わんで早く書いた。向うに人家が見える。紙片を落とすのに都合がいいところだ。——さあ、ペンを持つてハエオトコとやった。——」

「うわーッ、か、書きます。踊っている樽の上でもかまへん。書くというたら書きますがな。しかし飛び下りたらあかんでえ」

たいへんな手間取りようであったが、遂に帆村の命令が店員長吉によつて行われた。長吉は樽の上に腹匍はらばいになつて、書きにく
い字を書いた。そして一枚書けると、それを手帳からひきちぎつ
て外に撒いた。始めは容易に肯がえんじないでも、一旦承知したとな
ると全力をあげて誠実をつくすのが長吉のいい性格だった。彼は
この困難な仕事を一心不乱にやりつづけた。

自動車はすっかり山の中へ入ってしまった。怪人の乗った自動
車との距離はだんだんと近づいて、あと二百メートルになった。
この調子では間もなく追いつくことができるだろう。帆村は歯ぎ
しり噛んで、ハンドルをしっかりと取り続けた。彼の全身は風に
当つて氷のように冷えてきた。ガソリンの尽きないことが唯一の

願いだつた。

上り道が左の方に曲つている。

まず怪人の乗つた自動車が左折して、山の端から姿を消しさつた。続いて帆村と長吉との乗つた自動三輪車がポクポクとあえぎながら坂道をのぼつていった。そして同じく山の端はしをぐつと左折した。このとき帆村は、前方にこんどは下りゆく自動車が急に道から外れそうになつて走るのを見た。

「呀あッ、危いッ」

と、声をかけたが、これはもう遅かつた。怪人の乗つた自動車は、どうしたわけか次第に右に傾いて二、三度揺ぐと見る間に、車体が右に一廻転した。下は百メートルほどの山峡だつた。何条

もつてたまるべき、横転した自動車は弾みはずをくらつて、毬のようにポンポン弾みながら、土煙と共に転げ落ちていった。そして遂に下まで届くと、くしやと潰れてしまった。帆村は辛うじて制動をかけて、三輪車を道の真中に停めた。

「うわーッ、えらいこつちや」

「うむ、天命だな。あんなに転げ落ちてはもう生命はあるまい」

帆村と長吉とは、車から下りて呆然と崖の底をジツと見下ろした。土煙がだんだん静まつて、無慚むざんにも破壊した車体が見えてきた。車体は裏返しになり、四つの車輪が宙に藻もがいているように見えた。

暫くジツと見つめていたが、車のなかからは誰も這いだしてこ

なかつた。

「さあ、すぐ下りていつてみよう。自動車のなかには、誰が入っているか、そいつを早く調べなきやならない。長どん、一つ力を貸してくれたまえ」

「大丈夫だすやろか。近づくなり蠅男が飛びだして来やしまへんか」

「いいや大丈夫だろう。死んでいるか、または気絶しているかどうかだよ。しかし何か得物をもってゆくに越したことはないだろう」

気がついてみると帆村は腰に一本の鉄の棒を差していた。これは先刻、池谷控家の前の林の中で拾った護身用の鉄棒だった。帯

に挿んで背中にまわしてあつたので、うまく落ちないで持つてこられたのだつた。長吉は仕方なく腰から手拭いを取つて、その端に手頃の石をしつかり包んだ。もし蠅男がでたら、端をもつてこの包んだ石をふりまわすつもりだつた。

二人は、背の丈ほどもある深い雑草のなかを掻きわけるようにして、山峽を下りていった。

十分ほど懸つて、二人は遂に谷の底についた。幌は裂け鉄板は凹み、車体は見るも無慚な壊れ方であつた。

帆村は勇敢にも、ぐるつと後部の方に廻つてから自動車の方に匍つていった。長吉は固唾を嚙んで、帆村の態度を注視していた。

帆村は飛びつくようにして遂に車体にピッタリとくつついた。

彼の首が次第次第に上ってきて、やがて幌の破れ目から車内を覗きこんだ。

そのときである。帆村が胆をつぶすような大きな声で叫んだのは……。

「これは変だ。自動車は空っぽだ。中には誰も乗っていないぞッ」

おどろ

愕くべきニュース

折角せっかく幌自動車に追いついて、はては崖下まで探しに行ったの

に、このなかにはから紅くれないの血潮に染まった怪人の屍体があるかと思いの外、誰も居ない空っぽであった。

帆村は真赤になって地団駄じだんだをふんで口惜しがったが、それとも一方では安心もした。彼はこの車の中にひよつとすると糸子が入っているかも知れないと思っていたのだ。或いは無慚むざんな糸子の傷ついた姿を見ることかと思われていたが、それはまず見ないで助かったというものだ。

「帆村はん。この自動車を運転していた蠅男はどうしましたんやろ」

「さあ、たしかに乗っていないきやならないんだがなア、ハテナ：
…」

帆村が小首をかしげたとき、二人は警笛の響きを頭の上はるかのところに聞いてハツと硬直した。

「あれは——」と、崖の上を仰いだ二人の眼に、思いがけない実に愕くべきものが映った。

さつき二人が乗り捨ててきた自動三輪車オートのそばに、一人の怪人が立っていて、こつちをジツと見下ろしているのであった。彼は丈の長い真黒な吊鐘つりがねマントでもって、肩から下をスポリと包んでいた。そしてその上には彼の首があつたが、象の鼻のような蛇だ管かんと、大きな二つの目玉がついた防毒マスクを被っていた。だから本当の顔はハッキリ分らなかつた。ただ丸い硝子ガラスの目玉越しにギラギラよく動く眼があつたばかりであつた。

「呀あッ、あれは誰だす」

「うむ、今はじめて見たんだが、あれこそ蠅男に違いない」

「ええッ、蠅男！ あれがそうですか」

「残念ながら一杯うまく嵌はめられた。自動車があこの山の端を曲つたところで、蠅男はヒラリと飛び下りて叢くさむらに身をひそめたんだ。

あとは下り坂の道だ。自動車はゴロゴロとひとり下つていったのだ。ああそこへ考えがつかなかった。とにかく一本参った。しかし蠅男の姿をこんなにアリアリと見たのは、近頃で一番の大手柄だ」

帆村は下から、傲ごうぜん然と崖の上に腕をくんで立つ蠅男を睨にらみつけた。

「呀ッ、帆村はん。あいつは味噌樽みそだるを下ろしていまっせ」

「うん、蠅男はあの三輪車に乗って逃げるつもりなんだ。僕たちが崖へ匍はいのぼるまでには、すくなくとも三、四十分は懸ることをチャンと勘定にいれているんだ。その上、うまく崖の上に匍はいあがっても、僕たちに乗り物のないことを知っているんだ。まるで、ジゴマのように奸智かんちにたけた奴……」

と、そこまで云った帆村は、急に言葉を切った。そして長吉の身体をドーンと突くなり、

「おう、危い。自動車のうしろに隠れろッ」と早口で命令した。

その言葉が終るか終らないうちに、ブーンと風を切って落ちて

きたのは三貫目の味噌樽だった。二人がもうすこし気がつかないで立っていたとしたら、彼等のどつちかがその恐ろしい勢いで落ちてきた味噌樽のために、頭蓋骨を粉碎されなければならなかったろう。

味噌樽は、なおも上からピューンと呻りうなを生じて落ちてきた。その勢いの猛烈なことといったら、地面に落ちて、地雷火のように泥をはねとばし、壊れ自動車に当っては、鉄板をひきちぎって宙に跳ねあげるといふ凄い勢いであった。なんという強力なんだろう。見かけは普通の人とあんまり違わぬ背丈でありながら、まるで仁王さまが砲弾なげをするような激しい力を持っているのだ。そのとき何処からともなく、飛行機のプロペラらしい音響

が聞えてきた。

すると、蠅男は可笑しいほど俄にわかに周章あわてだした。最後の樽をなげつけてしまった彼は、ひらりと自動三輪車の上にとびのると、エンジンをかけた。そして鮮やかなハンドルの切り方でもって、ドンドン走りだした。

長吉は憤慨のあまり、下から石をぶつつけたが、どうしてそんなものが崖の上まで届くものではない。遂に蠅男は口惜しがる帆村と長吉とを谿たにぞこ底へ置いて山かげに姿を消してしまった。聞えていた飛行機のプロペラの音も、そのうちに何処ともなく聞えなくなつた。

帆村と長吉とは、生命びろいをしたことに気がついた。そこで

勇気をつけて、一旦下りた崖を、またエツチラオツチラと上っていった。十分で下りたところが、三十五分も懸つてやつと崖の上に匍いのぼれた。

二人は夕方の山道をトコトコと歩いていった。三十分ほどして、やつと一台のハイヤーが通りかかった。二人の老人の客が乗つていたけれど、無理に頼んでそれに乗せて貰い、蠅男の逃げていた有馬温泉の方角へ進撃していった。

有馬では、警察からまだ何の手配も出ていなかった。手配の電話が懸つて来たのは、帆村が大阪への電話を申込んだその後からだった。手配の紙片が、それでも誰かに拾われたことか判った。しかしこうなつてはすべてあとの祭りだった。なにしろ手配の自

動車は山峡に落ちているのだから。

リンリンリンと電話が懸つてきた。駐在所の警官が出た。

「ああ村松検事どのでございますか。はア帆村さんはいらつしやいます」

帆村は疲れを忘れて、電話口へ飛びついた。彼は村松検事に、今日の顛末てんまつを手短かにのべて、盗まれた三輪車と蠅男の手配をよく頼んだ。そして電話が切れるとグツタリとして、駐在所の奥の間に匍いこむなり、疲れのあまり死んだようになって睡った。樽の上で踊った長吉もお招伴しょうばんをして、帆村の側らにグウグウいびきをかけた。それから何時間経ったか分らないが、帆村は突然揺り起された。

「また村松検事どのから、お電話だつせ」

帆村は痛む手足のふしぶしを抑えながら、電話口に出た。そのとき彼は、^{おどろ}愕きのあまり目の覚めるような知らせを、村松検事から受けとつた。

「ええッ、本当ですか。今日の夕刻、鴨下ドクトルが奇人館にひよつくり帰つてきたんですつて？ ほほう、貴方はもうドクトルが永久に帰つてこないと仰有つていましたのにねエ。ほほう、そうですね。いやそれは僕も愕きましたよ、ほほう」

蠅男の正体？

鴨下^{かもした}ドクトルが八日目にひよつくり、奇人館に帰ってきたという知らせである。

帆村の愕^{おどろ}きもさることながら冷静をもつて聞えるあの村松検事でさえ、その愕きを電話口に隠そうとさえしなかつたほどだ。検事は、鴨下ドクトルが再び館にかえつて来ないと断言したくらいだから、ドクトル帰邸の知らせは全く寝耳に水の愕きだったのだらう。鴨下ドクトルは何処に行っていたのだらうか。

娘を東京から呼んでおきながら約束を破つてドクトルが旅行に出たのは何故だらう。

それからまた、ドクトルの留守中に、突然何者とも知れぬ男の屍体が焼かれ、機関銃手がとびだしたりしたことに果してドクトルは無関係だったのだろうか。

蠅男の脅迫状は、なぜドクトル邸の暖炉の上に置かれてあったのだろうか。

そういう疑問のかずかずが、鴨下ドクトルの口から聞きただされる時機が来たのだ。ドクトルの答によつて蠅男の正体はいよいよ明らかになるであろう。帆村探偵は大阪へ帰つて、検事たちから聞くことができるであろうドクトルの告白に、非常な期待をおぼえたのであつた。

「だが、蠅男を見たのは、恐らく捜査側では自分だけだろう」

帆村は、そのことについて些いささか得意であつた。それは実に大きな土産話である。

蠅男というやつは、実に力の強い奴で、三貫目の味噌樽を、あたかも野球のボールを叩きつけるように楽々と抛なげた。そして自動車も操縦できれば三輪車にも乗れるというモダン人だ。

しかしよく考えてみると、蠅男について分つてゐるのはそれだけであつた。どんな身体つきをしているのか、それは黒い吊鐘マントの下に蔽おほわれていてハッキリ分らない。それからまたどんな容貌ようめいをしているのか、それは防毒面ぼうどくめんみたいなものを被おほつてゐるので、これもハッキリ分らない。ただ気味のわるい二つの眼がギロギロと動くのを見たばかりである。

いや、もつと分らないところがある。帆村はさきに玉屋総一郎の殺された密室を調べた挙句、蠅男について次のような推理をたてた。つまり、

「蠅男の背丈は八尺である。そして蠅男は一升ます榊ぐらいの四角な穴を自由に出入する人間である」

というのであるが、崖上に見たあの蠅男は、五尺四、五寸しかない普通の人間の背丈に見えた。況いわんや一升榊の間を抜けるような細い身体のようには見えなかった。すると、あれは蠅男でなかったのであろうか。いや、あの崖上の怪人物が蠅男でなくて、誰が蠅男であろうか。すると身長八尺で一升榊ぐらいの穴もくぐれる人物という帆村の推理が合わないことになる。

「これは、どうも自分の推理が間違っていたのかナ、違うはずはないんだが」

帆村探偵の自信は俄にわかにグラつきだした。彼は遂に、眼から入ってきた蠅男の姿に、幻げんわく惑わくされてしまったのである。深い常識のために、推理の力を鈍らせてしまったのである。これは後になつて、ハッキリと分つた話であるが、蠅男に対する彼の推理は決して間違つていなかつたのだ。帆村はもつと考えるべきだつた。ここで玉屋総一郎の屍体の頸部けいぶに附いていた奇妙なる金具のギザギザ溝こうの痕をなぜ思い出さなかつたのだろう。玉屋総一郎の頸部に打ちこんだ鋭い兇器がどんなものであつて、どこの方角からどうして飛んできたものかを、何故考えなかつたのだろう。それか

らまた池谷医師たちが宝塚新温泉の娯楽室から持ちだした一銭活
動のフィルム「人造犬」のことをなぜ連想しなかったんだろう。
いや、まだある。現に彼は今、有馬温泉の駐在所に寝ころがって
いるが、その枕許に置いてある奇妙な形をした一本の鋼鉄棒があ
る。彼はそれを池谷邸に近い林の中で護身用として拾ったのであ
る。彼がその棒について、もつと深い興味をもっていたとすれば、
それだけでも蠅男の正体を掴む余程の近道とはなったであろうに、
流石さすがの帆村探偵も早くいえば蠅男をそれほどの怪人物だとは思っ
ていなかったせいであろう。

なにもそれは帆村探偵だけのことではない。世間では誰一人と
して、蠅男が過去にも未来にも絶するそのような奇々怪々なる人

間だとは、気がついていなかったのだ。蠅男こそは有史以来二人とない怪人だったのである。さて、いかなる怪人であつたらうか。それを知るのは、極くごく小数の人々だけだつた。しかも彼等は蠅男の正体を語るを好まないか、またはそれを語ることができない事情の下にあつた。

だから目下のところ読者諸君はやむなく、村松検事以下の檢察当局の活動と、青年探偵帆村莊六の鬪志とに待つよりほかに蠅男の正体を知る手がないのである。

鬼か人か、神か獣か？

蠅男の正体が、白日下に曝さらされるのは何時の日であろうか。

意外なる邂逅

有馬温泉の駐在所における何時間かの前後不覚の睡眠に帆村もすこしく元気を回復したようであった。

彼はそれから先の行動を、あれやこれやと考えた挙句、遂に決心して一台の自動車を呼んで貰った。

やがて遠くからクラクションの響きが伝わってきたと思つたら、頼んであつた自動車が家の前に来て停つた様子、帆村は味噌問屋の小僧さん長吉ちようきちを促して、警官たちに暇をつげるなり車上の

人となった。

温泉町は、もうすっかり夜の闇に沈んでいた。硫黄の強い匂いをのせた風が、スーッと流れて来た。帆村は急に、温い湯につか
つて疲労を直したい衝動に駆られた。

しかし彼は、すぐそのような衝動をなげすてていた。これから
蠅男との戦闘が始まるのである。玉屋総一郎の忘れ形身の糸子は
どこにどうしているのだろう。彼女は果して安全に身を護ってい
るのだろうか。池谷邸に入ったまま、姿を消して杳ようとして行方が
知れなくなつたこの麗人の身の上を、帆村はすくなくならず憂慮し
ているのだつた。池谷邸の二階の窓に、糸子を背後から襲つた怪
人こそは、あれはたしかに蠅男に違いない。蠅男は糸子をどんな

風に扱ったのであろうか。

帆村が疲れ切った身体を自ら鼓舞こぶして、再び車で宝塚へ引返そうと決心したのも、直接の動機はこの可憐かれんなる糸子の安危をたしかめたいことであつた。彼女の父親を、蠅男から護ろうと努力していながら、遂に蠅男のためにしてやられ、糸子を孤児にしてしまった。その責任の一半は、帆村自身にあるように思つて、彼はこの上は、自分の生命にかけて蠅男を探しだすと共に、糸子を救いださねばならないと決心しているのだつた。

暗い山路を縫つて、約一時間のちに自動車は宝塚に帰つてきた。そこで長吉は、西の宮ゆきの電車に乗りかえて、駐在所から貰つた証明書を大事にポケットに入れたまま、帆村に別れをつけて

帰っていった。帆村はこの少年のために、そのうち主家を訪ねて弁明をすることを約束した。

ホテルでは、愕き顔に帆村を迎えた。

なにしろ朝方ドテラ姿でブラリと散歩に出かけたこの客人が、昼食にも晚餐にも顔を見せず、夜更けて、しかも見違えるように憔悴して帰ってきたのだから。

「えろうごゆつくりでしたな、お案じ申しとりました。へへへ」

「いや、全く思わないところまで遠つ走りしたものでネ、なにしろ知合いに会ったものだから」

「はアはア、それでつか、お惚^{のろ}け筋で、へへへ、どちらまで行きはりました」

「ウフン。大分遠方だ。……部屋の鍵を呉れたまえ」

「はア、これだす」と帳場の台の上から大きな札のついた鍵を手渡しながら、不図ふと思い出したという風に「ああ、お客さん、あんたはんにお手紙が一つおました。忘れていてえろうすみまへん」

「ナニ手紙？」

帳場の事務員は、帆村に一通の白い西洋封筒を手渡した。帆村がそれを受取ってみると、どうしたものかその白い封筒には帆村の名前も差出人の名前も共に一字も書いてなかった。その上、その封筒の半面は、泥だらけであった。帆村はハツと思った。しかしさりげない態で、ボーイの待っているエレヴェーターのなかに入った。

帆村は四階で下りて、絨毯の敷きつめてある狭い廊下を部屋の方へ歩いていった。

扉の前に立って、念のために把^{ハンドル}手を廻してみたが、扉はビクともしなかった。たしかに、錠は懸っている。

なぜ帆村は、そんなことを検^{ため}してみたのであろう。彼はなんとなく怪しい西洋封筒を受取ってから、急に警戒心を生じたのであった。

扉には錠が懸っている。

まず安心していいと、彼は思った。そして鍵穴に鍵を挿入して、ガチャリと廻したのであった。その瞬間に、彼は真逆自分が、腰を抜かささんばかりに吃^{びっくり}驚させられようとは神ならぬ身の知るよ

しもなかつた。しかし事実、扉一つ距^{へだ}てた向うに彼の予期しない異変が待ちうけていたのである。

帆村は、鍵を穴から抜いて、片手にぶら下げた。そして把手をグルツと廻して、扉を内側に押した。部屋のなかは、真暗であつた。

扉を中に入つたすぐの壁に、室内灯のスイッチがあつた。

帆村は、手さぐりでそのスイッチの押し釦^{ボタン}を探した。押し釦はすぐ手にふれた。彼は無造作に、その押し釦を押したのであつた。

パツと、室内には明るい電灯が点いた。その瞬間である。彼は、「呀^あッ！」

といつて、手に持っていた鍵を床の上にとり落とした。それも

道理であつた。空であるべきはずのベッドの上に、誰か夜着をすつぽり被つて長々と寝ている者があつたのである。

「もしや部屋を間違えたのでは……」

と、咄嗟とっさに疑いはしたが、断じて部屋は間違つていない。自分の部屋の鍵で開いた部屋だつたし、しかも壁には、見覚えのある帆村のオーバーが懸っているし、卓子の上にはトランクの中から出したまま忘れていった林檎までが、今朝出てゆくときと寸分たがわずそのとおりに並んでいるのだつた。自分の部屋であることに間違いはない。

さあ、すると、ベッドの上に寝ているのは一体何者だろう。

帆村の手は、音もなく滑るように、懸けてあるオーバーの内ポ

ケツトの中に入った。そこには護身用のコルトのピストルが入っていた。彼はそれを取り出すなり、二つに折って中身をしらべた。

「……実弾はたしかに入っている！」

こうした場合、よく銃の弾丸が抜きさられていて、いざというときに間に合わなくて失敗することがあるのだ。帆村はそこで安心してピストルをグツと握りしめた。そして抜き足差し足で、ソロソロベッドの方に近づいていった。

ベッドの上の人物は、死んだもののように動かない。

帆村は遂に意を決した。彼は呼吸いきをつめて身構えた。ピストルを左手にもちかえて、肘をピタリと腋の下につけた。そしてヤツという懸け声もろとも一躍してベッドに躍りかかり、白いシーツ

の懸った毛布をパツと跳ねのけた。そこに寝ているものは何者？
ピストルをピタリと差しつけたベッドの上の人物の顔？ それ
は何者だったろう？

帆村の手から、ピストルがゴトリと下に滑り落ちた。

「おお——糸子さんだッ」

謎！ 謎！

なんという思いがけなさであろう。

自分のベッドの上に長々と寝ている怪人物は何者だろう。それは気味の悪い屍体でもあろうかと、胸おどらせて夜具を剥いでみれば意外にも意外、麗れいじん人糸子の人形のような美しい寝顔が現われたのである。これは一体どうしたことであろう。

ベッドの上の糸子は死んでいるのではなかった。目覚めこそしないが、落ついた寝息をたててスヤスヤと眠っているのであった。その蠟ろうのように艶のある顔は、いくぶん青褪めてはいたけれど、形のいい弾力のある唇は、まるで薔薇の花はなびら片を置いたように紅あかかった。

帆村の魂は恐怖の谷からたちまち恍惚の野に浮き上り、夢を見る人のようにベッドの上の麗人の面にいつまでも吸いつけられて

いた。

「なぜだろう？」

帆村は、解けない謎のために、やっと正気に戻った。夢ではない、糸子が彼の部屋のベッドの上に寝ているのは厳然たる事実だ。厳然たる事実なれば、この大きい意外をもたらした事情はどういうのだろう。それを知らなければならぬ。

彼は帳場へ電話をかけようかと思つて、それに手を懸けた。けれどそのとき不^ふ凶^と気がついて懐^{ふところ}中を探った。

出て来たのは、一通の西洋封筒だった。さつき帳場で渡されてきた宛名も差出人の名前もない変な手紙だ。

彼はそつと封筒をナイフの刃で剥^はがしてみた。その中からは新

聞紙が出て来た。新聞紙を八等分したくらいの小さい形のものでつた。

新聞紙が出て来たと見るより早く、帆村は蠅男の脅迫状を連想した。拡げて調べてみると、果然活字の上に、赤鉛筆で方々に丸がつけてある。これを拾って綴ってゆくと、文章になっていることが分つた。

「ウム、やはり蠅男の仕業だな」

赤い丸のついた字を拾ってゆくと、次のような文句になった。

「——この事件カラただちに手をひケ、今日まデワ大メに見テやる、その証コに、いと子を安全に返シテやる、手を引カネバ、キサマもいと子も皆、いのちがナイものと覚悟セヨ、蠅男より、ほ

ムラそう六へ——

果然、蠅男からの脅迫状だった。

帆村探偵に、この事件から手を引かせようという蠅男の魂胆だった。

帆村は、この新聞紙に赤丸印の脅迫状を読んでいるうちに、恐怖を感じるどころかムラムラと癩しやくにさわつて来た。

「かよわい糸子さんを威おどかしの種に使おうなんて、卑怯千万な奴だ」

それにしても、糸子はどうしてこの部屋へ搬はこばれて来たのだろう。またその脅迫状はどうして帳場に届けられたのだろう。それが分れば、憎むべき蠅男の消息がかなりハッキリするに違いない。

帆村は電話を帳場にかけた。

「誰か僕の居ない留守に、この部屋に入ったろうか」

帳場では突然の帆村の質問の意味を解しかねていたが、やつとその意味を了解して返事をした。

「ハアけさ、お客さんが外出なさいまして、その後でボーイが室内をお片づけしただけでつせ。その外に、誰も一度も入れしまへん」

「ふうむ。ボーイ君の入ったのは何時かネ」

「そうだな。ちよつとお待ち——」と暫く送話口をおさえた後で、「けさの午前十一時ごろだす。それに間違ひおまへん」

「嘘をついてはいけない。その後にも、この部屋を開けたにちが

いない。さもなければ鍵を誰かに貸したろう」

「いいえ滅相めっそうもない。鍵は一つしか出ていまへん。そしてボーイに使わせるんやっても、時間は厳格にやとりまんが、ことに昼からこつちずっと、お部屋の鍵はこの帳場で番をしていましたさかい、部屋を開けるなどということはあらしまへん」

帳場の返事はすこぶる頑固なものであった。帆村はそれを聞いていて、これは決して帳場が知ったことではなく、そつちへは万事秘密で行われたものに違いないと悟った。

全く不思議なことだったが、何者かが帳場と同じような鍵を使って扉を開け、そしてそこに糸子を入れて逃げたのだった。

これももちろん蠅男の仕業にちがいない。一方において脅迫状

を送り、そして他方において糸子を池谷別邸からこのベッドの上に送りこんだのに違いない。しかし蠅男は、一体どうして糸子を、ソツとこの部屋に送りこんだものだろうと帆村は考えた。

「モシモシお客さん。何か間違いでも起りましたやろか」

帳場では、訝いぶかしげに聞きかえした。

「うむ。——」帆村は唸ったが、このとき或ることに気がついて受話器をもちかえ、「そうだ。さつき帳場で貰った西洋封筒に入った手紙のことだが、あれは誰が持ってきたのかネ」

「あああの手紙だったか。あれは——」と帳場氏は言葉を切つてちよつと逡ためらった。

「さあ、それを云つてくれたまえ。誰があの手紙を持ってきたの

だ」

「——そのことですがな、お客さん。ちよつと妙なところがおまんね。実はナ、あの手紙は私が拾いに出ましてん」

「手紙を拾いに出たとは？」

帆村の眉がピクリと動いた。

「いえーな、それがつまり妙やなアとは思つてましたんですわ。

詳しくお話せにや分つてもらえまへんが、あれは午後四時ごろやつたと思いますが、この帳場へ電話が懸つて来ましてん。懸つてみますと男の声でナ、いま玄関を出ると庭に西洋封筒を抛ほうりこんであるさかい、それを拾つて帆村さんに渡しといて呉れ——と、こないに云うてだんネ。そして電話はすぐ切れしました。なにを阿

呆らしいと思うたんやけど、まあまあそんなにして玄関の外に出ましたんや。するとどうだす、電話のとおりには、砂利の上にあの西洋封筒が落ちていますやないか。ハハア、こらやつぱり本当やと思つて、それで拾つて、お客さんにお届けしたというような次第だす」

帆村はそれを聞いて、たいへん興味を覚えた。ホテルの庭に置いた手紙を、拾つてくれと帳場に電話をかけたというのは、これは決して普通のやり方ではない。とにかくそれが事実がちがいないことは、封筒に附着していた泥を見てもしれる。それが本当だとすると、この奇妙な脅迫状の配達方法のなかに、なにか深い意味があるものと見なければならぬ。

さて、それは、いかなる深い意味をもっているか、帆村の頭脳は麗人糸子の身近くにあることを忘れて、愈々いよいよ冴えかえるのであった。彼はその秘密をどう解くであろうか。

怪しき泊り客

不思議な脅迫状の配達方法であった。

「ねえ君」と帆村は受話器をまだ放さないでいった。

「その電話の相手は、どこから懸けたのだから分ったかネ」

「いや、分りまへん」

「もしやこのホテル内から懸けたのではなかつたかネ」

「いえ、そら違います。ホテルの中やつたらもつともつと大きな声だすわ。そしてもつと癖のある音をたてますがな。ホテルの外から懸つて来た電話に違いあらしまへん」

「ホテルの中から懸けた電話ではないというんだネ。フォーム」帆村は首を左右にふつた。それはひどく合点がてんが行かぬというしるしだつた。

宛名なしの手紙をホテルの庭に抛りこんで置いて、そして間髪を入れず、外からその手紙を拾えと電話をかけてくることがそう安々と出来ることだろうか、一分違つてもその手紙は誰かに拾わ

れるかもしれないんだ。そうすると必ず間違いが起るに極つてい
る。しかも常に用意周到な蠅男である。彼がそんな冒険をする筈
がない。帆村の直感では、蠅男はこのホテルの中にいて、窓から
その手紙を庭へ抛げおとし、そしてホテル内の一室からすぐに帳
場へ電話をかけたものだろうと思つていたのだ。しかし帳場では
案に相違して、その電話はホテル外から懸つてきたんだという。
折角の帆村の考えも、そこで全く崩れてしまうよりほかなかつた。
帆村はそこで一旦電話を切つた。

糸子は、まだ何も知らずスヤスヤと睡っている。帆村はソツと
近づいて、彼女の軟かな手首を握つてみた。

「ウム、静かな脈だ。心臓には異常がない。だがどう見ても、何

か睡眠剤のようなものを嘔^のまされてゐるらしい」

なにゆえの睡眠剤だろう。

もちろんそれは、糸子をここへ搬びこむためにそうするのが便利だったというわけだろう。すると糸子たちが、このホテルに入ってくるのを誰か見た者がありそうなものだ。それを帳場へ行つて聞き正したいと思つた。

彼はすぐにも帳場の方へ下りてゆきたかつたけれど、それは甚だ気懸りであつた。この部屋には、糸子がひとりで睡つてゐるのである。もし彼が室外に出て鍵をかけていったとしても、さつき煙のようにこの部屋に闖入した蠅男の一味は、えたりかしこしと帆村の留守中に再びこの部屋に押し入り、糸子に危害を加えるか

もしれないのだ。これは迂濶うかつに部屋を出られないぞと思った。

そうした心遣いが帆村の緻密な注意力を証拠だてるものであつた。けれどその一面に彼がいつもの場合とはちがひ、なぜかしら気の弱いところが見えるのも不思議なことであつた。帆村は電話器をとりあげて、外線につないで貰つた。そして彼は宝塚警察分署を呼びだした。彼はそこで事情を話し、すぐ二名の警官を特派してくれるように頼んで、電話を切つた。警官は間もなくホテルにとびこんで来た。

「やあ帆村はん、なにごとが起りました」

と、向うから声をかけられたのを見ると、それはかねて見覚えのある住吉署の大男、大川巡査部長と、外ほか一名であつた。帆村も

奇遇に愕いて尋ねると、大川巡査部長は昨日辞令が出て、この宝塚分署の司法主任に栄転したということが分つた。時も時、折も所、蠅男の跳ちようりよう梁の真只中に誰を見ても疑いたくなるとき、最も信用してよい旧知の警官を迎えたことは、帆村にとってどんなに力強いことであつたか分らなかつた。

警官二人を部屋の中に入って貰つて、糸子の保護を頼んだ上で、帆村は帳場へトコトコと下りていった。

帳場では大川主任の訪問をうけてから、すっかり恐縮しきつていた。そして帆村にありとあらゆる好意を示そうとするのだった。

帆村はさつきから考えていたところに従つて、帳場に質問を發した。まず誰かホテルの者でどうこうした若い婦人を見かけたも

のではないかと訊いてみた。

帳場では、私どもは決して見かけなかったと返事をした。それからすぐ雇人たちを集めて、同じことを問いあわせて呉れた。しかし誰一人として、糸子に該^{がい}当^{とう}する婦人を見たものはないということだった。

「フーム、どうも可笑^{おか}しいことだ」

帆村は強く首をふった。

誰にも見られないでこのホテルに忍びこむということができら
だろうか。裏口や非常梯子のことを聞いてみたが、そこからも誰
にも見とがめられないで入ることは出来ないことが分つた。する
と糸子は、煙のように入つて来たことになる。そんな莫^ば迦^か莫^ば迦^かし

いことがあつてたまるものではない。

そこで帆村は窮きゆうよ余よの策として、宿帳を見せて貰つた。目下のとうりゆうきやく逗留客は、全部で十組であつた。男が十三人に、女が六人だつた。

次に彼は逗留客がホテルに入った時間を調べていった。

その中に彼は一人の男の客に注意力を移したのだつた。

「井上一夫。三十三歳」

と、たどたどしい筆蹟で書いてある一人の男があつた。住所は南洋パラオ島常盤街十一番地と別な筆蹟で書いてある。帆村が怪しんだのは、彼の井上氏が南洋から来たということではなかつた。それはこの井上氏が本日の午後三時半に到着したというその時刻

にあつたのである。午後にはホテルに入ったのはこの井上氏だけであつた。

午後三時半といへば、彼が蠅男に三輪車を奪われてのちトボトボと有馬の町の駐在所へ転げこんだその時刻なのであつた。もし蠅男があの場合、大胆にもすぐに宝塚へ引きかえしたとしたら、午後三時半にはゆつくりこのホテルに入れる筈である。なにしろ午後にはホテルについた唯一の人物であるから、よく調べなければ承知できない。

「これはどんな風ふうてい体の客人ですか」

と、帆村は帳場にたずねた。

「そうですねア、とにかく顔の青い大きな色眼鏡をかけた人だす。

風邪ひいとる云うてだしたが、引きずるようなブカブカの長いオーバーを着て、襟えりを立ててブルブルふる慄ふるえていました。そして黒革の手袋をはめたまま、井上一夫、三十三歳と左手で書つきよりました」

帆村は呻うなった。色眼鏡に長い外套、そして襟を立ててブルブル慄ふるえている顔色の青い男だといっているのである。それはたしかに怪しい人物だ。

「なにか荷物を持っていなかった？」

「さよう、持っていましたな。大きなトランクです。洋行する人が持つて歩くあの重いやつでしたな。自動車から下ろすときも、ボーイたちを叱りつけて、ソツと三階へ持つてあがりましたかな」

「ほう、大きなトランク？」

帆村はハツと息をのんだ。

「そいつだ。そいつに違いない。その井上氏の部屋に案内して呉れたまえ」

蠅男の奇略きりやく

「えッ、——」

と、帳場氏は、帆村の勢いに驚いて身をすさった。

「なにがそいつだんネ」

「そいつが恐るべき蠅男なんだ。僕にはすっかり分ってしまった。早くそいつの部屋へ案内したまえ」

「へえ、あの蠅、蠅男！ あの殺人魔の蠅男だっか。ああそういわれると、どうも奇体な風ふうてい体をしとつたな。気がつかんでもなかつたんやけれど、まさかそれが蠅男だとは……」

「愕くのは後でもいい。さあ早くその井上一夫の部屋へ——」
帆村はジリジリして帳場氏の腕をつかんだ。

帳場氏はそれに気がついて、

「ああ、その人やったら、今はお留守だつせ」

「ナニ留守だツ。どうしたんだ、その男は」

「いえーな。ちよつと宝塚の新温泉へ行つてくるいうて出やはりました」

「それは何時だ」

「来て間もなくだつせ。ちようどあの西洋封筒を拾つたすぐ後やつたから、あれで午後の四時十分か十五分ごろだしたやろな」

「うーむ、そいつだ。いよいよ蠅男に極きまつた。分つたぞ分つたぞ」

「あんさんにはよう分つてだすやろが、こつちには一向腑に落ちまへんが」

「いや、よく分つているのだ。僕の云うことに間違いはない。さあ早く、その井上氏の部屋へゆこう、部屋の鍵を持ちたまえ」

帆村は巖然たる自信をもって、帳場氏に命令するようにいった。

そして彼は真先にたつて、エレヴェーターのなかに躍りこんだ。帳場氏も、いまは帆村の言葉にしたがつてついてゆくより外に仕方になかった。

エレヴェーターを四階で停めて、帆村は大川主任のところへ行った。そして、一部始終を手短かに話し、主任の応援と命令とを乞うた。

「ええッ。蠅男がこのホテルに入りこんどる。それはほんまかいな。ほんまなら、こらえらいこつちや」

部長の顔色もサツと青褪め、すこぶる緊張した。

糸子の部屋には一人の警官を置いて、あとの三人は、急いで三階に駆け下りた。そして目ざす井上一夫の部屋第三三六室に近づ

いていった。

いざとなれば、たとい留守にしても、蠅男のいた部屋を開けるというのは、たいへん覚悟の要ることだった。三人はめいめいに腋わきの下から脂汗を流して、錠前の外れた扉に向つて身がまえた。

帆村はソツと扉を押した。

そして素早く手の中に入れて、電灯のスイッチポタンを押した。パツと室内灯がついた。

三人は先を争つて、部屋の中を見た。

「ウム、あるぞ、トランクが……」

部屋のなかには、誰の姿も見えず、ただ大きなトランクだけがポツンと置き放されてあつた。

「さあ、このトランクを開けてみましょう」

帆村は主任の許しをえて、持ってきた彼の秘蔵にかかる錠前外しでもって、錠なしでドンドン錠を外していった。

錠前はすべて外れた。はずものの二分と懸らぬうちに――

大川主任は啞然あぜんとして、帆村の手つきに見惚みとれていた。

「さあ、トランクを開きますよ」

帆村はトランクの蓋に手をかけるなり、無造作にパツと開いた。

「あッ、空っぽや」

「ウム、僕の思ったとおりだッ」大トランクの中は、果然かぜん空っぽであった。帆村は、そのトランクの中に頭をさし入れて、底板を綿密にとりしらべてみた。

「ああこんなものがある」

帆村はトランクのなかから、何物かを指先に摘みだした。

それは細いヘアピンであった。彼はそれをソツと鼻の先へもつていった。

「ああピザンチノだ。南欧のすみれそう葶草そうからとれるという有名な高級香水の匂いだ、全く僕の思った通りだ。糸子さんはこの香水をつけている。するとこのトランクに糸子さんが入っていたと推定してもいいだろう。糸子さんはこのトランクのなかに入れられてこのホテルに搬びこまれたのだ」

「えッ、あの糸子はんが——へえ、そら愕いたなア」

大川主任と帳場氏は、互いの顔を見合わせて愕いたのであった。

そこで帆村は、二人に対し、蠅男の演じた奇略トリックをひととおり説明した。前後の様子から考えると、蠅男は三輪車を奪つてから、大胆にもこの宝塚にひきかえしたのだった。そして彼は多分池谷別邸のなかに幽閉されていたろうと思われる糸子に麻酔剤を嗅がせた上、このトランクに入れ、それを自動車に積んで、彼は泊り客のような顔をしてこのホテルに入りこんだのだった。そして隙をみて、このトランクのなかから糸子を出し、合鍵で帆村の部屋を明けて、そのベッドの上に糸子を寝かせたというわけだった。その上かの蠅男は、脅迫状を作つて、窓から庭に投げだし、直ちに帳場氏を電話口呼び出して、それを拾わせたと説明した。そのとき帳場氏は、怪訝けげんな顔をしていった。

「そら妙やなア。あの電話が蠅男やつたとすると、蠅男はホテルの外にいたことになりまっせ。なんでやいうたら、あの電話はホテルのなかから懸けたんやあれしまへんさかい。電話を懸けた蠅男と、この部屋に居った蠅男と、蠅男が二人も居るのんやろか」

帆村はそれを聞いて大きく肯うなずき、

「そのことなら、さつきやつとのことで謎を解いたんです。蠅男はホテルのなかに居るのを知られないために、電話にも奇トリック略をつかつたんです」

「へえ、どんな奇略を——」

「それはホテルの交換台からすぐに帳場をつながないで、一旦部屋から外線につないで貰い、電話局から再び別の電話番号でこの

ホテルに懸け、一度交換台を経て帳場につないで貰ったんですなア。そうすれば、同じホテル内の部屋にかけたにしろ、電話局まで大廻りして来たから、電話の声ホテル内同士でかけるよりはずっと小さくなつたんです。実に巧みな奇略だ」

「なるほどなア」と巡査部長は感心をしたが、

「しかし、なんでそんなややこしい事をしましたんやろ。糸子さんの胸の上にも、その脅迫状をのせといたらええのになア」

「いやそれはつまり、今ホテルに蠅男が入っていることを知られたくはなかつたんです。あくまで自分は井上一夫で、蠅男ではないという現場不在証明（アイバ）を作つて置きたかつたんです」

「なるほどなるほど。それにしても蠅男ほどの大悪漢のくせに、

小さいことをビクビクしてまんな」

「いやそこですよ」

と、いつて帆村は二人の顔をジツと見た。

「蠅男は今にもう一度このホテルに帰ってくるつもりなんですよ。普通の泊り客らしい顔をしてネ」

「えッ、蠅男がもう一度ここへ帰ってくるというのでつか。さあ、そいつは——そいつは豪えらいこつちや。どないしまほ」

そのとき廊下をボーイが、急ぎ足でやって来た。

「ああ、いま帳場に電話が来とります。井上一夫はんいうお客さんからだす」井上一夫？ ああ井上一夫といえば、蠅男の仮称である。蠅男はいまごろ何の用あつてホテルに電話をかけてきた

のだろうか。三人は恐怖のあまり言葉もなく、サツと顔色を変えた。

蠅男の声

井上一夫という偽名を使っている怪人蠅男が、ホテルへ電話をかけてきたというボーイの注進である。

帳場氏はもちろん真蒼に顔色をかえると、勇猛をもって鳴る大川司法主任も、空のトランクから手を放して、木製人形のように

身体を硬直させた。ひとり帆村探偵は、咄嗟とっさの間にも、この際どうすればいいかを知っていた。

「さあ君、帳場に来ている蠅男の電話を、早くその電話器につなぎかえたまえ」

と、この三三六号室の卓上電話器を指した。

帳場氏はオズオズと受話器に手をかけた。間もなく蠅男の声が、そのなかに流れこんできた。

「えッ、帆村さんですか。へえ、居やはりま。いま代りますさかい。——」

帳場氏は帆村の方をむいて、蛇でも渡すかのように、受話器をさしだした。そして自分ほうまく助かったとホッと大きな息をつ

いた。

帆村は無造作むぞうさくに受話器をとった。しかし彼はそれを耳にもつていく前に、左手で鉛筆を出し、ポケットから出した紙片になにかスラスラと器用な左書きで文字をかきつけて、大川主任に手渡した。

大川はそれを受取つて大急ぎで読み下した。そして無言のままおおきく肯うなずくと、そのまま部屋を出ていった。

「ハイハイ、お待ちどうさま。僕は帆村ですが、貴方はどなたさんですか」

すると向うで、作り声らしい太い声が聞えてきた。

「探偵の帆村荘六君だね。こっちは蠅男だ」

「えッ、電話がすこし遠いのでよく聞えませんが、ハイイトコどうするんですか」

「ハイイトコではない、蠅男だッ」

「えッ、早^{はやとこ}床さんですか。すると散髪屋ですね」

向うで唳^{どな}鳴る声でした。

帆村は今日にかぎって、たいへんカンがわるいらしい。

「ああそうですか、蠅男だとおっしゃるんですな、あの今大阪市中に大人気の怪人物の蠅男でいらつしやるわけですか。ちよつと伺いますが、本当の蠅男さんですか。まさか蠅男の人氣を羨^{うらや}んで、蠅男を装っているてえわけじゃありませんまいネ」

電話器の向うでは、せせら^{わら}嗤う声が聞えた。帆村はソツと腕時

計を見た。話をはじめてから、まだ四十秒！

「オイ帆村君。君は美しい令嬢糸子さんと、俺の手紙とをたしかに受取ったろうネ」

「ええどっちとも、確かに」

「ではあのとおりだぞ。貴様はすぐにこの事件から手を引くんだ。俺を探偵したり、俺と張り合おうと思っても駄目だからよせ。糸子さんは美しい。そして貴様が約束を守れば、俺はけっして糸子さんに手をかけない。いいか分ったろうな」

「仰おっしゃ有ることはよく分りましたよ、蠅男さん。しかし貴下は人殺しの罪を犯したんですよ。早く自首をなさい。自首をなされれば、僕は安心をしますがネ」

「自首？　ハツハツハツ。誰が自首なんかするものか。——とにかく下手へたに手を出すと、きつと後悔しなければならぬぞ」

「貴方も注意なさい。警察では、どうしても貴方をつかまえて絞首台へ送るんだといっていますよ」

「俺をつかまえる？　ヘン、莫迦にするな。蠅男は絶対につかまらん。俺は警察の奴やつばら輩に一泡ふかせてやるつもりだ。そして俺をつかまえることを断念させてやるんだ」

「ほう、一泡ふかせるんですって。すると貴方はまだ人を殺すつもりなんですな」

「そうだ、見ている、今夜また素晴らしい殺人事件が起つて、警察の者どもは腰をぬかすんだ。誰が殺されるか。それが貴様に分

れば、いよいよ本当に手を引く気になるだろう」

「一体これから殺されるのは誰なんです」

「ばか莫迦！ そんなことは殺される人間だけが知ってりやいいんだ」

「ええッ。——」

「そうだ、帆村君に一言いいたいという女がいるんだ。電話を代るからちよつと待つとれ」

「な、なんですって。女の方から用があるというんですか——」

帆村はあまりの意外に、強く聞きかえした。そのとき電話口に、蠅男に代つて一人の女が現われた。

「ねえ、帆村さん」

「あなた貴女は誰です。名前をいって下さい」

「名前なんか、どうでもいいわ。けさからあたしたちをつけたりしてさ。早く宝塚から……」

とまで女がいったとき、帆村は向うの電話器のそばで、突然蠅男の叫ぶ声を耳にした。

「——し、失敗しまったツ。オイお竜りゆう、警官の自動車だツ」

「えッ、——」

ガラガラと、ひどい雑音が聞えてきた。怪しき女は受話器をその場に抛ほうりだしたものらしい。なんだか戸が閉まるらしく、ボタンボタンという音が聞えた。それに続いて、ドドドドツという激しい銃声が遠くに聞えた。

「あ、機関銃だ！」

帆村は愕然がくぜんとして叫んだ。

醒さめたる麗れいじん人

電話が切れて、不気味な機関銃の音も聞えなくなった。しかし帆村の耳底には、微かすかなながらも確かに聞いた機関銃の響きがいっまでもハッキリ残っていた。

機関銃の響きを聞いて、帆村が愕然がくぜんとするのも無理ではなかった。

忘れもせぬ十二月二日、鴨下ドクトルの留守邸に、焼ける白骨屍体を発見したあの日、何者かの射つ機関銃のために、彼帆村は肩に貫通銃創かんつうじゆうそうをうけたではないか。だから機関銃と聞けば、ために全身の血が俄にわかに逆流するのこともわりだった。

あの機関銃は、一体どつちが撃ったのであろうか。

警官隊であらうはずがない。

すると、機関銃はたしかに蠅男と名乗る電話の人物がぶつ放したものとなる。

機関銃と蠅男！

「うむ、やっぱりそうだったか」

帆村は呻うなるように云った。

鴨下ドクトル邸に於て、彼を機関銃で撃つたのは、紛れもなくまぎ蠅男だったにちがいない。蠅男はあの日、ドクトル邸の二階に隠れていて、そこへ上つてきた彼を撃つたのにちがいない。

「そうか。——すると蠅男と僕とは、すでに事件の最初からなまぐさ血腥い戦端をひらいていたんだ。そういうことは今の今まで知らなかった。うぬ蠅男め、いまに太い鉄の棒をはめたおり檻のなかに入れてやるぞ」

帆村は切齒せつしやくわん扼腕して口惜しがった。

凶暴な機関銃手があゝの蠅男だということに決まれば、彼は事件をもう一度始めから考え直さねばならないと思つた。

それから今の電話によつて、もう一つ新しく知つた事実があつ

た。それは蠅男がいつも一人で居るのかと思つたのに、今の電話で、蠅男には連れの人があることが分つた。

それは年若い女性だつた。

(し、失敗しまつたツ。オイお竜りゆう！)

たしかにお竜——と蠅男は呼んだ。

そのお竜のことであるが、彼女は何か帆村に云いたがつて電話に懸つたが、僅か数語しか喋らないうちに、蠅男が警官隊の襲来を知らせたので、話はそのままに切れた。

だがその短い数語によつて、彼女は何者かということがハッキリ分つたような気もする。

(けさから、宝塚であたしたちをつけて……)

といったが、今朝から宝塚でつけた女といえ、あの池谷医師の連れの女の外ないのである。あれがお竜にちがいない。丸顔の背のすらりとした美人であつた。年齢のころは、見たところ二十四か五といったところだつたが、たいへん仇あだつぽいところから、或いはもつと年増なのかも知れない。

その怪しの美人お竜は、池谷医師と連れだつて、新温泉の娯楽室のなかで一銭活動写真のフィルム「人造犬」の一卷を購あがない、それからまた肩をならべて林の向うの池谷邸に入つていったのである。それつきり、二人の姿は邸内にも発見されなかつた。一体二人はどこへ行つたのだらう。

ところがひとりお竜だけは、電話の声に過ぎないとはいえ、再

び帆村の前に現われたのである。しかも蠅男の連れとして彼の前に關係を明らかにしたのである。一方、池谷医師はどうしたであろうか。いまごろは彼の別邸か医院に姿を現わしているであろうか。

池谷医師は、あのお竜とどういふ關係なのであろう。お竜があの恐ろしい蠅男の一味だということを知っているのであろうか。もし知っていれば、あんな女と肩を並べて歩くはずがない。考えてゆくと全く不思議な謎であった。

とにかく池谷医師の所在を、もう一度丁寧に調べる必要がある。大川司法主任と相談して調べることにしよう。そういえば、大川は下へ下りていったきり、なかなか帰ってこないが、なにをして

いるのであろう。

帆村が不審を起しているところへ、当の大川主任は佩劍はいけんを握つてトントンと飛びこんできた。

「大川さん。どうです、分つた？」

「分つた。——」

主任は、苦しそうに喘あえぎ喘あえぎ応えた。

「どう分つたんです？」

「天王寺てんのうじの新世界のわきだす」

「え、新世界のそば？」

「はア、そや。天王寺公園南口の停留場の前に、一つ公衆電話がおまんね。その中に、蠅男が入りよつたんや。あんさんの命令ど

おり、すぐ電話局へかけてみて、あんさんの話し相手が今どこから電話をかけているか調べてもらうてな、それから直ぐ署の方へ連絡しましたんや。蠅男が今これこれのところから電話を懸けているねん、はよ手配たのみまつせいうたら、署長さんが愕おどろいてしもうて、へえ蠅男いう奴はやっぱり人間の声だして話しているかと問いかえしよるんや。——しかしすぐ手配するいうとりました」

帆村はうちうなずいて、主任に今しがた電話を通じて警官隊が現場に到着したらしい騒ぎを耳にしたことや、蠅男が女を連れていて、機関銃をもって抵抗し、そのうちにどこかに行ってしまうたことを話した。大川主任は、なるほど、ほうほう、さよかいなを連発しながら、帆村の機智によるこの蠅男追跡談にいと熱心

に耳を傾けた。

丁度そのとき、部長の連れてきた一人の警官が、部屋に入ってきた。

「部長さん、あの娘がどうやら目が覚めたらしゅうおまつせ」

その警官は、蠅男の手によつてこのホテルの帆村の借りている部屋に寝かされていた故玉屋総一郎の一人娘糸子を保護していたのだった。糸子は睡眠薬らしいものを盛られて、トランクのなかからズツと睡りつづけていたのだが、今やつと覚めたものらしい。帆村はそれを聞くと、すぐに糸子のところへ駆けつけた。

「どうしました、糸子さん」

糸子はベッドに寝たまま、乱れた髪をすんなりとした指さきで

かきあげていたが、思いがけない帆村の姿をみてハツとしたらしく、みるみる頬を真赤に染めて、

「まあ帆村さん、うちどないして、こんなところへ来ましたんやろ。ここ、どこですよ」

と、床の上に起きあがろうとしたが、呀あつと小さい声をたてて、また床の上にたおれた。

「――目がまわって、かなわん」

帆村はつとよって、糸子の腕をとり、そして脈を見た。脈はすこし早かった。

心臓がよわっているようだ。

「糸子さん、静かにしていらっしゃい。こんどはもう大丈夫、十

分信頼していい警官の方が保護して下さいますから、何も考えないで、今夜はここで泊っていらつしやい。ばあやさんか誰か呼んであげましょうか」

「そんなら、家へ電話かけてお松をよんで頂戴」

「医者も呼んであげましょう」

「いいえ、お医者はんはもう結構だす。すぐなおりますさかい、お医者さんはいりまへん。池谷さんにも、うちのこと知らせたらあきまへんし」

糸子はひどく医者を恐怖していた。もちろん池谷医師に対する不信のせいであらうと思われるが。

帆村と大川主任とは、糸子をいろいろと慰めてから、その部屋

を出た。そして廊下に出て、たがいに顔を見合わせた。

「糸子はんのことは、首にかけて引受けまつさ。どうぞ安心しとくなはれ」

と大川主任は強く自信ありげな言葉でいった。

「じゃ、貴官にくれぐれもお頼みますよ」

そういつて帆村は、主任の手をギユツと握った。部長は帆村の心の中の秘めごととも知らず、ただ感激して帆村の手を強く握りかえした。

蠅男包ほういじん陣

帆村は天王寺公園のところで、夜の非常警戒線にひっかかった。彼は後事を大川主任に頼み、宝塚のホテルから自動車をとばして住吉署に向う途中だったのだ。住吉署に行つてから、先刻さつきの彼が一役買った蠅男捕物の話も聞いたり、それから久方ぶりで帰郷したという奇人館の主人鴨下ドクトルにも会つてみるつもりだった。ところが公園の近くまで来ると、非常警戒線だという騒ぎである。帆村探偵は車を下りて、頤あごひも紐をかけた警官に、住吉署の正木署長が来ていないかと尋ねた。

「ああ正木さんなら、公園南口の公衆電話のそばに、うちの署長

と一緒に居やはるはずだつせ。そこに警戒本部が出張してきとり
ますのや」

うちの署長というのは、えびすしよ戒署のことをいうのであろう。天
王寺公園や新世界は、この戒署の管轄だった。

帆村探偵は警戒線のなかに入れて貰って、市電のレール添いに
公園南口の方へ歩いていった。行くほどになるほど公衆電話の函
が見えてきた。さつきホテルから蠅男と話をしたとき、怪人物蠅
男はあの電話函のなかに入っていたんだ。美人お竜も、あの函の
前であたりに気を配っていたのかも知れない。近づくに従って、
一隊の警察官が停留場の前にちよりつ佇立しているのを認めた。丁度誰す
何いかした警官があつたのを幸い、彼を案内に頼んで、その一行に近

づいた。

なるほど正木署長もいた。帆村と親しい村松検事もいた。戒署長の真赤な童顔も交っていた。

正木署長は手をあげて帆村をよんだ。

「やあ皆さん。蠅男が電話をかけているのを知らせてくれた殊勲者、帆村探偵が来られましたぜ。その方だす」

旧知も新知も帆村の方をむいてその殊勲をねぎらった。

「署長さん。蠅男はどうしました」

「さてその蠅男やが、折角せっかく知らせてくれはったあんたにはどう

も云いにくい話やが——実は蠅男をとり逃がしてしもうたんや」

「はア、逃げましたか」

「逃げたといつても、逃げこんだところが分つてゐるよつて、いま見てのとおり新世界と公園とをグルツと取巻いて警戒線をつくつとるのやが——」

「ああなるほど、そのための非常警戒ですか。女の方はどうしました、あのお竜とかいう……」

「ああ、あれも一緒に、その軍艦町ぐんかんまちに逃げこんでしもて、あと行方知れずや」

「え、軍艦町？」

「はア、軍艦町には、狭い関東煮やが沢山並んで、どの店にも女の子が三味線をひいとる、えろう賑やかな横丁や。そこへ逃げこんだが最後、どこへ行つたかわかれへん」

「じゃあ、どっちも捕える見込み薄ですね」

「しかし儂わしの考えでは、二人ともまだこの一画のなかにひそんでる。それは確かや。この一画ぐらい隠れやすいところはないんや。そしていずれ隙を見て、チヨロチヨロと逃げ出すつもりやと睨にらんどる。もっと待たんと、ハッキリしたところが分れしまへんな」

そこへ一人の警官が、伝令と見えて、向うからかけて来た。

「いま向いの動物園の中で妙な洋服男がウロウロしとるのを見つけてました。こっちへ出てくる風でおます。それとなく警戒しとります」

動物園というのは、公園南口停留場のすぐ向いにあつた。この寒い夜中に、動物園のなかをうろついているというのはいかさま

変な話だった。

そのとき村松検事が、例の病人のような骨ばった顔をこつちへ近づけてきた。

「オイ帆村君。なにか面白い話でも聞かさんか。儂は至極退屈しているんだ」

検事は浮かぬ顔をしていた。折角の捕物がうまくいかないので、腐っているらしい。

「面白い話は、こつちから伺いたいくらいですよ。蠅男がアメリカのギャングのように機関銃を小脇にかかえてダダダツとやったときの光景はいかがでした」

「ウン、なかなか勇壮なものだったそうだ。味方はたちまち蜘蛛

の子を散らすように四散して、電柱のかけや共同便所のうしろを利用してしまったというわけさ」

「検事さんのお口にかかつては、こつちは皆シャツポヤ」と署長は苦笑いをした。「それよりも帆村はん、豪えらい妙な話がおますのや。それは蠅男の機関銃のことですがナ、その機関銃の銃じゅうしん身みがこつちには皆目見えへなんだちゆうのだす」

「え、もう一度いつて下さい」

「つまり、蠅男は機関銃を鳴らしとるのに違いないのに、その肝か腎んじんの銃身がどこにも見えしまへんねん」

「それはおかしな話ですね。蠅男はどんな風に構かまえていたんですか」

「ただこういう風に」と署長は左腕を水平に真直に前につきだしてみせ、「左腕を前につきだして立つとるだけやっという話です。手にはなんにも持つとらしまへんねん。透明機関銃やないかという者も居りまつせ」

「透明機関銃？　まさか、そんなのがあろう筈がない。何か見ちがえではないのですか」

「いや、蠅男に向うた誰もが、云いあわしたようにそっくりよつたんで……」

「フーム」

帆村はその奇怪な話を聞いて、狐に鼻をつままれたような気がした。

「そうそう、そういえば先刻の蠅男の電話では、蠅男は今夜のうちにまた誰かを殺すといっていましたよ」

「なに今夜のうちに、また殺すつて」

検事が愕いて聞きかえした。

「ほんまかいな——」

正木署長は恐怖のあまりしばらくは口も利けなかつたほどだった。

「誰か蠅男から脅迫状をうけとつた者はないのですか」
検事と署長とは、思わず不安げな顔を見合わせた。

奇行ドクトルの出現

「誰だろう、こんどの犠牲は？」

「さあ、蠅男から死の脅迫状をうけとつたという訴えはどこからも来てえしまへんぜ」

「フーム、変だな」

検事と署長とは、強く首をふった。

「なんだ。誰が殺されるか、まだ分っていないのですか」

帆村も啞然あぜんとした。蠅男は電話でもってたしかに殺人を宣言したのだった。そしてその殺人は、満都を震駭しんがいさせるほど残酷を

きわめたものであるらしいことは、蠅男の口ぶりで察せられた。あの見栄坊の蠅男が、それほどの大犯罪をやるうとしながら、相手に警告状を出さない筈はないと思われる。

そもこの戦せんりつ慄すべき犠牲者は、何処の誰なのであろうか。

「来た来た、あれだッ」

と、そのとき叫ぶ者があつた。

帆村はハツとしてその方を向いた。

動物園の入口から、一人の老紳士が警官に護られながらこつちへ歩いてくるのが見えた。それは、さつき伝令の警官から報告のあつたように、夜の動物園のなかにうろついていた疑問の人物であらう。

老紳士はすこし猫背の太った身体の持ち主だった。頭の上にチヨコンと小さい中折帽子をいただき、ヨチヨチと歩いてくる。そして毛ぶかい頤あごひげ鬚くちひげや口髭くちひげをブルブルふるわせながら、低声こごえの皺がれ声で何かブツブツいつていた。どうやら警官の取扱いに憤慨しているらしかった。

「……どうもお前らは分らず屋ばかりじゃのう。早く分る男を出せ。天下に名高い儂わしを知らないとは情けないやつじゃ」

と、老紳士はポンポンしていた。

「おお、あれは鴨下かもしたドクトルじゃないか」

と正木署長は、意外の面持おももちだった。

「儂を知らんか、知つとる奴が居るはずやぞ。もつと豪えらい人間を

「出せ」

「おお鴨下ドクトル！」

「おお儂の名を呼んだな。——呼んだのはお前じやな。うむ、これは署長じや。この間会って知っている。お前は感心じやが、お前の部下は実に没常識ぞろいじやぞ。儂のことを蠅男と呼ばわりおつたツ」

老紳士は果然鴨下ドクトルだったのだ。ドクトルはなおも口をモガモガさせて、黒革の手袋をはめた手に握った細い洋杖ステツキをふりあげて、いまいましたようにうちふつた。

正木署長はドクトルに事情を話して諒解りようかいを乞うた上で、なおドクトルが夜の動物園で何をしていたのかを鄭重ていちょうに質問し

た。

「なにをしようど、儂の勝手じや。儂の研究の話をしたつて、お前たちに分るものか」

「それでもドクトル、一応お話下さらないとかえつてお為になりませんよ」

「ナニ為にならん。お前は脅迫するか。儂は云わん、知りたければしおたりつのしん塩田律之進しんに聞け」

「えッ、塩田律之進というど、アノ鬼検事といわれた元のけんじせ検事せい塩田先生のことですか」

村松検事が愕いて横合いから出てきた。

「そうじや、塩田といえはあいつ彼奴あいつにきまつとる。あれは儂の昔から

の友人じゃ」とドクトルはジロリと一同を見まわし、

「それに儂は塩田と約束して、これから堂島どうじまの法曹クラブに訪ねてゆくことになつとる。心配な奴は、儂について来い。しかし邪魔にならぬようについて来ないと、遠慮なく吠鳴りつけるぞ」

あの有名な塩田先生の友人と聞いては、検事も署長も、大タジタジの体であつた。なかにも村松検事は、塩田先生の門下の俊才として知られていた。それで彼は、この上、先生の友人である鴨下ドクトルを警官たちが怒らせることを心配して、

「じゃあドクトル、塩田先生にはしばらく御無沙汰していましたので、これから一緒にお伴をしてもいいのですかネ」

「なんじゃ、貴公がついて来るといふのか。ついて来たけりやつ

いてくるがいい。しかし今もいうとおり、邪魔にならぬようにしないと、この洋杖でなぐりつけるぞ」

奇人館の主人は、なるほど奇人じみていた。検事はそれをうまくあしらいながら、署長たちに断りをいって、ドクトルのお伴をすることになった。堤の^{どて}ところ^{どて}に待っていた一台の警察の紋のついた自動車がよばれ、それにドクトルと検事は乗りこんで、出かけていった。

帆村は、はじめて見た鴨下ドクトルの去ったあとを見送りながら、

「フーム、実に興味津^{しんしん}々たる人物だ」

と歎息^{たんそく}した。

そして正木署長の方を向いて、鴨下ドクトルが帰館して、あの暖炉だんろのなかの屍体のことをどういったか、それからまたドクトルは何処に行っていたのかなどという予かねて彼の知りたいたいと思つていたことを訊きいてみた。

それに対して署長は苦笑にがわらいをしながら、イヤどうも万事あの調子なので、訊問じんもんに手古てこずつたがと前置きして、次のように説明した。

すなわちドクトルは、急に思いたつて東京に行つていたのでそうですね。そして十二月一日から五日まで、上野の科学博物館へ日参して博物館の標本をたんねんに見てきたそうである。宿は下谷した区初音町はつねちょうの知人の家に泊つていたという。

それから暖炉のなかの屍体は、一向心あたりがないという。これはお前たちの警戒が下手くそのせいだと。プンプン怒っていたとのことである。

ドクトルのいったことが正に本当かどうか、それは上申して目下取調べを警視庁に依頼してあるということだった。

帆村は早くその報告が知りたいものだと思った。しかしまだ二、三日は懸るのであろう。

「それから正木さん。ドクトルの娘のカオルさんたちはどうしました。いまの話では行き違いになったらしいが、今どこにいるのですか」

「ああそのことや。実はドクトルからも尋ねられたことやけれど、

娘はんとあの上原山治という許いいなずけ婚は、ドクトルが居らへんも
んやさかい、こつちへ来たついでやいうて、いま九州の方かどつ
かへ旅行に出とるのんや。帰りにきつと本署へ寄るといふ約束を
したんやさかい、そのうち寄るやろ思うてるねん」
「ほほう、そうですか」

だいせんりつ
大戦慄

非常警戒の夜は、張り合いのないほど静かに更ふけていった。蠅

男はどこにひそんでいるのか、コトリとも音をたてない。ドクトルの騒ぎが、最後の活気であるかのよう^にに思われた。

この調子なら、蠅男もこの一画に閉じこめられたまま、あの殺人宣言はむなしく空^{くうぶん}文に終わってしまうことかと思われた。

正木署長が呼ばれて、交番の方へ歩いていった。

しばらくして、署長はトコトコと元の位置へ帰ってきた。

「どうかしましたかネ」

帆村は退屈さも半分手つだつて、署長に声をかけた。

「いや、行きちがいの話だね」

「ははア、行きちがいの話ですか。じゃあそこまで行ってどうも御苦労さまというわけですか」

「まあそんなものや。つまり村松検事さんのところへ、塩田先生からの速達が来たという話やねん。今夜十時までには、堂島さんの法曹クラブに訪ねてきてくれというハガキや」

「村松さんはもう行ったじやないですか」

「そうや。そやさかい、行きちがいや云うとるねん」

「しかし速達はギリギリに着いたですね。もうかれこれ九時ですよ」

二人の会話は、そこでまたもや杜^{とぎ}切れてしまった。帆村は次第につのり来る寒さに、外套の襟を深々とたて、あとは黙々として更けてゆく夜の音に、ただジツと耳を澄ましたのだった。

おお蠅男は、どこに潜^{ひそ}んでいる？

こうして頤紐あごひもをかけた大勢の警官隊でもって、大阪きつての歓楽の巷である新世界と大阪一の天王寺公園とを冬の陣のようにとりかこんでいるが、蠅男とお竜とはもういつの間にか、この囲みをぬけてどこかへ逃げてしまったのではないか。

全く神出鬼没しんしゆつきぼつの怪漢蠅男のことだから、容易に捕る筈がない。しかもこの界限かいわいは、人間の多いこと、抜け裏の多いことで大阪一の隠れ場所だ。いまに活動や芝居がはねて、群衆が新世界からドツと流れだしたときには、警官隊はどうしてその夥おびただしい人間の首実検をするのであろうか。恐らく蠅男は、その閉場はねの時刻を待っているのであろう。

怪漢蠅男ほど頭の働く悪人は聞いたことがない。彼奴はすこぶ

るの知恵者であり、そして云ったことを必ず実行する人間であり、そして人一倍の見栄坊だ。彼はどうしても今夜のうちに、異常なセンセーションをひき起す殺人を実演してみせるに違いない。だからこの一画のなかに縮こまっているなんて、そんな筈がないのだ。

その蠅男と、彼帆村とは、きようはじめて口を利きあつた。それは電話でのことであつたが、特筆大書すべき出来ごとだった。

糸子をかえしてよこして、彼に探偵を断念しろというところなんか、実に凄いい脅迫である。彼は今、やっぱり探偵根性をもつて、蠅男のあとを嗅ぎまわっているが、これが蠅男に知れずにはいない。そのときこそ、彼は一大決心を固めなければならぬ。蠅男

の知恵には、さすがの彼も全く一步どころか数歩をゆずらなければならぬ。

こうしているうちにも、蠅男は誰かの胸もとに鋭い刃をジリジリと近づけつつあるのではあるまいか。殺人宣告書は誰がもっているのか分らないが、一体誰が殺される役まわりになっているのだろうか。

そのとき帆村は、まっさきに心配になるものを思いだした。彼は急に機械のまわりだした人形のように、トコトコ歩きだした。

彼は交番へ入った。そして電話で、宝塚のホテルに詰めている大川司法主任をよんでもらうように頼んだ。

「モシモシ、こっちは大川です。なんの用ですかいな」

帆村はその声を聞いて、胸を躍らせた。彼はその後の蠅男の事情を報告して、もしや糸子のところに死の宣告書が来ていないかを尋ねた。

「それは大丈夫だす。そんなものは決して来てえしまへん。安心しなはれ」

大川主任はキツパリ答えた。

帆村は安心をして電話を切ったが、しかしまた新たなる心配が湧き上ってきた。

「誰かが、死の宣告書をつきつけられているのに違いない。その人は何かの理由があつて、そのことを警察に云つてこないのではないか。早く云つてくれれば助けられるかも知れないのに……」

そんなことを考えつづけているときだった。霞町かすみちようの角を曲つて、こつちへ進んで来た自動車が、ピタリと停つた。

誰だろうと見ると、なかからヒヨイと顔を出したのは余人ならず鴨下ドクトルの鬚面であつた。

「正木さん、オイ正木さんは居らんか」

ドクトルは住吉署長の名をしきりと呼んだ。

なにごとだろうと、正木署長は自動車のところへ駆けつけた。

「おお正木さん。ねえ、冗談じゃないよ。君たち、こんなところで非常警戒していても何にもならせんよ。蠅男はすでにさつき現われて、儂の大切な友人を殺し居つたぞ」

「えッ、蠅男が現われたと……」

誰も彼もサツと顔色をかえた。

「誰が殺されたんです」

帆村が反問した。

「殺された者か。それは儂の友人、塩田律之進じゃ。それはまだいいとして、殺したのは誰じゃと思う」

「蠅男ではないんですか」

「あれが蠅男なんだろうな」ドクトルは小首を傾け、

「とにかく捕ったその蠅男は、さつき儂と一緒に車の車に乗っていた村松という検事なんじゃ」

「ええッ、村松検事が……」

「塩田先生を殺したというのですか」

「そして検事が蠅男だとは、まさか……」

一同はあまりのことに腰を抜かささんばかりに愕いた。村松検事があの恐るべき蠅男だったとは、誰が信じようか。しかしドクトルの言葉は、出鱈目を云っているとは思われない。どこかに間違いがあるのであろう。一体どこが間違っているのか？

間違っていないことは、帆村にいったとおり、それが誰にもせよ「蠅男」が今夜もキツパリ人を殺したということ！

法曹クラブの殺人

村松検事は、果して恐るべき殺人魔「蠅男」なのであろうか？
検事を信ずることの篤い帆村探偵は、誰が何といおうと、それが間違いであることを信じていた。しかし何ごとも証拠次第で決まる世の中だった。元の鬼検事正、塩田先生の殺害現場を調べた検察官はまことに遺憾にたえないことだったけれど、村松検事を殺人容疑者として逮捕するしかないのつぴきならぬ証拠を握っていたのであった。

そのときの報告書に記された殺人顛末は、次のような次第であつた。

場所は、大阪の丸の内街と称せられる堂島に、最近建てられた

六階建のビルディングで、名づけて法曹クラブ・ビルというところだった。

当夜午後九時をすこし廻ったとき、人造大理石の柱も美々しいビルの玄関に、一台の自動車が停った。そして中から降りて来たのは一人の鬚の深い老人と、もう一人は黒い服を着た顔色の青白い中年の紳士だった。この老人は、云わずと知れた鴨下ドクトルだったし、黒服の中年紳士は村松検事であった。

二人はボーイに来意をつげた。

ボーイは早速電話でもって、塩田先生に貸してある小室へ電話をかけた。すると塩田先生が電話口に現われて、

「おおそうか。鴨下ドクトルに、村松も一緒について来たのか。

たしかに二人連れなんだネ」

「左様でございます」

とボーイは返事をした。

すると塩田先生は、何思ったか急に言葉を改めて、ボーイに云うには、

「実は、これは客に知れては困るので、君だけが心得て、ソツと知らせて貰いたいんだが……」、と前提して、「その村松という客の前額に、斜めになった一寸ほどの薄い傷痕がついているだろうか。ハイかイイエか、簡単に応えてくれんか」

ボーイはこの奇妙な質問に愕いたが、云われたとおり村松氏の額ひたいを見ると、なるほど薄い傷痕が一つついていた。

「ハイ、そのとおりでございます」

「おおそうかい」と、塩田先生は安心したような声を出して、

「では丁寧な、こつちへお通ししてくれんか」

二人の客は、そこで帽子とオーバーとを預けて、エレヴェーターの方に歩いていったが、そのときドクトルは横腹をおさえて顔を顰^{しか}め、ボーイに手洗所の在^{あり}所^かを聞いた。

そこでボーイが一隅^{ゆびさ}を指すと、ドクトルは村松氏に先へ行くようにと挨拶して、アタフタと手洗所の中へ入っていった。

ボーイは村松氏だけを案内して、六階にある塩田先生の貸切り室へ連れていった。扉をノックすると、塩田先生が自ら入口を開いて、村松氏を招じ入れた。鴨下ドクトルは今手洗所に入ってい

るから、間もなく来るであろうと村松氏が云えば、先生は大きく肯うなずき、そうかそうかといつて、急いで村松氏の手をとり、室内へ入れ、扉をピタリと閉じた。

ボーイは、手洗所から鴨下ドクトルが出て来ない前に、階下へ下りていなければならぬと思つたので、エレヴェーターを呼んで、スーツと下に下りていった。

約七、八分の間であつたと、ボーイは後に証言した。ボーイが、手洗所から出てきた鴨下ドクトルを案内して、再び塩田先生の室の前に立ったまでの時の歩みを後から思い出してみると、――

その七、八分という短い時間のうちに、塩田先生の室には大変なことが起つていたのだつた。それとも知らぬボーイは、室の扉

をコンコンとノックした。

しかるに、室のなかからは、何の返事もない。聞えないのかと思つて、もう一度、すこし高い音をたててノックしたが、やはり返事がない。

「オイ、どうしたんじや。お前は部屋を間違えとるんじやないかしつかりせい」

と、気短かの鴨下ドクトルは、ボーイを呶鳴りつけた。

ボーイは、そういわれて、室番号を見直したが、たしかに間違いない。室内には、電灯が煌々こうこうとついている。六階で電灯のついているのは、そんなに沢山あるわけではない。どうしてもこの室なのに、塩田先生と村松氏は、一体中で何をしているのだろう。

ボーイは把手をつかんで、押してみた。

だが、扉はビクともしない。内側から鍵がかかっているのだつた。

「変だなア。モシモシ、お客さん——」

と、ボーイは大声で呶鳴りながら、扉を激しく叩いた。

すると、扉のうちで、おうと微かに返事をする者があつた。

ボーイはホツとして、鴨下ドクトルの顔を見上げた。ドクトルは鬚だらけの顔のなかから、ニヤニヤと笑っていた。

やがて扉の向うで、鍵の廻る音が聞いた。そして扉がギーツと内に開いて、顔を出したのは村松検事だつた。だが彼の顔は、血の気を失つて、まるで死人のように真青であつた。

検事は、ブルブルふる指先で室内を指し、

「殺人事件がおこつたんだ。ボーイ君。そこらにいる人を大声で呼びあつめるんだ。それから、鴨下ドクトル。すみませんが、どこかそこらの室から電話をかけて、警察へ知らせてくださいらんか」

村松は、やっとそれだけのことを云つた。ボーイは、扉ごしにチラリと室内を見やつた。絨じゅうたん毯の上に、大きな人間の身体が

血まみれになつて倒れているのが明るい電灯の下によく見えた。彼はドキンとして、腹の中から自然に声がとび出した。

「おう、人殺しだッ。皆さん早く来て下さいッ」

引かれゆく殺人検事？

電話で知らせたので、警察からは係官が宙をとんで駆けつけた。惨劇の室内に入ってみると、そうも広くないこの室は、なまぐさい血の香で噎むせぶようであつた。

塩田先生は、脳天をうち砕かれ、上半身を朱に染めて死んでいった。これが曾かつて、鬼検事正といわれ京浜地方の住民から畏敬されていた塩田律之進の姿なのであろうか。それはあまりにも悲惨な最期だつた。

係官の取調べが始まつた。

塩田先生が殺害された当時、この室のうちに誰がいたか。

それは外でもない。村松検事只一人だったことを証明する者が
沢山居た。

ボーイも証言した。鴨下ドクトルも、もちろん同意した。階下
の事務所にいて、塩田先生のところへ電話をかけたボーイ長もそ
れを否定しなかった。鴨下ドクトルが手洗所に入り手洗所から出
てくるのをみていた、女事務員たちの中にも、それに異議をいう
者がなかった。

「どうです、村松さん。これについて何か云いたいことがありますか」

当直の水田検事が、気の毒そうに、この先輩にあたる村松に訊

いた。

「……」

村松は物を云うかわりに、首を左右に振って答えた。口を開く気力もないといった風であった。

「では村松さん。貴方はここに死んでいる人を殺した覚えがありますか」

村松は、更に無言のまま首を左右にふった。

「では、この人は、どうしてここに死んでいるのです」

村松はやはり黙々として、かぶりを振った。

「検事はん。血まみれの文鎮についとった指紋が、うまく出よりました。これだす」

そういつて、鑑識課員が、白い紙に転写した指紋と、凶器になった文鎮とを差出した。

「それから、ちよつと村松氏の指紋を取つてくれ」

「えッ、村松はんのをでつか」

鑑識子はオズオズと気の毒な容疑者村松検事の顔と、命令する水田検事との顔を見くらべた。それを聞いていた村松検事は、無言のまま、右手を前につきだした。ああその手、鑑識子の前に拵げられた村松の掌には、赤黒い血がベツトリとついていた。

鑑識子は物なれた調子で、村松の指紋を別の紙の上に転写して、差出した。

「どうだネ、この両方の指紋は……」

水田検事の声は、心なしか、すこし慄えふるを帯びているようであった。

鑑識子は、命ぜられるままに二枚の紙にうつし出された指紋を、虫眼鏡の下にジツと較べていたが、やがて彼の額には、ジツトリと脂汗が滲みだしてきた。

「どうだね。指紋は合っているか、合わないか」

「……同一人の指紋でおます」

鑑識子は苦しそうに応えて、ハンカチーフで額の汗を拭いた。

水田検事は、それを聞くと、傍わきを向いていった。

「村松氏を、殺人容疑者として逮捕せよ」

村松氏の手首には痛々しく捕縄がまきついた。曾ては、蠅男の

捜査に、係官を指揮していた彼が、今は逆に位置をかえて、殺人容疑者として拘禁される身となった。

疑問の怪人「蠅男」を捕えてみれば、それは人もあろうに「蠅男」捜査の指揮者であつた村松検事であつたとは。其の場に居合させた人々は、事の意外に声もなく、ただ呆れるより外なかつたのである。

村松検事に世話になつていた人たちは、水田検事の取調べに対して、もつといろいろ反駁してくれることを冀^{ねが}つていた。しかるにこの人たちの期待を裏切つて、村松検事はほとんど口を開かなかつたのである。

なぜ村松は、多くを喋らなかつたのであろう。彼は凶器と断定

せられる文鎮の上に、自らの指紋がついているのに気がついて、もう何を云つても脱れぬところと、殺人罪を覚悟したのであるか。それとも何か外に、喋りたくない原因があつたのであろうか。関係者たちに、ひとまず休憩が宣せられ、容疑者村松検事は別室に引かれていった。

現場では、無慚な最期をとげた塩田先生の骸なきの上に、カーキ色の布がフワリとかけられた。

水田検事の一行は、予審判事と組んで、惨劇の室のうちに、いろいろと証拠固めをしてゆくのであつた。

丁度その半ばに、急を聞いて、帆村探偵や正木署長たちが駆けつけた。

いくら村松検事の味方が駆けつけたとて、犯行は犯行であつた。水田検事から詳しい説明がのべられると、村松検事の無罪説を信じていた帆村たちも、それでも村松検事は塩田先生殺しに無関係であるとはいえなかつた。

(しかし、これは何か大きな間違いがあるのに違くない)
帆村はあくまでそれを信じていた。

でも、内部から鍵をかけた密室の殺人事件——塩田先生は文鎮で脳天をうち砕かれ、村松には凶器である文鎮を握っていた証拠がある。窓は内から鍵こそ掛つていながつたが閉つていたそうである。もし窓が明いていたとしても、誰が窓の外から侵入して来られるだろう。なにしろこの法曹クラブ・ビルというのは、スベ

スベしたタイル張りの外壁をもつて居り、屋上には廂ひさしのようなものが一間ほども外に出ばつていたし、人間業わざでは、到底とうてい窓の外から忍びこむことが出来そうもなかつた。

すると、村松検事の犯行でないという証明は、ちよつと困難になるわけだつた。

帆村は、水田検事に頼んで、村松にひと目会わせてくれるように頼んでみたけれど、この際のこととて、それもあつさり断られてしまった。

死闘宣言

帆村探偵は、彼をしきりと慰めてくれる正木署長とも別れ、ただひとり附近のホテルに入った。

糸子の泊っている宝塚ホテルへ帰ろうかと思わぬでもなかったけれど、それよりは村松検事の身近くにいた方が、なにか便利ではないかと思つたからだ。

「どうすれば、村松さんを救いだせるだろうか」

冷たい安ホテルの一室の、もう冷えかかったラジエーターの傍に椅子をよせて、帆村はいろいろと、これからの作戦を考えつづけた。だが一向に、これはと思つうまい考えも浮んで来なかつた。

そのうちに彼は、コクリコクリと居眠りを始めた。昼間の疲れが、ここで急に出て来たのであろう。

ガタリ。

突然大きな音がして、帆村はハッと眼ざめた。どうやら廊下の方から聞えたらしい。

深夜の怪音の正体は何？ 何者かが廊下の窓を破つて、ホテルのなかに忍びこんでくるようにも感じられた。

帆村は素早く室内のスイッチをひねって、室内の灯りを消した。それからポケットからピストルを出して手に握ると、人口の扉の錠を外した。そして床に腹匍はらばいせんばかりに跣かかんで、扉をしずかに開いてみた。もし廊下に何者かの人影を見つけたら、そのとき

はピストルに物を云わせて、相手の足許を射抜くつもりだった。

「なアんだ。誰もいやしない」

廊下には、猫一匹いなかった。それでも彼は念のため、廊下に出て、窓を調べてみた。窓には内側からキッチンと錠が下りていた。しかし窓はしきりにガタガタと鳴っていた。真暗な外には、どうやら風が出てきたらしい。帆村はホツと息をついて、自分の部屋に帰っていった。

風は目に見えるように次第に強くなり、ヒューツと呻り声をあげてひさし廂を吹きぬけてゆくのが聞えた。

こうしてひとりしていると、まるで牢獄のうちに監禁されたまま、悪魔が口から吐きだす嵐のなかに吹き飛ばされてゆくような心細

さが湧いてくるのであった。

チリチリチリ、チリン。

突然、電鈴ベルが鳴った。電話だ。

それは夢でも幻想でもなかった。たしかに室内電話が鳴ったのである。深夜の電話！ 一体どこから掛ってきたのであろう。

帆村は受話器をとりあげた。

「帆村君かネ」

「そうです。貴方は誰？」

帆村の表情がキツと硬ばり、彼の右手がポケットのピストルを探った。

「こっちはお馴染なじみの蠅男さ」

「なに、蠅男？」

蠅男がまた電話をかけてきたのだ。村松検事の声とは全然違う。帆村は、蠅男に対する恐ろしさよりは、この蠅男の電話を、ぜひとも水田検事に聞かせてやりたかった。

「どうだネ、帆村君。今夜の殺人事件は、君の気に入ったかネ」
「貴様が殺^やつたんだナ。塩田先生をどういう方法で殺したんだ。

村松検事は貴様のために、手錠を嵌^はめられているんだぞ」

「うふふふ。検事が縛られているなんて面白いじゃないか」と蠅男は憎々しげに笑った。「どう調べたって、検事が殺つたとしか思えないところが気に入ったろう。口惜しかったら、それをお前
の手でひっくりかえしてみろ。だが、あれも貴様への最後の警告

なんだぞ。この上、まだ俺の仕事の邪魔をするんだったら、そのときは貴様が吠え面ほづらをかく番になるぞ。よく考えてみる。もう電話はかけない。この次は直接行動で、目に物を見せてくれるわ。

うふふふ」

「オイ待て、蠅男！」

だが、この刹那せつなに、電話はプツリと切れてしまった。

神出鬼没とは、この蠅男のことだろう。彼奴は、帆村の入った先を、すぐ知ってしまったのだ。いまの電話の脅し文句も、嘘であるとは思えない。蠅男は宣言どおり、いよいよこれからは直接行動で、帆村に迫ってこようというのだった。帆村はもう覚悟をしなければならなかった。

帆村は奮然ふんぜんと、卓を叩いて立ち上った。

（そうだ。村松検事を救い出す手は外にないのだ。それは蠅男を逮捕する一途があるばかりだ。やれ、村松検事が殺人罪に堕ちた。やれ、糸子さんが蠅男に誘拐された。やれ、今度は誰のところに死の宣告状がゆくか。やれ、どうしたこうしたということに気に懸けているより、そんなことには頓着することなく、一直線に蠅男の懐にとびこんでゆくのが勝ちなのだ。蠅男はそうさせまいとして、俺の注意力が散るよういろいろな事件を組立てて、それを妨害しているのにちがいない。よオし、こうなれば、誰が死ぬとこつちが殺されようと、一直線に蠅男の懐にとびこんでみせるぞ）

今や青年探偵帆村莊六は、心の底から憤慨したようであった。

一体帆村という男は、探偵でありながら、熱情に生きる男だった。その熱情が本当にほとばし迸り出たときに、彼は誰にもやれない離れ業をあ呀ツという間に見事にやってのけるたちだった。今までは、蠅男を探偵していたとはいうものの、その筋の捜査陣に気がねをし、それからまたセンチメンタルな同情心を起して麗人をかばつてみたり、いろいろと道草を喰っていたのだ。ほんぜん翻然と、探偵帆村は勇敢に立ち上った。

(一体、蠅男というやつがいくら鬼神でも、これだけの事件を起して、その正体を現わさないというのは可笑おかしいことだ。今までに知られた材料から、蠅男の正体がハッキリ出て来ないというの

では、帆村莊六の探偵商売も、もう看板を焼いてしまったがいい。うむ、今夜のうちに、何が何でも、蠅男の正体をあばいてしまわねば、俺はクリクリ坊主になって、眉毛まで剃ってしまうぞ。

帆村は眉をピクリと動かすと、何と思つたか、狭い室内を檻に入れられたライオンのように、あっちへ行ったり、こっちへ来たりして気ぜわしそうに歩きだした。

糸子の立腹

帆村探偵は、どんなにして次の朝を迎えたのかしららない。

とにかく彼が、室を出てきたところを見ると、普段から蒼白な顔は一層青ざめ、両眼といえ、兎の目のように真赤に充血していた。よほどの苦勞を、一夜のうちに嘗めつくしたらしいことが、その風体ふうていからして推しおはかられた。

帆村は、すぐさま村松検事の留置されている警察署へゆくかと思いの外、ほか彼はその前を知らぬ顔して、自動車をとばしていった。そして到着したところは、阪急の大駅乗車口であった。

彼はそこで大勢の人をかきわけ、大きな声で宝塚ゆきの切符を買った。

急行電車に乗りこんだ彼は、乱暴にも婦人優先席にどつかと腰

を下ろすや、腕ぐみをして眼を閉じた。そして間もなく大きな軀をかきだすと見る間に、隣に着飾った若奥様らしい人の肩に凭れて、いい気持ちそうに眠ってしまった。

車掌が起こしてくれなければ、彼はもっと睡っていたかも知れない。彼は慌てて、宝塚の終点に下りて、電柱の側らで犬のような背伸びをした。

それから彼は、太い籐とうのステッキをふりふり、新温泉の方へ歩いていった。

でも彼は、新温泉へ入場するのではなかった。彼はその前をズンズン通りすぎた。そして、やがて彼が足早に入っていたのは、池谷医師の控邸だった。それは先に、糸子が訪れた家であり、そ

れよりもすこし前、池谷医師がお竜おぼと思しき女と、肩をならべて入っていった家であった。

入口の扉には、鍵がかかかっていなかった。帆村は無遠慮にも、靴を履いたまま上にあがっていった。何を感じたものか、彼は各室を鄭重に廻つては、押入や戸棚を必ず開いてみた。そして壁や天井を、例の太い洋ステッキ杖でコンコンと叩いてみるのだった。

階下が終ると、こんどは階上へのぼつて、同じことを繰り返した。

でも、格別彼が大きい注意を払ったものもなく、別にポケットへねじ込んだものもなかった。十五分ばかりすると彼はまた玄関に姿を現わした。そして後をも見ず、その邸の門からスタスタと

外へ出ていった。

それから彼は、再び新温泉の前をとおりすぎ、橋を川向うへ渡った。そこには宝塚ホテルがげんぜん厳然と聳そびえていた。彼の姿はそのホテルのなかに吸いこまれてしまった。

大川司法主任は、糸子の室の前の廊下で、朝刊を一生懸命に読みふけているところだった。なにしろその朝刊の社会面と来たら、村松検事の殺人事件の記事で一杯であった。村松検事の大きな肖像写真が出ていて「検事か？ 蠅男か？」と、ずいぶん無遠慮な疑問符号がつけてあった。

「恩師殺しに秘められたる千古の謎！」などというこみだし小表題で、三段ぬきで組んであった。

「ああ帆村はん。これ、なんちゆうことや。儂はもう、あんまり愕いたもんやで、頭脳が冬瓜とうがんのように、ぼけてしもたがな」

そういつて、大川司法主任は、新聞紙の上を大きな掌でもつてピチャピチャと叩いた。

帆村は、それには相手になろうともせず、室の中を指ゆびさして、

「どうです。糸子さんは無事ですかネ」と訊いた。

「もちろん大丈夫ですわ。しかし昨夜も、えろう貴方はんのことを心配してだしたぜ。村松はんのことがなかつたら二人して貴方はんに奢おごって貰わんならんとこや。ハツハツハツ」

大川主任はいい機嫌で哄笑した。

室のなかに入ってみると、糸子はもうすっかり元気を回復して

いた。ただ、まだ麻酔薬が完全にぬけきらないと見えて、いく分
睡そうな顔つきは残っていたが……。

「まあ帆村はん。さっきの夢のつづきやのうて、ほんとの帆村は
んが来てくれはったんやなア」

糸子は、けさがた帆村の夢を見ていたらしく、帆村の顔を見て
小さい吐息をついた。

糸子があつく礼をいうのを、帆村は気軽に聞きながして、

「さあ、ここでちよつと糸子さんに折入って話をしたいことがあ
るんです。皆さん、ちよつと遠慮して下さいませんか」

そういう帆村の申し出に、付き添いのお松をはじめ、看護婦や
警官たちもゾロゾロと外へ出た。扉がピタリと閉って部屋には帆

村と糸子の二人きりとなつてしまった。

帆村は何を話そうというのだろう。時刻は五分、十分と過ぎてゆき、廊下に佇たたずんで待っている人たちの気をいらだたせた。

すると突然、糸子の金切り声が聞えた。扉がパツと明いて、糸子が寝衣ねまきのまま飛び出してきたのだ。

「——帆村はんの、あつかましいのに、うち呆れてしもうた。あんな人やあらへんと思うてたのにほんまにいやらしい人や。さあ、お松。もうこんなところに御厄ごやつかい介になつとることあらへんしい。はよ、うちへいのうやないか」

お松は愕いて、

「まあ、どないしはつたんや。えろう御恩になつとる帆村はんに、

そんな口を利いては、すみまへんで——」

「御恩やいうたかて、あんないやらしい人から恩をうけとうもない。一刻もこんなところに居るのはいやや。さあ、すぐ帰るしい。お松はよ仕度をしとくれや」

何が糸子を憤いきどおらせたのであろうか。あれほど帆村に対し信頼し、帆村に対してかなりの愛着を持っていたと思われる糸子が、何の話かは知らぬが、突然憤いきどおつて帆村を毛虫のように云いだしたんだから、一座もどうこれを鎮しずめていいか分らなかつた。

糸子たちがズンズン仕度をととのえているのを見ると、さつきから室の片隅うすくまにジツと蹲うすくまつていた帆村は、黙々として立ち上り、コソコソと廊下づたいに出ていった。大川司法主任も怪訝けげんな面持

で、帆村の後姿を無言のまま見送っていた。

秘密を知る麗人

その夜、道頓堀をブラついていた人があつたら、その人は必ず、今どき珍らしい背広姿の酔漢を見かけたろう。

その酔漢は、まるで弁慶蟹べんけいがにのように真赤な顔をし、帽子もネクタイもどこかへ飛んでしまつて、袖のほころびた上衣を、何の意味でか裏返しに着て、しきりと瘡かんだか高い東京弁で訳もわからな

いことを嘔鳴りちらしていた筈である。

もしも糸子が、その酔漢の面をひと目見たら、彼女はあまりの情なさに泣きだしてしまうかも知れない処だった。それは外ならぬ帆村莊六その人であったから。

なぜ帆村は、こうも性質ががらりと違ってしまったんであろうか。昨日の聖人は今日の痴漢であった。

村松検事を救う手がないので自暴やけになったのか。蠅男を捕える見込みがつかないで、悲観してしまつたのか。それとも糸子に云い寄つて無下に斥しりぞけられたそのせいであらうか。

道頓堀に真黒な臍へそができた。その臍は、すこしずつジリジリと右へ動き、左へ動きしている。それは場所ちがいの酔漢すいかん帆村莊

六をもの珍らしそうに取巻く道ブラ・マンの群衆だった。

帆村はポケットから、ウイスキーの壺を出して、茶色の液体を
なおもガブガブとラツパ呑みをし、うまそうに舌なめずりをする
のだった。そのうちに、何うした拍子か、喧嘩をおツ始めてしま
った。嵐のような人間の渦巻が起った。帆村は犬のように走りだ
す。その行方にあたつてガラガラガラと大きな音がして、女の金
切り声が聞える。

——帆村は一軒の果物屋の店にとびこむが早いか、太いステツ
キで、大小の缶詰の積みあげられた棚を叩き壊し、それから後を
追ってくる弥次馬に向つて、林檎だの蜜柑だのを手当り次第に抛
げつけだしたのである。生憎あいにくその一つが、折から騒ぎを聞いて

駈けつけた警官の顔の真中にピシヤンと当たったから、さあ大変な
ことになった。

「神妙にせんか。こいつ奴が——」

素早く飛びこんだ警官に、逆手をとられ、あわれ酔払いの帆村
は、高手小手に縛りあげられてしまった。その惨めな姿がこの歓
楽街から小暗い横丁の方へ消えていくと、あとを見送った弥次馬
たちはワツと手を叩いて囃したてた。

それと丁度同じ時刻のことであつたが、本邸に帰った糸子は、
何を思ったものか、突然お松に命じて、宝塚ホテルを電話で呼び
出させた。

「お嬢はん。なんの御用だっか」

「なんの用でも、かまへんやないか。懸けていうたら、はよ電話を懸けてくれたらええのや」

糸子は何か苛いらいら々している様子だった。

宝塚ホテルが出た。

お松がそれを知らせると、糸子とはびつくようにして、電話口にすがりついた。

「宝塚ホテル？　そう、こっちは玉屋糸子ですがな。帆村荘六はんに大至急接つないどくなはれ」

「ええ、帆村はんだつか。いまちよつとお出かけだんね。十二時までには帰ると、いうてでしたが……」

と、帳場からの返事だった。

「まあ、仕様がないう人やなア。どこへ行つたんでつしやる」

「さあ、何とも分りまへんなア」

糸子は落胆の色をあらわして溜息をついた。

「なんぞ御用でしたら、お伝えしときまひようか」

と帳場が尋ねると、糸子は急に元気づき、

「そんなら一つ頼みまつき。今夜のうちに、こつちへ来てくれるんやったら、例の疑問の人物について、私だけが知つとることを話したげます。明日から先やったら、他へ知らせますから、後から恨まんように——と、そういうておくれやす」

そこで話を終り、糸子は電話を切った。

お松は傍で聞いていて、可笑しおかしそうに笑った。

「なんや思うたら、もう帆村はんと休戦条約だつた。ほほほほ」
しかし糸子は、思い切つたことを、帆村に申し入れたものだ。
かねて糸子は蠅男について誰も外の者が知らぬ秘密を握つてい
ると思われたが、いよいよそれを帆村に云う気になつたらしい。
しかもそれを帆村だけに与えるというのではなく、今夜来なけれ
ば、警察の方に知らせてしまうぞという甚だ辛い好意の示し方を
した。まだまだ彼女の帆村に対する反感が残っているらしいこと
が窺うかがわれた。

でも今夜のうちといえ、帆村は果して糸子のもとへ駆けつけ
られるだろうか。それは出来ない相談だった。帆村はいま、暴行
沙汰のため、警察の豚箱のなかに叩きこまれているはずだった。

宝塚ホテルの帳場子は、帆村がそんな目に会っているとは露^{つゆ}知るまい。あたり帆村も、ここへ来て慎みを忘れたがために、折角糸子が提供しようという蠅男の秘密を聞く機会を失ってしまったて、遂にこれまでの苦勞を水の泡^{あわ}沫と化してしまうのだろうか。

怪！ 怪！ 蠅男の正体！

玉屋本邸は、今宵^{こよい}糸子を迎えて、近頃にならない賑やかさを呈していたが、そのうちに午後九時となり十時となり、親類知己の娘さ

んたちも一人帰り二人帰りして、やがて十一時の時計を聞いたころには、五人の召使いの外には糸子只一人という小人数になった。夜は次第に更けるに従って、この広いガランとした邸はいよいよ浸みわたるようなもの寂しさを加えていった。そのうちに、昨日と同じく、風さえ出て、雨戸がゴトゴトと不気味な音をたてて鳴った。

糸子はお松を寢所へ下らせて、彼女は只ひとり、かつて父親総一郎の殺された書斎のなかに入っていた。

「お父つあん——」

糸子は室の真中に立って、今は亡き父を呼んでみた。もちろん、それに応える声は聞かれなかったけれど。

糸子は父が愛用していた安楽椅子の上に、静かにしなやかな体をなげた。そして机の上ののっている「論語詳解」をとりあげると、スタンドをつけて頁をめくっていった。

そのうちに、いつしか糸子は本をパタリと膝の上に落とし、京人形のように美しい顔をうしろにもたせかけて、うつらうつらと睡りのなかに誘われていった。

外はどうやら雨になったようである。

そのときである。

天井裏を、何か重いものがソツとひきずられるような気持ちのわるい音がした。——しかし糸子は、何も知らないで睡っていた。

ゴソリ、ゴソリと、その不気味な物音は、糸子の睡る天井裏を

は
匍いちゆうつていった。何者であろうか。召使いたちも、白河しらかわよふね夜舟の最さ

中いちゆうである見え、誰一人として起きてこない。

危機はだんだんと迫ってくるようである。

するとゴソリゴソリの音がパツタリ停つた。それに代つてコト
リという音が、もつとハツキリ聞えた。それは天井裏についてい
る四角な空気抜きすゐの穴のところで発したものだつた。

そのうちに、なにやら黒いものが、その空気穴のなかから垂れ
下つてくるのであつた。それはだんだん長く伸びて、まるで脚の
ような形をしていた。そのうちに、また一本、同じようなものが
静かに下つて来た。どれもこれも、糸いとのようなもので吊り下げら
れているらしい。

腕のようなものが一本、それからまた一本！　ズルズルとすこしスピードを増して垂れ下がってくる。

この奇怪な有様を、何にたとえたらいいであろう。もしこの場の光景を見ていた人があつたなら、この辺でキャツといって気絶してしまいかも知れない。

——黒い外套のようなものが、フワリと落ちて来た。それにつづいて、穴からヌツと出てきたのは、意外にも人の首だった。見たこともない三十がらみの男の首で、眼をギョロギョロ光らせている。見るからに悪相をそなえていた。

その首はスーツと穴から下に抜けた。それにつづいて肩が出て来るのであろうか。しかしあのような六、七寸の穴から、肩を出

すことは難かしいであろうと思われた。

しかるに首はスーツと床の上めがけて落ちていく。首のうしろにつづいているのは、男枕を二つ接ぎあわせたようなブカブカした肉魂。——それでお終いだった。

首と細い胴の一部だけの人間？

それでも、その人間は生きていたのであるか？

ドタリと床の上に痩せ胴のついた首が落ちると、それを合図のように、始めに床の上に横たわっていた長い手や足やが、まるで磁石に吸いつく釘のようにキキツと集まって来た。

やがてムツクリと立ち上ったところを見れば、これぞ余人ではなく、有馬山中を疾風のように飛んでいったあの蠅男の姿に相違

と、突然大音声があがったと思う途端、寢台の陰からとび出して来た一個の人物！ それは誰であつたらうか？ 警察の豚箱に監禁せられて熟柿じゆくしのような息をふいているとばかり思っていた青年探偵、帆村莊六の勇氣凜りんりん々たる姿だつた。蠅男は無言で後をふりむいた。

「うふ。——いいところへ来たな。俺の正体を見たからには、最早はや一刻も貴様を活かしては置けねえ。覚悟しろッ」

「なにをッ。——」

鬼神「蠅男」と探偵帆村とは、何も知らずに睡っている糸子を間に挟んで、物凄く睨にらみ合つた。

風か雨か、はた大噴火か。乾坤けんこん一擲いつてきの死闘を瞬前にして、

身構えた両虎の低い呻り声が、次第次第に高く盛りあがってくる。

死闘

獣か人か。

怪物蠅男の身体は首の付いた痩せ胴とバラバラの手足から組立てられて居たとは、実に前代未聞の一大驚異である。

この蠅男の身体に関する秘密は、まだ十分了解することが出来

なかつたが、決死の青年探偵帆村莊六は脳底から沸き起ろうとする戦慄せんりつを抑えつけて、げんぜん 厳然とこの大怪物と睨み合っている。

傍らの椅子には、これまた絵に描いたような麗人糸子が膝に伏せた本の上にすんなりとした片手を置いて、何ごとも知らず安らかに眠っている。どうやら糸子は帆村の命令に従って睡眠剤のを飲んでいるらしかった。もちろんそれは帆村のやさしき心づかいで、この場の異変にこれ以上彼女の繊細な神経を驚かせたくないという心づかいであつたに違いない。

怪物蠅男は、見るもいまわしい土色の面に悪鬼のような炯炯けいけいたる眼を光らかし、激しき息づかいをしながら、部屋の隅からじりじりと寝台の向うに立つ帆村探偵に向つて近付いて来るのである。

った。

雨か嵐か、はた雷鳴か。怪人と俠青年との息詰まるような睨み合いが続いた。

「勝負は貴様の負だツ。こうなれば観念して、いさぎよ潔く降参しろツ」と帆村探偵は烈々たる言葉を投げつけた。

「なにを言やがる」と蠅男は齒を噛みならし、

「手前こそ息の止らねえうちに、念仏でも唱えろツ。今度こそは手前の土手ツ腹を機関銃で蜂の巣のようにしてやるんだツ。それでもまだ助かるとでも思っているのか」

そう云つて蠅男はじりじりと前進し、垂れている左腕を静かに挙げて、帆村の胸元目がけて突き出した。それは黒光りのする腕

のようでありながら、まるでぎこちない銃身のように見えた。

「ははあ、くくり付けの機関銃とお出でなすったね。そんなインチキ銃に撃たれてたまるものか」

「よオし、これを喰って往生しろッ」

と蠅男の大^{だいかつ}喝と共に長い黒マントの肩先がブルブルと痙^{けいれん}攣するより早く、ダダダツと耳をつん裂くような激しい銃声！

「うぬッ——」

帆村はさつと寝台の蔭に身を沈めた。——と見るよりも早く、蠅男の隙を狙って寝台の下からパツと投げつけた渋色^{とあみ}の投網！

網は空間に花火のように開いて、蠅男の頭上からバツサリ落ち掛ったが、蠅男もさるもの、不意を打たれながらもツツと身

を引けば、網はかちりと蠅男の左腕の中に仕込まれた機関銃に絡み付いた。から

「生意気なツ——」

と蠅男が気色ばむ所を帆村はすかさず、

「えいッ」

と大声もろともすかさず投げ付けた丈夫な撚り麻よの投縄——それが見事蠅男の左腕の中程をキリリと締め上げた。

「さあ、どうだッ」

と帆村は歓声をあげ、気を外さず麻縄の端を寝台の足に通して、それを支えに満身の力を籠めてえいやツと引けば、流石の蠅男も思わずツツと前にのめろうとするのを、ウムと堪えて引かれ

まいと、反り身そになつて抵抗するうち、どうしたはずみかドーンと云う大きな響きを打つて蠅男の左腕は肩の附根からすつぽり抜け落ち床の上に転がった。

「あッ、しまった——」

と蠅男が鉄の爪を持った残りの右腕を伸ばして床の上の抜けた左腕を拾おうとするのを、帆村はそうさせてはなるものかと寝台の上をヒラリと飛び越し、隠しもつていた桑の木刀でヤツと蠅男の頤あごを逆に払えば、

「ギヤツ」

とさしもの蠅男も痛打にたまらず、と床上どうに大の字になつて引繰り返つた。闘いは帆村の快勝と見えた。

「おとなしくしろッ」

と帆村は蠅男のうえに馬乗りになり、いきなり相手の咽喉をグツと締め付けた——それがよくなかった。蠅男にはまだ人間放れのしたものの凄く頑強な右腕の残っていたことを忘れていたのだ。

キリキリキリと怪音を立てて蠅男の右腕が起重機のように三米メートルばかりも伸びたかと思うと、それが象の鼻のようにくるくるツと帆村の背後に曲つて来て、大きな鋏のような鉄の爪が帆村の細首目掛けてぐつと襲い掛らんとする——あッ、危い！

糸子は先程から目を醒ましていた。いくら強い睡眠剤でも、部屋の中で機関銃を撃たれては眠つても居られない。彼女は突然目の前に展開しているもの凄く死闘の光景に吞まれて、魂を奪われ

た人のように呆然と成行を眺めて居たのである。しかし今愛人帆村の一命に係わる大危機を目の前にしては、どうしてその儘まますく竦んでいられよう。彼女は素早く身边を見廻し、机の上に載って居た亡き父の肖像入りの額面を取上げるより早いか二人の方に駆け寄り蠅男の顔面目掛けて発止はっしと打ち下ろした。

「うむッ。——」

と蠅男は呻り声を挙げ、帆村の背後に伸びようとした鉄の爪がわなわなと虚空を掴んだ。

「糸子さん、危いからどいていらっしやい」

帆村は糸子に注意をした。そこに一寸の隙があつた。それを見逃すような蠅男ではなかつた。

「えいやツ——」

と蠅男は腹の上に乗っていた帆村を下から座蒲団か何かのよう
にどんと跳ね飛ばした。

あつと云う間に帆村は宙を一転して運よく寝台の上に叩き付け
られたが、若しそこに柔い寝台が無かったら帆村の両眼はぼんぼ
ん飛び出していたかも知れない。

帆村はくらくらする頭を押えて、撥人形のように寝台を飛び降
りた。この時素早く起き直った蠅男は右手を伸べて傍らかたわのガラス
窓を雨戸越しにバリバリと破り、その穴から化け蝙蝠こうもりのように
ヒラリと外へ飛び出した。

帆村が続いて外に飛び出して見ると、蠅男は何処へ行ったもの

か影も姿もなく、戸外には唯ひつそり閑かんとした黒暗こくあんあんたる闇ばかりがあつた。

帆村の奇略

その翌朝のことであつた。一夜を糸子の家に明かした帆村は、暁を迎えて昨夜の蠅男との恐ろしい格闘を夢のように思った。

全く生命がけの争闘であつた。こちらもたつた一つしかない生命を賭け、怪物蠅男も亦その時は死にもの狂いで立ち向つたのだ

つた。麗人糸子さえ、男子に優るとも劣らないような覚悟を以て死線を乗り越えたのだ。隙間を漏るる風にも堪えられないような乙女をして、こうも勇敢に立ち向わせたものは何か。それは云うまでもなく、乙女心の一筋に彼女の胸に秘められたる愛の如何に熾烈なるかを物語る以外の何ものでもなかった。

「帆村はん。もうお目醒め——」

と麗人糸子は、しよすい憔悴した面にみだしな身躰みの頬紅打って、香りの高い煎茶の湯呑みを捧げ、帆村の深呼吸をしているバルコニーに現われた。

「やあ、貴女ももうお目醒めですか。昨夜は若しあなた貴女が居なかつたら、僕はこうして夜明けの空気など吸っていられなかつたでし

よう。うんと恩に着ますよ」

「まあ、なに言うてだんね。帆村はんこそうちのため何度も危ない目におうてでして、どないにか済まんことやいつも手を合わせて居ります。こないに帆村はんを苦しめるくらいやったら、うちが蠅男に殺されてしもうた方がどのくらいましやか知れへんと思うて居ります」

「何を仰有るのです。まだ蠅男との戦いは終つて居ないではありませんか。そんな弱気を出しては、貴女のお父さんの仇敵かたきはとても打てませんよ」

と帆村はさり気なく糸子の言外の言葉を外して、ただ一筋に彼女を激励した。糸子はあとは黙つて、伏目勝ちに帆村の傍で空に

なつた盆を頻りに撫でて居た。今更説明する迄もあるまいが、昨夜蠅男を糸子の邸に誘い込んだのも総て帆村の計略だった。彼は蠅男と決戦をする為に態とそう云う機会を作つたのだった。最初宝塚ホテルで糸子に「いやらしい人」と腹を立てるよう頼んだのも帆村の計略だった。それから糸子が後ほどホテルの帳場に「帆村さんが帰つて来たら蠅男の秘密を言うから来て呉れ」と嘘を言わせたのも彼の計略、それから帆村がウイスキーに酔払つて道頓堀で乱暴を働き豚箱に打込まれたのもその計略だった。そこで帆村は、親しい正木署長を呼んで貰つて事情を話し、留置場を出して貰うと直ぐに糸子の邸に隠れて、蠅男を迎える準備にかかった。宝塚ホテルの電話は屹度蠅男の耳に入るに違いないことは、それ

迄の例で分つて居たから、それを知れば蠅男はその夜のうちに彼の秘密を知つて居ると云う糸子の寢所を襲うだろうとは予期出来ることだった。全くその通りだった。果して蠅男は天井裏を這つて侵入し、そこで書齋内で待期して居た帆村探偵とあの激しい死闘を交えるに至つたものであった。

しかし折角の帆村の奇襲作戦も蠅男の超人的腕力に遭つてはとうすることも出来ず、遂に闇の中に空しく長蛇を逸してしまつた形だ。さて今や怪物蠅男は何処に潜んで居るのだろうか？

唯一つ茲こゝに帆村を心から喜ばせたものは、蠅男の落として行つた機関銃仕掛の左腕であつた。帆村はそれを見せるために、糸子を部屋の中に誘つた。

「ごらんなさい。糸子さん。恐ろしい仕掛のある鉄の腕です。こ
つちを引張れば、生きた腕と全く同じように伸び縮みをするし、
こう真直にすれば、機関銃になるんです。まだあります。ほらご
らんなさい。弾丸たまの代りに、こんな鋭い錐きりが吹き矢のようにとび
だしもするし、その外ちよつと重いものなら、ここにひっかけて
パチンコかなどのように撃ちだせる。——」

帆村は不図ふと気がついて顔をあげた。糸子が嗚咽おえつしているのだっ
た。

「どうしました」といったが、そのとき帆村はハツと気がついた。
「そうだ、この錐なんですよ、あなたのお父さまの生命を奪った
のは……」

糸子はそれに早くも気づき、哀しい追憶に胸もはりさけるようであったのだ。帆村はいろいろと彼女を慰めることにひと苦労もふた苦労もしなければならなかった。

実は帆村は、まだそれ以上の蠅男の凶器を知っていた。それはその抜け腕の或るところに大豆が通り抜けるほどの穴が腕に沿って三、四個所も明いていたが、ここには元、鉄の棒が入っていたのだ。その棒は彼が拾ってもっていた。あの宝塚の雑木林の中で拾った先端にギザギザのついたあの棒である。あのギザギザは、蠅男が左腕を長く前に伸ばすときに、ちょうど折畳式の写真機の脚をのばすような具合に腕の中からとび出してくる仕掛になっていることに今になって気がついたのである。あの林の中で、蠅男

は不注意にも、あれの脱けおちたのに気がつかなかつたのだった。しかしあの鉄の棒を拾ったときに、まさかこんな奇怪なカラクリが蠅男の腕にあらうとはさすがの帆村探偵も気がつかなかつた。考えれば考えるほど恐ろしい怪物だった。

一体このような恐ろしい怪物がどうして生れたんだろう？ それにはちよつと解くことのできない深い謎だった。

帆村は蠅男の左腕を前に置いて、ジツと深い考えに沈んだ。それからそのいつもの癖で、彼はやたらに^{たばこ}莩を吸つて、あたりに莩の灰をまきちらした。

「うむ、そうだった」と、何事かに思いあたつたらしく彼は突然^{つぶや}呟いた。「これはやはり、蠅男がこれまで通つてきた道を、はじ

めからもう一度探し直してみる必要がある。蠅男が最初名乗りをあげたのは何処だったか。それは無論鴨下ドクトルの留守中、その奇人館のストーブの中に逆さに釣りさげられていた焼屍体に発しているんだ。あのとき蠅男は、新聞紙を利用した脅迫状に、はじめ（蠅男）と署名をしたのだった。第二の犠牲者は玉屋総一郎、第三の犠牲者は塩田元検事と、ちゃんと身柄が判明しているのに、ああそれなのに奇人館に発見された焼屍体の身許が今日もなおハッキリしていないのは変ではないか。すべて連続的な殺人事件には、必ず何か共通の理由がなければならぬ。蠅男はなぜ三人の人を殺したか。そうだ。その殺人の理由は第一の犠牲者の身許がハッキリさえすれば、ある程度解けるにちがいない。うむ、

よ才し。それを知ることが先決問題だ。では、これから奇人館に行き、鴨下ドクトルに逢つて、手懸りを探しだそう」

帆村珠偵は、何かに憑つかれた人のように血相かえて立ち上ると、それを心配して引きとめる糸子の手をふりはらつて、外へとびだした。

果して彼は奇人館に於て、何を発見する？

大戦慄

帆村探偵が、住吉区岸姫町の鴨下ドクトル邸を訪れてみると、その階下したの応接室には、先客が三人も待つていた。それは大阪へ来たついでに楽しい近県旅行をしていたドクトルの一人娘カオルと情人上原山治と、外に正木署長との三人だった。カオル達は、約束どおりに、帰阪するとすぐさま署へ出頭し、そこで此の前は不在だった父親ドクトルに連れ立って会いにきたものであることが分った。

帆村の名刺も、雇い人の手で二階の研究室にいるドクトルに通じられたが、その返事は、逢うには逢うが、いま実験の途中で手が放せないから暫く待つていてくれとのことだった。

「カオルさんは今度お父さまにまだひと目も会っていないのです

か」

と、帆村は座が定まると、ドクトルの令嬢に尋ねた。

「さつきチラリと廊下を歩いている父の後姿を見たばかりですわ」
「そうですね。幼いときお別れになったきりだそうですが、お父さまの姿には何か見覚えがありましたか」

と問えば、カオルは首飾りをいじっていた手をとめ、ちよつと首をかしげて、

「どうもハッキリ覚えていませんのですけれど、幼いときちいさあたくしの見た父は、右足がわるくて、かなりひどく足をひいていたようです。今日廊下で見た父は、それほど足が悪くも見えなかった。たので、ちよつと不思議な気がいたしましたわ」

「ほうそうですね。ふうむ」

と、帆村は腕組をして考えこんだ。

そのとき正木署長のところへ電話がかかってきたとかで、雇いに案内されて出ていった。が、すぐ署長はとつてかえして、急用が出来たから署へ帰る。しかしすぐまた此処へ出直すから後をよろしくと帆村にいつてアタフタと出掛けていった。

あとは三人になった。

「するとカオルさん。貴方はなにかお父さまの身体についていた痣とか黒子とか傷痕とかを憶ほくろえていませんか」

と、何を思ったものか帆村はさきほどから熱心になって、カオルに話しかけたのであった。

「さあ、そうでございますネ」とカオルはしきりと古い記憶を呼び起そうと努力していたが、「そうそう、あたくし一つ思い出しましたわ」

「ふうむ。それは何ですか」

と、帆村は思わず膝をのりだした。

「それは——」

とカオルが云いかけたとき、雇い人が急いで室内にはいつてきて、ドクトルがこれから二人に会うからすぐに二階へ来てくれと伝言をもってきた。カオルは遠^{さす}がにパツと眸^{ひとみ}を輝かし、十五、六年ぶりに瞼の父に会える悦びに我を忘れているようであった。

カオルと山治とが席を立って、二階へ上っていくのを見送った

帆村は、ただ一人気をもんでいた。若き二人をドクトルの部屋にやるのがなんとなく非常に不安になってきた。といつて、呼ばれもせぬ彼が、後から追いかけてゆくのも変である。帆村はイライラしながら、全身の注意力を耳に集め、なにか階上から只ならぬ物音でも起りはしないかと、扉のかげに寄り添い、聞き耳たてていた。

一分、二分と経つてゆくが、何の物音もしない。これは自分の取越苦労だったかと、帆村が首を傾けた折しも、「帆村はん。先生が二階でお呼びだつせ。すぐ会ういうてはります」

と、三度雇い人が、室内に入ってきた。帆村はハツと思つたが、強いて平静を装い、先に案内に立たせ、二階へ上つていった。

「よう、帆村荘六君か。大分待たせて、すまんかったのう。さあ、こつちへ——」

と、黒眼鏡をかけ、深い髯の中に埋った鴨下ドクトルの顔が、階段の上で待っていた。帆村はドクトルのその声の隅に、何処か聞き覚えのある訛りなまを発見した。

ドクトルは帆村を案内して、書齋のなかに導き入れた。帆村はその部屋の中を素早く見廻して、先客である筈の二人の若き男女の姿を求めたが、予期に反してカオルの姿も山治の姿も、そこには見えなかった。

ドクトルは入口の扉をガチャと締めながら、

「まあ、そこへお掛け。きようは何の用じやな」

と、皺しやが枯れ声でいった。

帆村は、中央の安楽椅子の上にドツカと腰を下ろし、腕組をしたら、

「きようは一つ貴方に教えていただきたいことがあつて参つたのです」

「十二儂に教えて貰いたいというのか。ほう、君も老人の役に立つことが、きよう始めて分つたのかな」

「その老人のことなんですよ」と帆村は薄笑いさえ浮べて、

「つまり鴨下老ドクトルを階下のストーブの中で焼き殺した犯人は誰か？ それを教えて貰いたい」

「何を冗談いうのじゃ。鴨下ドクトルは、こうして君の前に居る

じやないか。血迷うな。ハツハツハツ」

生きている鴨下ドクトルに、鴨下ドクトル殺しの犯人を尋ねるといふのは狂気の沙汰だった。帆村探偵は遂に逆上をしたのであろうか。

「言うなツ」と帆村は大喝してドクトルを睨にらみつけた。「なんだ、その貴様の左腕は何処へ置き忘れて来たのだツ」

「呀あツ、こいつを知られたかツ」

と、ドクトルはブラブラの左腕の袖を後に隠したが、もう遅かった。

「さあどうだ、蠅男！ 化けの皮を剥いで、両手をあげろツ。無い方の手も一緒に挙げるんだ」

と、ピストルを擬して帆村は無理なことをいう。

「うわッ、はッはッ」

と、蠅男は附け髯のなかから哄笑した。

「手前こそ、今度こそは本当に念ねんぶつ仏とを唱となえるがいい。この室から一歩でも出てみる。そのときは、手前の首は胴についていないぞ」

蠅男は、大蟹おおがにのような右手の鋭い鋏をふりかざして恐れ気もなく帆村に迫ってきた。

今や竜虎りゆうこの闘いである。悪竜あくりゆうが勝つか、それとも侠虎きやうこが勝つか。生憎あいにくと場所は敵の密室中である。部屋の入口には鍵が懸っていた。

落ちた仮面

「此奴がツ——」

ドドンと帆村は敢然かんぜん引き金を引いた。今や危急ききゆう存亡そんぼうの秋ときだつた……

「うわツはツはツ」

人を喰つた笑い声もろともア—ラ不思議、蠅男の身体がドーンと床の上に仆れるが早い、ガチャガチャと金属の摺れあう音が

して、蠅男の胴と手足がバラバラになった。

「呀ッ！」

と帆村の遡たじろぐ前に、バラバラになった蠅男の五体は、まるでその一つ一つが独立した生き物のように、物凄い勢いでクルクルと床上を匍這いまわり、次第次第に帆村の身近く迫ってくるのであった。勇猛な帆村探偵も、この勝手のちがった相手の攻勢に遭って、手の出し様がなかった。クルクル廻る蠅男の首を狙うべきか、脚を抑えるべきか。

帆村は咄とっさ嗟さにヒラリと安楽椅子の上にとび上った。そして手にしたピストルを下に向けて、ドドドーンと乱射した。

「ぎやッ。——」

と、途端とたんに聞ゆる悲鳴、素破すわピストルの弾丸が命中したかと思つた刹那せつな、傍らの壁に突然ポツカリと丸窓のような穴が明き、蠅男の右腕がまずポーンと飛びこむと、続いて首と胴が、更に鋼条でつながれた二本の義足が、蛇が穴に匍いこむようにゾロゾロツと入ってゆく——。

「こら、待てツ。——」

と、帆村はピストルを其の場になげだし、折しも穴を潜ろうとする蠅男の一本の足に素手で飛びついた。そうはさせじと蠅男の脚は、恐ろしい力で穴の中へ帆村の身体もろとも引張りこもうとする。エイヤエイヤと、とんだところで蠅男と帆村との力較べが始まったが、やがてギーツと奇異な音がして帆村探偵は呀ツと

いう間もなくドーンとうしろにひっくりかえる。

パタンと丸窓の閉まる音。

ムツクリ起き上った帆村の手には、奇妙な物が残った。それは人間の足首そっくりに作られた鋼鉄とゴムとを組合わせた左の義足だった。

帆村は死人のように青褪め、この奇妙な分捕品を気味わるげに見入った。

折よくそこへ、正木署長が一隊の腕利きの警官をひきつれて駆けつけ、扉を蹴破ドアってくれたので、帆村は蠅男の追跡を署長に委せ、彼は暫くの休息をとるために、室内の安楽椅子に腰を下ろして汗をふいた。

「なんとという怪奇！」

帆村は疲労を一本の葎にもとめて、うまそうに紫煙をくゆらせながら、呟いた。今しがたのあの恐ろしい格闘の光景を思い出すと、また急に気が遠くなりそうであった。彼は随分これまで狂暴な殺人犯人にも出会ったが、いくら狂暴でも^{どうもう}獐猛でも、この怪奇なる組立て人間「蠅男」に較べると作り物の大入道ほども恐ろしくはなかった。怪物蠅男の出現は、人間の常識を超えている！

神か、魔か？ どうしてこんな奇異な人間が存在し得るのか？

それにしても、蠅男が鴨下ドクトルに化けていたのを今迄誰も知らなかったとは、なんとという迂濶な^{うかつ}ことだろうか。帆村も、それを真逆今日になって発見しようとは考えていなかった。丁度旅

から帰ってきた鴨下カオルと上原山治と一度会ったとき、不図放
った帆村の質問から、偽にせドクトルの仮面が剥はげはじめたのである。
しかもその話の最中に二人の若き男女は、偽ドクトルに呼ばれて、
この階上に来た筈であるが、怪しくも何処へ行ったものか、影さ
え見えない。帆村はそれを蠅男の狂悪性と結びあわせて、思わず
ブルブルと身慄いを催した。

「こうしちやいられないぞ」

帆村は吸いつけたばかりの二本目の莚を灰皿に捨てて、スツク
と立ち上った。蠅男の正体も調べたいが、若き二人の安危が更に
気に懸る。

彼は書齋を調べて廻ったが、思うようなものにぶつからなかつ

た。そこで廊下に走りでて、両側に並んでいる室々を片っぱしからドンドンと叩いて廻った。

すると、果して一つの部屋のうちから、微かすかではあつたが、人間の呻うめくような声を耳にした。その部屋はかつて蠅男が帆村を狙ううちにした暗い部屋だった。

扉を蹴破つてみると、果してその小暗い室内に、洋装のカオルと山治とが荒縄でもってグルグル巻きに縛り合わされていた。

帆村は愕いて、すぐさま二人の戒いましめの縄を解いてやった。

二人は再生の悦びを交こも々のべた後で、偽の父と見破つた瞬間に、忽ちこんな目に合ってしまったことを説明した。帆村は、それこそ怪物蠅男が化けていたのだ、といえれば山治は、

「——その蠅男は、僕たちが階下の応接室で喋っていたことを、マイクロフォン仕掛で、すっかりこつちで聞いていたんだって云っていましたよ」

「そうなんですのよ。あたくしが父の身体の特徴について、貴方に申し上げようとしたので、それを喋られては大変と愕いてこの階上に呼びあげたのですわ。あたくしも、もうすっかり覚悟をしてしまいました。父は蠅男のためにストーブの中で焼き殺されたに違いありませんわ」

「なるほど、あの焼屍体の半焼けの右足の拇指が半分ないのは、お父さまの特徴と一致するというわけですね」

カオルはそれに応える代りに、はふり落ちる涙を手で抑えつつ

大きくうなず頷いた。無慚むざんな最期を遂げた亡き父に対する悲しみが、今や新たになみだ涙を誘ったのに相違なかつた。

「お嬢さん。ドクトルはどうして蠅男に殺されるようなわけがあつたのでしようネ」

と、帆村が率直たすに質ねると、カオルは涙に泣きぬれた白い面をあげて、

「さあそれが、あたくしには一向心当りがございませぬのです」
「うむ、貴方にもやはり分りませんか」

帆村は、また一つ希望を失つた。

だが根本によこたわる彼の信念は微動もしなかつた。蠅男の兇き
刃ようじんに斃たおれた鴨下ドクトル、それから富豪玉屋総一郎、最近に

元検事正塩田律之進——この三人は、何か蠅男から共通の殺害理由をもちあわしていたに違いないということだ。その殺害理由を探し出すことが、この大事件を解決する一番近道であらねばならぬ。一体それは何だろう。

この最初の被害者である鴨下ドクトル邸内にも、必ずやその殺害理由を説明するに足る秘密材料の一つや二つが隠されているに相違ない。この際、出来るだけ早くそれを探しあてることだ。

帆村は、心の中にうなずいて、小暗い部屋の中を見廻した。暗さの中に瞳が慣れると、この部屋は書庫であるのに気がついた。その書庫には、プーンとかびの生えた匂いのする古い図書が何万冊となく雑然と積みかさねられてあったのである。

いま帆村の感覚は針のように尖っていた。彼はその堆うずたか高い古書の山を前に向いあつていたとき、不ふ図と一つの靈感を得た。

(——この古書の中に、なにか参考になる記録が交つておりはしまいか?)

そう思いつくと、帆村は猛然と活動を開始した。彼はその堆高い古書を、片っぱしから調べ始めたのである。

カオルと山治も、帆村のために進んで協力を申出でた。そこで三人は、鼠のようになって、古書の山を切り崩していった。

小半時間も懸つたであろうか。

「うむ、あつたぞツ！」

と、突然帆村が叫んだ。カオルと山治が愕いてその方を見ると、

帆村探偵は、空っぽになった本棚の隅から一冊の皮表紙の当用日記を、頭上高くさしあげていた。

「これだこれだ。ドクトルの日記だ。塩田検事正の名が出ている！」

「ええッ」

「まだある。玉屋総一郎の名もあるんだ」

帆村探偵は興奮のあまり、ドクトルの日記帳をもつ手のブルブル慄えるのをどうすることもできなかつた。

鴨下ドクトルの日記帳の中には、そも如何なる大秘密が認められてあつたらうか？

縮小人間の秘密

実に貴重なる鴨下ドクトルの日記帳だった。

プーンと黴の匂いが鼻をうつその黄色くなつたドクトルの日記帳のページの中から、永らく帆村の知りたいと思つていた「蠅男」の正体が遂に顔を出したのであつた。

帆村は、青白い額の上にジツトリとあぶらあせ脂汗にじを滲ませながら、

日記帳の中に認められていた愕くべき十年前の秘密について、ドクトルの遺児カオルとその愛人との前に説明をした。その大略は

次のようなものであった。

*

その日記帳を展げてみると、まずドクトルが一つの素晴らしい医学的研究を思いついて、たいへん得意らしい文章が目についた。そこには、その研究がどんな素晴らしい内容をもっているのか、それには触れていなかった。

其の次には、ドクトルはその研究材料となってくれる人間を何とかして獲たいものだ、とくどくと熱望の言葉がたらねてあった。

それからしばらくページを繰ってゆくと、こんどはいよいよ念願が叶って、近く試験台になる人間を手に入れることができるか

もしれないと書いてあった。

時の塩田検事正の名が登場したのも、それから幾日と経たないのちのことだった。塩田検事正は、予（ドクトルのこと）の願いを入れて死刑囚を一旦処刑後引渡すから後はそのまま死なすなり生かすなり思うようにしろと云ってくれたこと、但しこれが他に知れると由々敷ゆゆしき大事だいじであるから絶対秘密を守るようにという条件を持ち出されたことが認められてあった。

それから一週間ほどして、日記帳のページは何のためか十日間ほど空白のまま残されていたが、その後の日附のところには、突然のりもとせんしろう糊本千四郎の名が現われ、しかも毎日附け落ちもなくその消息がつけてある。この様子から見ると既に糊本はドクトル邸に同

居しているらしかった。

二十八歳の死刑囚糊本のことについては、ずっと後に数頁を費ついやして詳しく説明がしてあった。それによると、死刑囚糊本は南洋で案内人を業としているうち、日本から出稼ぎできていた西山某なる商人の所持金を奪うため、海岸の人気のないところで棍棒をふるって無慚むざんにも撲殺し、所持金を奪って逃走した。誰知らぬと思いの外、ほかそれを同じくこの地に出稼ぎ中の同郷の人、玉屋総一郎に見られてしまい、後に裁判所に於て玉屋の証言が取上げられ、糊本は遂に死刑を宣告されたとある。

その殺人犯の糊本が刑死すると、塩田検事正の取計いで彼のみだ生温い屍体はドクトル鴨下の待つていた寝台自動車のなかに搬

びいれられた。

糊本はドクトルの手で、見事に蘇生^{そせい}せしめられた。しかし彼は蘇生したことを悦ぶ前に、身動きならぬほど嚴重に手術台の上に縛りつけられている我が身を怪しまねばならなかった。彼の眼は、ピカピカ光るメスを手にした鴨下ドクトルを見つけた。「何事？」と詰問しようと思つたとき、彼の鼻孔には麻醉薬の高い匂い^{にお}が香つた。——ドクトルの実験は、そのような光景の中に始まつたのである。

鴨下ドクトルは、糊本の手足を、惜し気もなく電気メスで切断した。そればかりではない。腹腔をたち割つて、腸を三分の一に縮めた。胃袋はすっかり取り去られて、食道と腸とが連結された。

肺臓とか腎臓とか二つある内臓の一つは切除された。不用な骨や筋肉が取り去られた。満足なのは頸から上だけだった。四時間ほどのうちに遂に手術台の上の糊本の身体は、見るかげもなく小さく縮められた。まるで首の下に肉色の男枕をくくりつけたような畸形人間となり果てた。なんとむざんという無慚な浅ましい姿に変わってしまったのだろう。

鴨下ドクトルは、始めてホツと息をついた。こうして大実験のための手術だけは終わったのである。彼はなぜこんな残虐きわまる畸形人間を作ったのであろうか。

鴨下ドクトルは、一つの大きな学説を持っていた。それをこの縮小人間によって確かめようと考えたのだ。その学説によると、

もし人間が生きるのに直接必要でない肉体部分——つまり心臓や肺臓は是非必要だが、手足や二つ以上ある内臓は、これを切除するか又は一つに減らしてしまう。そうすると人間の脳力は、手足などのことに煩わされることがなくなり、結局今まで無駄にたかっていた脳力が余ってくるから、従つてその人間は普通の人間よりも何倍も伶俐になる。——だろつというのが、縮小人間に対する鴨下ドクトルの学説だつた。この大胆なる学説が、果して正しいかどうか、鴨下ドクトルはそれを人類文化に大なる貢献をする研究だと思ひ、遂にその実験台となる人間を親しい塩田検事正に無心したのである。そこで死刑囚糊本が選ばれ、大手術の結果、ここに通称「蠅男」の誕生となつたものである。鴨下ドクトルの

日記によれば、この縮小人間は体力の回復とともに、予期したとおり普通の人間とは比べものにならぬほどの伶俐さを示した。鴨下ドクトルの悦びは、何物にもたとえ難かったが、彼はこの発表をさしひかえて、更に縮小人間の完成に研究をすすめたのであった。蠅男は今やドクトルの懸けがえのない優れた助手だった。二人の共同研究で、電力や磁石で働くという巧妙な新義手や義足を作製した。この組立式の手足のため、蠅男の立居は非常に便利になった。実に愕くべき成功だった。

しかし鴨下ドクトルは、どうやら大事なことを忘れていたようであった。ドクトルはそのことを日記の終りの方に自ら記しているが、それはこの蠅男の修理された脳力は、あまりにも超人的で

あつて、不世出の大天才と折紙をつけられた鴨下ドクトルの脳力さえ、蠅男の脳力の前には太陽の傍の月のように見劣りがするといふ事実だつた。それは愕くというよりも、むしろ恐ろしいことであつた。ドクトルの日記は次のような文句をもつて結ばれてゐた。

「——予はあまりにも、神を忘れて魔の学問の中に足を踏み入れすぎた形だ。予は『縮小人間』を^{こしら}拵えたことを今や後悔している。出来るなら、今宵のうちにも、この『縮小人間』を殺してしまいたいと思う。そうすることが、自分の研究を永久に葬りさり、そして万一『縮小人間』が世の中に飛びだして、前代未聞の超人的暴行を働くのを^{あらかじ}予め阻止することにもなるのだ。一刻も早く彼を

殺さねばならぬ。しかし予は懼れる。あの恠癡な『縮小人間』が予のこの危惧と殺意に気づかぬ筈はないのだ。今や時既に手遅れなのではあるまいか。

予は今日になって、幼なきときに人手に預けてしまった只一人の子供カオルのことを想う。おお吾が愛するカオルよ。汝の父は愛しき御身を今日まで忘れていた。汝の父は、その罪のために、今や悪魔の牙に噛みくだかれようとしているのだ。罪の父はただひと目、御身の顔かんぼせを見たいと切望するが、その願いも今はもう空しき夢と諦めなければならぬのかもしれない、噫あゝ！」

帆村の読みあげる天才ドクトルの切々の情をこめた日記の文句に、遺児カオルは慄こらえに慄こらえていた悲しみの泪をおさえかね、ワ

ツと声をあげて愛人山治の膝に泣き崩れた。

さて探偵帆村莊六の努力が遂に酬いられて前代未聞の「蠅男」の全貌が始めて明らかになった。中でも悦んだのは、府下を守る捜査陣であつた。村松検事も自由の身となつた。蠅男が検事に塩田先生殺しの罪をぬりつけようとした次第が明らかになつたので。蠅男は鴨下ドクトルに化けて洗面所に入ると見せ、すぐさまその窓から法曹ビルの外壁を、あの巧妙な鉄の爪でもって匍匐のぼり、窓の外から塩田先生の頭蓋骨に用意の文ぶんちん鎮を発射したことが判明したのだつた。村松検事は、帆村の顔を見るや走りよつて固い握手をした。それは冷静を以て聞える村松検事にしては、先例のない昂奮状態であつた。帆村も強くその手を握りかえし、

「さあ、村松さん。ぐずぐずしてはられませんよ。蠅男は想像以上に恐ろしい奴です。亡き鴨下ドクトルも、万一蠅男が市中にとび出したときには、その卓越した頭脳力をもって、どんな狂悪極まる暴行をするかしのれないと云っています。あの右手左手の機関銃やなんかのカラクリも、蠅男がドクトルに隠れて作りあげたものに相違ありません。さあ、われわれは一刻も早く、市民の安全のために、恐るべき蠅男を捕えなければなりません」

「そうだ」と村松検事も警官隊の方をふりむき、「蠅男の恐るべき正体はようやく分つたが、蠅男は毒牙を磨いて、暴行の機を狙っているのだ。^{きやつ}彼奴を捕えてしまわないうちは、われわれは枕を高くして眠れないのだ。さあ、こうなったら決死の覚悟で、直ち

に蠅男狩りを始めるんだ！」

警官隊も、この検事の激励の辞にふるい立った。そして此処に、大阪全市をあげての警備陣が組織され、嚴重を極めた大搜索戦の幕が切つて落とされた。怪人蠅男は、そも何処いずこに潜んでいたのであろうか。

警察投書

稀代の怪人「蠅男」の世にも恐ろしき正体は遂に曝露ばくろした。

青年探偵帆村莊六の必死の努力は、警察官をよく援^{たす}けて、この前代未聞の怪事件の謎を解くことに成功したのだった。

ただ惜しいことには、もう一步というところで、怪人「蠅男」を逃がしてしまったことである。

蠅男は、しかしながら、帆村の得意とする投縄によつて、機関銃仕掛になつている左腕を肩のところから挽^もぎ落とされ、あまつさえ左の足首さえ切断されてしまった。蠅男の勢いは、それだけ削がれたのであつた。これは皆、帆村の直接手を下した殊勲であつた。

だが普通の人間とちがい、勝れた智能をもつた蠅男のことだから、いついかなる手をもちいて又^{またぞろ}候暴逆の拳に出てくるか分ら

ない。だから結局、蠅男を完全に逮捕してしまわないうちは、大阪全市の市民たちは、枕を高くして睡ることができないわけだった。

帆村探偵を激励する手紙や、警察官の奮起をのぞむ投書などが、毎日のように各署の机の上にうずたかく山のように積まれていった。

蠅男は何処に潜んでいるのであろうか。

多分、お竜と呼ばれる彼の情婦と手を組みあつて、市内に潜伏しているのであろう。

さあいま一息だとばかり、係官はじめ帆村探偵も、昼夜を分かたず、蠅男の逃げ去った跡を追い、要所要所を隈なく探していっ

たのであるが、蠅男の隠れ様がうまいのか、それとも係官たちの探し様が拙いたためか、尋ねる蠅男の行方について、何の手懸りも発見されなかつたのであつた。住吉署の捜索本部には、連日の活動に協力した人々が集つていた。

「どうも弱つたなア。近来投書が、なかなか辛辣になつてきましたよ。蠅男なんて、探偵の夢にすぎなかつたのではないかなどというのがある」

と、帆村もつい滾こぼせば、

「大阪府の警察で間に合わないようなら兵庫県の警察に頼んでみたらどうや、などと書いて来るやつが居る。なんで、隣りの警察の手を借りる必要があるんや。そういわれて腹が立たん者がある

やろか」

正木署長も投書のハガキを握ってカンカンに怒っていた。

ひどい者になると、小包郵便で坊主枕を送ってきた。その附け文句に、

「こつちは枕を高うして睡られへんさかい、この枕はそつちへさし上げます。警官さんはお昼寝にお夜寝ばかりにお忙しいんだつしやろから枕もさぞ痛みますやろ。そのときは御遠慮なく、この枕をお使い遊ばせ」

村松検事がこれを見て熊くまの胆いをなめたような顔をした。

「これは投書にしても、最さいあくしやう悪性しやうのものだ。警察官侮辱も、実に極まれりというべきだ」

どうやら検事も、本当に怒っているらしい。

帆村も、この枕の小包には呆れるあきより外なかつた。彼は差出人の悪意の籠るこもその美しい坊主枕をとりあげて、つくづくと眺め入った。

「オヤ、——」

と、彼はそのとき叫んで、枕に耳をソツと当てた。

「これはいかん。皆さん早く逃げて下さい」

そう叫ぶと、帆村は脱兎のように窓際にかけてだした。そして川に面した硝子窓をガラリと明けるが早いか、手にしていた美しい坊主枕をエイツと川の中へ投げこんだ。

「どうした」

「どうしたんや」

と、皆はかえって帆村の方に駆けよつてきた。そのときだった。どどーン。

川中に、時ならぬ烈しい爆音が起り、枕を投げこんだところに、水煙が一丈もドーンとうちあげられた。

「呀あッ、——」

「ば、爆弾やあれへんか」

署員ことごとは悉く窓にかけよつて、なおも大きく息をする河面を凝視した。

「爆弾仕掛の枕なんですよ」と帆村が汗をぬぐいながら説明した。枕を持ってみると、コチコチと変な音がするので気がついたの

です。なアに、よくあるやつですが、時計仕掛の爆弾ですよ。僕たちを皆殺しにしようと思つてたに違いありません」

「なんちゆう悪たれの市民やろ。断然取締らんとあかん」

「いや、これは市民といつても、普通の市民じゃありません」

「普通の市民でないちゆうと、——」

「つまり、これは蠅男が差出した小包なんですよ」

「うむ、な、なるほど」

一同はいまさらながらに、狂暴な蠅男のやり方に憤慨ふんがいの色を示した。

怪あやしき女

「おい帆村君。僕はまた君のおかげで命拾いをした。お礼をいう」と、村松検事は、帆村の手を固く握った。

「帆村はん。私もお礼をいわしとくんははれ」と、正木署長もうやうやしく頭を下げた。

帆村はゆかしくもそれを冗談と受けながし、

「爆弾の危難は助かりましたから、それはいいとして、ここで考えてみなければならぬのは、蠅男がどうしてこんな精巧な爆弾を手に入れたかということ。こんなものは、どこでも作れると

いうものではありません。僕の考えでは、蠅男はかねてこんな爆弾を用意してあつたのだと思います」

「そうだ。そのとおりだろう。蠅男は孤立した殺人魔だ。ギャング組織ではないと思う」

「それなら正木さん」と帆村は署長の方をふりむき、「僕は蠅男が依然として、鴨下ドクトル邸に出入しているのじゃないかと思えますよ。爆弾は、あの邸内のどこかに隠してあるのでしょうか」

「そんなこと不可能だすな」と署長は不服であつた。「警戒は屋内屋外にあつて嚴重にしとるのでつせ。そして邸には、ドクトルの遺児カオルはんと許いいなすけ婚いの山治はんが、無事に暮しとりますんや。もし蠅男が入りこんだのやったら、どこかで誰かが見つけ

る筈ですがな」

「いや、この爆弾を見ては、僕はどうしても蠅男が、ドクトル邸の秘密倉庫なんかに出入しているとしたか考えられんです」

「秘密倉庫？ そんなものが、どこかに拵こしらえてありますのか」

「もちろん僕の想像なんです。なお僕は、この小包を見て考えました。蠅男は、あまり遠くへいつていないということですよ」

「それはまた、なんです」

「小包の消印を見ましたか。あれは郵便局で押したのではなく、手製の胡魔化ごまかしものですよ。だからあの小包を持って来た郵便局の配達夫というのは、恐らく蠅男の変装だったにちがいありません。蠅男に対する監視は嚴重なんですから、蠅男がここへ出てく

るようでは、その辺に潜伏しているのに違いありません」

「そんなら、この小包を持って本署に来た配達夫が蠅男やったんか。そら、えらいこつちや。追跡させんならん」

「署長さん、もう遅いですよ。いまごろ蠅男は、どつかその辺の屋上に逃げついて、そこからこつちの窓を見てニヤツと笑っているでしょう」

「そうか、残念やなア」

蠅男が近所に潜むひそという帆村の推理に、村松検事も賛成の意を表した。

それではというので、すぐさま捜査隊が編成せられて、一行は直ちに鴨下ドクトル邸に向った。

嚴重な捜査の結果、帆村の云ったとおり、はたして秘密倉庫が地下に発見せられた。それは、勝手許の食器棚のうしろに作られていたもので、ボタン一つで、自由にあけたてできるようになっていた。

一行は、いまさらのように愕いたが、中に入ってみて二度びつくりした。倉庫の中には、まだ五つ六つの爆弾やら、蠅男が使ったらしい工具や材料が一杯入っていた。

「さあ、そういうことになる、蠅男はどないして、ここへ出入したんやろ。そいつを調べなあかん」

正木署長は俄かに奮にわいたって、取調べを始めた。カオルも山治も、蠅男らしい人物がこの家に入ふる入してない旨を誓った。

警戒中の警官も、同じことを証言した。

お手伝いさんが一人と、派出婦が一人といるが、お手伝いさんも知らぬと答えた。このお手伝いさんは城の崎の在から来ている人で、先日まで近所の下宿で働いていた身許確実な女だと知れた。派出婦は、生あいにく憎外出していた。これは身許もハッキリしていなかった。年齢の頃は二十三、四。名前は田た鶴ず子こといった。顔は丸顔だという。

「田鶴子——というんだネ」

この田鶴子なる派出婦は、一行が到着する直前、ちよつと薬屋に買物にゆくと出していったそうだが、それがなかなか帰つて来なかった。そこで警官の一人を、その薬局へ派遣して調べさ

せることにした。

間もなくその警官が帰ってきて、

「近所の薬屋を四、五件調べてみましたんやけれど、どの家でも、そんな女子は来まへんという返事だす。けつたいなことですなア」
帆村はそれを聞くと、ポンと膝を叩いた。

「呀あッ。わかりましたよ。その田鶴子という派出婦は、もう二度とこの家にかえつてきませんよ」

「なぜだい」検事が聞いた。

「いや、その田鶴子という派出婦は、蠅男の情婦のお竜りゆうが化けこんでいたに違いありません。蠅男では、到底とうてい入りこめないから、そこでお竜が化けこんで、秘密倉庫のなかのものを持ち出して

たんです。丸顔といいましたネ。お竜を見た人間は、そう沢山いないのです。僕は宝塚で二度も見かけて、よく知っています。正にお竜にちがいません」

「な、なんとという大胆な女だろう」

「さあ皆さん、これによつても、蠅男はいよいよこの附近に潜伏していることが明白になったじゃありませんか。一つ元気をだして、蠅男を探しだして下さい」

帆村の言葉に、一座は急にどよめいた。

地下に潜る

こうなったら、死闘である。

恐るべき機械化された殺人魔を、一日いや一時間でも早く捕えることが出来れば、どれだけ市民は安堵あんどの胸をなでおろすか測りしれないのである。

帆村は、とうとう意を決して、警察側と全然はな放れて、巷ちまたに単身、蠅男を探し求めて、機をつかめば一騎うちの死闘を交える覚悟をした。

それを決行するに当って、糸子の小さな胸を痛めないようにと、帆村は彼女の家を訪ねて事態を説明した。

糸子は帆村がこの上危険な仕事をすることに忠言を試みたけれど、彼の決意が、市民を一刻も早く安心させたいという燃えるような義侠心ぎきょうしんから発していることを知ると、それでも中止するようにとは云えなかつた。

「帆村はん。これだけは誓うとくれやす。必要以上に、危険なことをしやはらへんことと、それからもう一つは、——」

「それからもう一つは？」

「それからもう一つはなア、一日に一度だけは、うちへ電話をかけとくんはらんか。そうしたら、うち安心して睡られます。よろしまんな」

「はッはッ、まるで坊やとのお約束みたいですが、たしかに承知

しました。ではこれで、僕はかえりませぬ」

「あら、もう帰つてだすの。まあ、気の早い人だんな。いま貴郎あなたのお好きな宇治羊羹を松が切つとりまんがな。拝みまつさかい、どうぞもう一遍だけ、お蒲団の上へ坐つて頂戴な」

糸子は、真剣な顔をして、いつかな帆村を帰そうとはしなかつた。

帆村は予定どおり、夜の闇にまぎれて、浮浪者姿で天王寺公園に入りこんだ。

「こらッ、お前なんや？」

乾からびた葡萄棚の下にうずくま蹠つたとき、口ハ台に寝ていた男がムクムクと起きあがって、帆村にけんつく剣突をくわせた。

「ああ、おらあ新入りなんだ。こつちの親分さんに紹介してくれりや、失礼ながらこいつをお礼にお前さんにあげるぜ」

「な、なんやと。お前、東京者やな。おれに何を呉れるちゆうのや」

帆村は五十錢玉を掌の上ののせてみせた。かの男は、たちまちえびすがお恵比寿顔になつて、いやに帆村の機嫌をとりだした。

「ふーン、わしにまか委しといたらええねン。大丈夫やがナ。親分の名は藤三とうぞうというのや。紹介したる、さあ一緒にについてこい」

ならへい 檜平という男の案内で、帆村は藤三親分の配下に臨時に加えて貰うことになつた。

彼はここでも、いささか金を親分に献上することを忘れなかつ

た。

「あんまりパツパツと金を使うのはあかんぜ」

と、早速さっそく親分らしい注意をした。

「へえ、相済みませんです」

それから藤三親分は、帆村にいろいろと仲間の習慣の話や、縄ばりのこと、持ち場などについて、こまごました注意を与えたのち、

「さあ、これは今夜の、わしからの引出物や。これを一枚、お前にやる」

と云つて、一枚の紙札をくれた。

帆村が何だろうと思つてみると、それは新別府温泉プールと書

いた一枚の入浴券であつた。

「へえ、どうもこれは、——」

「今夜入ってきたらええやないか。そこは十日ほど前に建つた大浴場兼娯楽場や。もちろんぬかりはあらへんやろが、わし等の行く時間は、午後十二時を廻つてからでやぜ。忘れんようにな。櫛平にも、これを一枚やる」

親分は二枚の入浴券を下された。

はなは

帆村にとっては、甚だ迷惑なことであつた。そんなことよりも、早く蠅男の所在を探りたいのだった。だが親分さまからの折角の下され物である。行かねば、後の崇たりの恐ろしさも考えねばならない。やむなく帆村は、その新別府温泉プールなるものに、櫛平

とともにでかける決心をした。

だが、まさか其^{そこ}処に、たいへんなものが待ち構えていようとは、
ついで気がつかなかったのである。

砂風呂の異変

榎平と帆村とは、恐^{おそ}る恐^{おそ}るその新別府温泉プールの入口へ切符
を出してみた。

プールでは、なんと思つたか、たいへん鄭^{てい}重^{ちゆう}に二人の到来

を感謝してくれた。それも一に藤三親分の偉力いりよくのせいであろうと思われた。

裸になつて浴場へ足を入れてみると、なるほどこれは、入浴ずきの大阪人でなければ、ちよつと出来そうもない広大なる共同浴場であつた。その中央に、大理石で張りめぐらされた直径十メートルの円形のプールが作つてあつた。そのまわりも広い大理石の洗い場になつていて、そこに二、三人の人たちが広々と両手両足をなげだして、湯にのぼせた身体をひやしていた。

「どこが新別府なんだろう。プールは別に別府らしくも何ともないじゃないか」

と帆村がいうと、櫛平は指をさして、

「新別府ちゅうのは、この奥にある砂風呂のことや。そのわりに流行つてえへんけれどなあ。よかつたら行つてみなはれ。ええ女子がおつて、あんじよう砂をかけてくれるがな」といった。

帆村は妙な気になった。

今夜からいよいよ死闘だと覚悟していたのに、それがこんな風に呑氣のんきに浴場に入つて汗を流せるなんて、夢のような話ではないか。

しかし実をいえば、帆村もまた大阪人に負けぬくらい風呂好きであつた。別府式の砂風呂と聞いては、もうじつとしていられなかつた。櫓平をプールに残しておいて、彼はその砂風呂のある別館の方へ手拭片手にノコノコと歩いていった。

なるほど別館建てのこの砂風呂は、思ったよりお粗末だが、ともかくも別府を模倣して、およそ二十畳敷くらいの一室全部を綺麗な砂で充たしてあつた。そして、中には湯気がモヤモヤとたれこめていて、電灯がほの暗かつた。

中はガランとしていた。

ただ一人、あまり上手ではない浪花節を、頭の天頂てっぺんからでるような声でうたっている客があるきりだつた。

「—— わざとよろめき立ち上り、心は後にうしろ髪、取つて引かるる気はすれどオ。気を励ました内蔵助エ、——」
くらのすけ

と、うたうは南部坂雪なんぶざかの別れの一節だつた。この節は、頗るすこぶ古い節まわしだつた。このうたい手は、砂の中から首だけだして、

向うの壁に向いたまま、真赤になって唸っているのだった。

帆村は、これも奥へよつたところを選び、両手で砂を掘って穴をこしらえていった。砂を掘ると、あとから湯がドンドン湧いてきた。彼はほどよい穴をつくると、そのなかにポチャンと身体をつけた。なかなかいい気持であった。

相客はまだ浪花節をうなりつづけていた。

帆村は身体をゴソゴソ動かして、その相客と同じように胸のあたりにしきりに砂を掻きよせた。

そのとき一人の女が、室内に入ってきたのを感じた。緋かすりの着物を、短く尻はしよりをして、白い湯文字を短くはいていた。

その女はいきなり帆村の方へやってきて、

「おいでやす。もっとうまいこと砂をかけてあげまひようか」

といつて、彼のうしろにまわり、肩のところへ砂をバサバサか
けてくれた。

「ありがとう。もういいよ」

と帆村がいった。女は黙って、なおも砂を帆村の頸の方にまで
積んでいった。女はさっきの愛想笑いに似ず、急に無口のように
なつて、帆村の頸のあたりに、妙な具合に両手をからませるので
あつた。

(変だぞオ)

と思つたその刹那、^{せつな}それまで帆村の頸のまわりを戯れ^{たわむ}のように
搦^{から}んでは解け、解けてはまた搦^{から}みついてきた女のしなやかな指が、

板片のような強さでもって、帆村の頸をグツと締めつけた。彼は愕おどろいて砂の中から立ち上ろうとしたが、女は盤ばんじやく石いしのように上から押しつけていて、帆村の自由にならない。その上、女の指は頸をギュウギュウしめつけてくる。向うの相客あいきやくに助けを求めようとしたが、声の出るべき咽喉のどがこの有様で、呻うなることさえ出来なかつた。そのとき向いのうしろ向きになつていた男が、急にピタリと浪花節をやめた。

「やれ、気がついてくれたか」

と思つて悦よろこんだのは、ほんの一瞬間であつた。

相あいきやく

客は砂の中に、その長い頸くびをグツと曲げて、帆村の方を

眺めた。彼はすべてを呑みこんでいるという風にニヤニヤと笑つ

ているのだった。長い顔、そして大きな唇。その顔！

「おお、貴様は蠅男だな」

帆村は口の中で呀あツと叫んだ。

砂の中から出ているのは、蠅男の頸だったのである。悪逆残忍、たとえるに物なき殺人魔・蠅男の首に外ほかならなかつた。

「お竜りゆう、しつかりおさ圧えている」

蠅男は底力のある低い声で呶どな鳴つた。

お竜！ するといま帆村の頸くびをおさ圧えつけているのは、蠅男の情婦のお竜だったのだ。

よくもここまで帆村を引ずりこんだものである。いや、これは蠅男が一步先の先まわりをして、ここにかんせい陷阱を設けておいたも

のであろう。帆村の想像していたとおり、天王寺公園付近に蠅男は隠れていて、そこを縄ばりとする仲間の誰彼と、緊密な連絡をとっていたものらしい。

帆村はいまや風前の灯であった。お竜がこの上グツと手に力を入れるか、それとも蠅男が砂の中から飛びついてくれば、もうおしまいだった。

帆村一生の不覚だった。

彼は頸を締めつけられるあまり、だんだん朦朧もうろうとなってくる意識の中で、なんとかしてこの危難からのがれる工夫はないものかと、働かぬ頭脳に必死の鞭むちをうちつづけた。

死線を越えて

稀代きだいの怪魔かいま「蠅男」の暴逆ぼうぎやくのあとを追うて苦闘また苦闘、
 神のような智謀をかたむけて、しかも勇猛果敢な探偵ぶりを見せ
 た青年探偵帆村莊六も、いま一步というところで、無念にも蠅男
 とお竜の術中おちいに陥り、いま湯気に煙る砂風呂のうちに惨殺ざんさつされ
 ようとしているのであった。なんとという無慚むざん、なんとという口惜し
 さであろう。

お竜の十本の指がやさしき女とは思われぬ恐ろしい力でもって、

帆村の頸を左右から刻一刻と締めつけてくるのだった。起き上ろうとするが、生憎首あいにくのところまで砂に埋っており、肩の上からはお竜のはちきれるように肥えた膝頭が、盤石のような重味となつて圧おしつけていたのであつた。これでは身動きさえできない。(参つた。——しかしまだ血路の一つや二つはありそうなものが！)

帆村は全身の血を脳髓のなかに送つて、死線を越えようと努力をつづけていた。

「こゝ、殺される前に——」

と、帆村はふりしぼるような声をあげた。

「しッ、静かにしろ」

と、蠅男は依然として砂のなかから首だけだして眼を剥いた。

「こ、殺される前に、一つだけ聞きたいことがある。く、頸をすこし、ゆ、ゆるめて……」

それを聞くと、蠅男はなに思ったか、お竜の方にそれとサインを送った。その効目ききめか、お竜の指の力は、申訳にすこしゆるんだようだ。

「早く云え」

「うむ」と帆村は喘あえぎ喘あえぎ「貴様は、なぜあの三人を殺したのだ。鴨下ドクトルと玉屋と塩田先生と、この三人を殺すには定めさだし理由があつたらう。それを教えてくれ」

「そのことか」と蠅男はたちまち見るも残忍な面になって、

「冥土めいどの土産にそれを聞かせてやろうか。鴨下というエセ学者は、五体揃った俺の身体を生れもつかぬこんな姿にしてしまった。自分のために、他人の人生を全然考えないひどい野郎だ。それを殺さずにやいられるものか。玉屋のやつは余計なおせっかいをしやがったため、俺は永い間牢獄につながれるし、死刑まで喰った。俺が南洋で西山を殺したのは、金に目がくらんだためばかりではなかった。彼奴あいつは、俺に勘弁ならない侮辱を与えたんだ。その復讐をしてやったのだ。塩田検事は、俺を死刑にしても慊あきたらぬ奴だと、ひどい論告を下しやがった。それがために、俺は無期の望みさえ取上げられてしまったのだ。どうだ、お前と俺とが入れかわっていたと考える。お前もきつと俺のようにしたに違いない

んだ」

なんという恐ろしい告白だろう。一応条理はたっているつもりで、悪いと思うどころか平然と殺人をやつて悔いなしとは、正に鬼畜の類であつた。

「まだ、やるのか」

「まだまだやつつける奴がいる。さしあたりお前をやつつけてやる」

「いつも脅迫状につけてあつた、あの気味のわるい手足を腕がれた蠅の死骸は？」

「分つているじゃないか。手足のない俺のサインだ」

帆村は、すっかり観念したように装いながら、実はしきりと時

間の経過するのを待っていたのだ。あまり長くなると、きつと連れの檣平が怪しんでこの砂風呂に入ってくるだろうから、そのとき騒げば助かるかもしれないと思っていたのだった。

「あの巧妙な手や足はずいぶん巧妙にできているが、一体何と何との働きをするんだ」

「あれはこうだ。まず右手の腕には……」

と、蠅男はついいい気になって、自分の巧妙な義手の話をはじめた。それを帆村は、さつきから待っていたのだ。突然彼は、

「えいッ」

と叫ぶなり、満身の力をこめて、砂の上にガバとうつ伏せになった。

「ああッ」

とお竜が叫んだときは、もうすでに遅かった。帆村の力にひかれて、お竜は強く前の方にグツとひかれ、ヨロヨロとなったところを帆村はすかさず、さっと身をうしろに開いたから、大きなお竜の身体は見事に背負い投げきまつて、もんどりうつて前に叩きつけられ、したたか腰骨を痛めた。それも道理であった。帆村はお竜の身体が、蠅男の首の真上に落ちかかるよう、うまい狙いをつけて、一石二鳥の利を図つたのだ。

「あッ、危いッ」

と蠅男が悲鳴をあげたが、既にもう遅かった。蠅男の首はズブリと砂の中にもぐりこんだ。

素晴らしい転機であつた。

帆村の沈勇は、よく最後の好機をとらえることに成功し、辛うかろじて死線を越えた。

帆村の身体は、いまや軽々と自由になつた。

砂の中にもぐりこんだ蠅男の苦しそうな呻き声。だが不死身の蠅男のことであるから、そう簡単に、砂の中で往生するかどうか。

蠅男は、まるで怒つた牡牛のように暴れだし、あたりに砂をピシャンピシャンとはねとばした。この怪魔に対し果して帆村に勝算ありや！

かがや
輝かしい凱歌

お竜が腰をおさえ、歯をくいしばっているのは、帆村にとってたいへん幸いだった。

帆村は素速く蠅男の背後にまわると、湯交りの砂の中にもがく蠅男を、うしろからグツと抱きあげた。

「ううぬ」

と蠅男は満身の力をこめて、抱えられまいと蝦のようにピンピン跳ねまわった。これを放してはたいへんである。帆村は両腕も千切れよとばかり、不気味な肉塊を抱きしめた。

蠅男は蛇のように首を曲げて、帆村の喉首に噛みつくこうとする。「もうこっちのものだ。じたばたするだけ損だぞ」

この言葉が蠅男の耳に入らばこそ、怪魔はなおも激しく抵抗する。さすがの帆村も、その大力に抗しかねて、押され気味となった。

だが帆村にはまだ、自信があつた。

彼は蠅男を抱きしめたまま、悠々と砂風呂の出入口から外へ出た。そして足早につつと走ってプールのある広間に駆けこんだ。

「皆さん、蠅男をつかまえましたッ」

というなり帆村はそのまま、ザンブリと熱湯満々たるプールの

中にとびこんだ。

「うわーッ」

と、これは蠅男の悲鳴だ。

帆村の作戦は大成功をおさめた。義足義手をつけては天下無敵の蠅男も、帆村に抱きしめられて暴れるたびに、ズブリズブリと水雑炊ならぬ湯雑炊をくらってはたまらない。二度、三度とそれをくりかえしているうちに、蠅男は、だんだんと温和しくなっていくた。

「さあ皆さん。住吉署に電話をかけて下さい。署長さんに、帆村がここで蠅男をおさえていると伝えて下さい」

この場の唐^{だしぬけ}突な乱闘に、プールから飛びあがって呆然として

いた入浴客は、ここに始めて、目の前の活劇が、いま全市を震しんが駭いさせている稀代の怪魔蠅男の捕物であつたと知つて、吾れにかえつて大騒ぎをはじめた。

帆村が、この何処に置きようもない重い肉塊を抱えて、腕がぬけそうに疲れてきたときに、やっと正木署長をはじめ、警官の一隊がドヤドヤと駆けこんでくれた。

「どうした帆村君。いよいよ蠅男を捕えよつたかッ」

「はア、ここに抱いて居ります」

「なにッ」と署長は目をみはり、「おおそれが蠅男か。想像していたよりも物凄いやつちやア。待つとれ。いま皆におさえさせる。

そおれ、掛れッ」

署長がサツと手をあげると、警官たちは靴のままプールの中にザブンと飛びこんできた。

「オヤ、——」

と近づいた警官が愕きの声をあげた。

「蠅男は死んどりまつせ」

「ええッ、——」

「こつちへ取りまつさかい、帆村はん、手を放してもよろしまつせ」

「そおれ、——」

警官隊の手にとって抱きとられた怪人蠅男の肉塊は、
蒟蒻こんにやく

のようにグニヤリとしていた。そして口から頤にかけて、赤い糸

のようなものがスーッと跡をひいていた。血だ、血だ！

「舌を噛みよったな。ええ覚悟や」

と、いつの間に来ていたのか、正木署長が沈痛な声でいった。
「ああ、とうとう蠅男は死にましたか」

そういつた帆村は、はりつめた気が一度にゆるむのを感じた。

「おツ、危い。どうしなはった、帆村はん」

鬼神のように猛たげき帆村だったけれど、蠅男の自殺を目のあたりに見た途端とたん、激しい衝動のために、遂に意識をうしなつて、警官たちの腕の中に仆れてしまった。

「無理もない。蠅男と、徹頭徹尾闘つたのやからなア」

そういつて正木署長は、ソツと帆村の腕を握つて脈をさぐつた。

*

もちろん帆村は、間もなく意識をとりかえした。そしてあとは元気に、蠅男事件の後始末に力を添えたのであった。

その後になつて、当時までまだ誰にも知られなかつた無慚な一つの事件が明らかにされた。それは事件の途中から行方不明になつていた池谷医師の屍体が、彼の控家の天井裏から発見されたことであつた。彼は蠅男のために、そこに手足の自由を奪われたまま監禁されていたのだつた。そして誰も食料を搬はこぶ者がなかつたままに、とうとう餓死してしまつたものである。これも蠅男の残忍性を語る一つの材料となつた。

池谷医師は、蠅男のような悪人ではなかつた。ただ彼は蠅男か

ら、一つの弱点を握られていたのであった。それをいうと、またくどくなるが、要するに蠅男の情婦お竜と昔関係のあつた仲で、お竜は彼のために捨てられた女だったといえ、あとは誰にもそれと察しがつくであろう。彼はそんなことで、心ならずもある期間は蠅男やお竜と行動を共にしていたのである。

それはその年も押しつまって、きよう一日の年の暮だというその日の朝、大阪駅頭に珍しく多数の警察官を交えた見送りをうけつつ、東京行の超特急列車「かもめ」号の二等室で出発しようとする一組の新夫婦があつた。

「では、お大事に」

「新家庭は、いよいよ新しい年とともに始まるというわけだすな」

「まあ近いうち、お二人揃って大阪へ里帰りするのでっせ」

などと、朗らかなはなむ饞げの言葉はあとからあとへと新郎新婦の上に抛なげられる。

やがて、列車は出るらしく、ホームのベルはけたたましく鳴りだした。

そのとき人の垣をわけて、車窓にとびついた一人の紳士があった。これは村松検事だった。

「ああ、間にあつてよかった。君たちの結婚を祝おうと思って、大きなデコレーションケーキを注文して置いたのが、ばかに手間どつてネ。これなんだよ、やつと出来た」

と、車窓にさし込んだのは、大きな硝子器ガラスに入った見事なケー

キだった。

「よく見てくれ、これは君たちの好きな大阪名物の岩おこしで組みたててあるんだが、一かけずつ製造所がちがっていて、味もちがっているのだ。これを二人で仲よく食べながら、たまにや大阪のことも思いだしてくれたまえ」

若き夫婦は、感激のいろを現わして、この素朴ながら念の入った贈物を感謝した。

ベルの音がハタと止った。いよいよ発車である。見送りの人たちは、いいあわせたように両手をあげて、二人の新しい生活の門出に万歳をとなえた。

「帆村探偵、ばんざーい」

「花嫁糸子さん、ばんざーい」

いまは夫と仰ぐ帆村莊六とチラリと目を見合わせて、新婦糸子は羞しはずかそうにパツと頬を染めた。

それを望んで、見送り人たちの中から、また大きな賑やかな拍手が起つた。

列車は測りはかきれない幸福を積んで、徐々じよじよに東へ動きだした。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三二書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「講談雑誌」

1937（昭和12）年1月号～10月号

入力：tatsuki

校正：花田泰治郎

2005年5月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/ で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

蠅男

海野十三

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>